

八尾市

# 田井中遺跡 2・木の本遺跡

陸上自衛隊八尾駐屯地内電源施設新設等に伴う埋蔵文化財調査

2013年2月

公益財団法人 大阪府文化財センター

八尾市

# 田井中遺跡 2・木の本遺跡

陸上自衛隊八尾駐屯地内電源施設新設等に伴う埋蔵文化財調査



## 序 文

本書は、当センターが八尾市空港1-81の陸上自衛隊八尾駐屯地内で平成24年度に行った八尾（23震災関連）電源施設新設等に伴う埋蔵文化財調査の発掘調査報告書です。

田井中遺跡・木の本遺跡が広がる八尾市南部は、以前は古代以来の条里制地割の水田が良好に残され、それに沿って流れる小河川を小船が行きかう田園風景が広がっていた土地だったようです。

しかし、昭和16年の陸軍飛行場建設に伴い大規模な地形改変を受け、また、第二次世界大戦の戦禍を受ける事となりました。現在は陸上自衛隊駐屯地・民間の航空会社が利用する八尾空港・大阪府警八尾航空基地・地域防災拠点など、複合的な施設が集まり、大阪府内で独特な位置を占める地となっています。

そして、その盛土の下で過去の遺構・遺物が良好に保存され、近年の調査では膨大な量の弥生土器などが調査ごとに出土する遺跡として知られています。

それらの調査の結果、田井中遺跡は中河内で最古級の弥生時代集落が成立した遺跡であり、この地の弥生時代の幕開けを為した地である事が分かりました。

また木の本遺跡は田井中の集落の続きが広がる遺跡でもあり、集落の基盤ともなる水田が開発された場所に当たるとも考えられています。

今回の調査は公益財団法人大阪府文化財センターが担当する事となり、3ヶ月をかけて発掘調査を行い、古墳時代初頭の庄内式期の良好な一括資料や、大量の弥生時代前期から中期の遺物が出土するなど、多大な成果をおさめることができました。

最後に、調査にあたり、近畿中部防衛局、陸上自衛隊八尾駐屯地、大阪府教育委員会、八尾市教育委員会などの関係諸機関、ご指導・ご助言を賜った多くの方々々に感謝申し上げますとともに、今後とも当センターの調査事業に、より一層のご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成25年2月

公益財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 田邊 征夫





## 例 言

- 1、本書は、大阪府八尾市空港1-81陸上自衛隊八尾駐屯地内に計画された八尾（23震災関連）電源施設等に伴う田井中遺跡12-1調査区・木の本遺跡12-1調査区の発掘調査報告書である。
- 2、今回の調査は、「八尾（23震災関連）電源施設新設等に伴う埋蔵文化財調査」として、近畿中部防衛局と公益財団法人大阪府文化財センターとの間で、平成24年3月28日付けで、平成24年3月29日から平成25年2月28日の期間で委託契約を交わし、大阪府教育委員会文化財保護課の指導の下、平成24年7月2日から平成24年9月29日まで現地調査を実施した。  
その後、平成24年10月1日から報告書作成作業に入り、平成24年11月30日まで行い、平成25年2月の本報告書刊行をもって作業を完了した。
- 3、調査は以下の体制で実施した。  
〔調査・整理〕  
調査部長 江浦洋、調整課長 岡本茂史、調査課長 岡戸哲紀、主査（中部総括）秋山浩三、  
副主査 三宮昌弘
- 4、本書で用いた現場写真は調査担当者が撮影した。遺物写真撮影に関しては、調査課（中部）片山彰一が担当した。
- 5、現地調査の実施及び遺物整理にあたっては、八尾市教育委員会、大阪府教育委員会など関係諸機関、陸上自衛隊八尾駐屯地など関係各位をはじめ、多くの方々からご指導ならびにご協力を賜った。記して謝意を表したい。
- 6、本書の編集・執筆は三宮昌弘が行った。
- 7、本調査に関わる資料は、公益財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用される事を希望する。

## 凡 例

- 1、田井中遺跡12-1 調査区・木の本遺跡12-1 調査区の名称は、本文中では「田井中12-1・木の  
本12-1」と略す。図面のキャプション等ではさらに「12-1」も略す。
- 2、本書で用いる標高は全て東京湾平均海面（T.P. 値）を使用している。単位はmで表記している。
- 3、本書に掲載した全体図・遺構図などの座標は全て世界測地系に基づく平面直角座標系第VI系を使用  
している。単位は全てmで、表記は省略してある。
- 4、方位は全て座標北で表示する。真北は座標北より西に6° 49′、磁北は東に0° 12′ 振っている。
- 5、発掘調査及び遺物整理については当センターの『遺跡調査基本マニュアル 第2版』に準拠した。
- 6、土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2007年度版 農林水産省農林水産技術会議事務  
局監修・財団法人 日本色彩研究所色色彩監修を使用した。土質の記載法に関しては第3章第1節図3  
に見られる記載法に統一してある。
- 7、遺構番号は種類に関係なく通し番号で付け、現地調査時点から変更していない。種類名はその後変  
更したものもある。
- 8、挿図の縮尺は、全体図が100分の1、遺構平面図が20分の1、遺構断面図が20分の1、調査区壁土  
層断面図は40分の1、遺物は3分の1である。サヌカイト石器類は写真図版にスケールを写しこん  
でいる。
- 9、遺物実測図に関しては、強い屈曲は実線、弱い屈曲は開け幅1mm以上の二つ開き破線で、調整境は、  
開け幅0.5mmで、異種調整境は一つ開き破線、同種調整境は二つ開き破線で示す。釉・煤などの範囲  
は点線で示す。推定ライン・断面の粘土接合痕なども点線で示す。
- 10、「生駒西麓産胎土」の認定に関しては、胎土の色調ではなく、胎土内砂粒に、石英・長石に匹敵す  
るほどの量の角閃石があり、かつ、黒雲母も含まれ、チャートが含まれないものとした。  
出土土器の破片数の記載では、器種・文様などの項目は種別の後の括弧内に略称で記載した。  
時期区分では、初頭・前葉-末葉の五期区分と前半・後半の二期区分を併用している。ただし、弥  
生時代前期～後期の前～後葉は土器編年のI～V様式に対応した三期区分である。
- 11、写真図版の遺物は、全てサヌカイト製石器類である。図版内での大きさを揃え、縮尺は統一して  
いないが、1点ごとにスケールを入れている。
- 12、参考文献は第4章「まとめ」の末尾に記した。

# 目 次

序 文	
例 言	
凡 例	
目 次	
第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 経緯と経過	1
第2節 調査の方法	3
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査成果	7
第1節 木の本12-1の調査成果	7
第1項 基本層序	7
第2項 第1面	9
第3項 第2-1面	10
第4項 第3面	13
第5項 第4面	15
第6項 第5面	16
第7項 第6面	18
第8項 第6-2面	21
第9項 第7面	26
第10項 木の本12-1のまとめ	36
第2節 田井中12-1の調査成果	38
第1項 基本層序	38
第2項 第1面	42
第3項 第2面	44
第4項 第3面	45
第5項 第4面	46
第6項 第5面	48
第7項 第5-3面	50
第8項 第6面	56
第9項 第7面	80
第10項 田井中12-1のまとめ	90
第4章 まとめ	92
参考文献	
報告書抄録	

## 挿 図・表 目 次

図1 田井中・木の本遺跡周辺の主要遺跡分布図……………2	図25 田井中第5-3面63ピット遺物出土状況……………52
図2 調査区位置図……………5	図26 田井中第6面遺構出土遺物……………53
図3 木の本調査区壁土層断面図……………8	図27 田井中第5-3面65井戸遺物出土状況……………54
図4 木の本第1面全体図……………10	図28 田井中第6面全体図……………56
図5 木の本第12-1面全体図……………11	図29 田井中第5-3面117・134井戸遺物 出土状況図……………57
図6 木の本第2面6畦畔・7溝・8畦畔断面図……………12	図30 田井中第6面遺構出土遺物(その1)……………59
図7 木の本第2面8畦畔盛土内出土埴輪片……………13	図31 田井中第6面120落込・143井戸遺物出土状況……………60
図8 木の本第3面全体図……………14	表1 田井中第6面143井戸襖観察表……………61
図9 木の本第4面全体図……………16	図32 田井中第6面143井戸出土遺物(その1)……………67
図10 木の本第5面全体図……………17	図33 田井中第6面143井戸出土遺物(その2)……………68
図11 木の本第6-2面・第6-1層出土遺物……………19	図34 田井中第6面143井戸出土遺物(その3)……………70
図12 木の本第6-2面全体図……………22	図35 田井中第6面143井戸出土遺物(その4)……………72
図13 木の本第7面全体図……………27	図36 田井中第6面143井戸出土遺物(その5)……………74
図14 木の本第7面遺構出土遺物……………28	図37 田井中第6面95土坑・122落込遺物出土状況……………77
図15 木の本第7面土器出土状況……………29	図38 田井中第6面遺構出土遺物(その2)……………78
図16 木の本第7層・第8面遺構?出土遺物……………33	図39 田井中第7面全体図……………81
図17 田井中調査区壁土層断面図(北東壁)……………39	図40 田井中第7面158焼土土坑土器1……………82
図18 田井中調査区壁土層断面図(北西壁)……………40	図41 田井中第7面189土坑遺物出土状況図……………83
図19 田井中第1面全体図……………43	図42 田井中第7面189土器1……………84
図20 田井中第2面全体図……………44	図43 田井中第7層包含遺物(その1)……………86
図21 田井中第3面全体図……………46	図44 田井中第7層包含遺物(その2)……………87
図22 田井中第4面全体図……………47	図45 田井中第7層包含遺物(その3)……………89
図23 田井中第5面全体図……………49	
図24 田井中第5-3面全体図……………51	

## 図 版 目 次

図版1	1 木の本第6-2面全景
1	木の本第1面全景
2	木の本第2面全景
図版2	3 木の本第3面地層変形と乾痕
1	木の本第3面全景
2	木の本第4面全景
図版3	4 木の本セクション断面(1~4層)
1	木の本第6-2面44落込
2	木の本第6-2面45溝・54~56ピット
図版4	1 木の本第6-2面46落込木材1~3
1	木の本第5面全景
2	木の本第6面全景
図版5	2 木の本第6-2面48溝南東端
1	木の本第6-2面49落込
2	
3	
4	

- 5 木の本第7面全景
- 図版6
- 1 木の本第7面54土坑
- 2 木の本第7面65溝土器群1
- 3 木の本第7面75落込土器群1
- 4 木の本第7面89土坑
- 5 木の本第7面95土器群
- 6 木の本北西壁断面(5~8層)
- 7 田井中北西壁断面(1~4層)
- 8 攪乱壁面第5-2層土師環出土状況
- 図版7
- 1 田井中第1面全景
- 2 田井中第2面全景
- 図版8
- 1 田井中第3面全景
- 2 田井中第4面全景
- 図版9
- 1 田井中第5面全景
- 2 田井中第5-3面全景
- 図版10
- 1 田井中第5-3面63ピット
- 2 田井中第5-3面65井戸上層
- 3 田井中第5-3面65井戸断面
- 4 田井中第5-3面65井戸底部
- 5 田井中第6面全景
- 図版11
- 1 田井中第6面南西端附近
- 2 田井中第6面95土坑
- 3 田井中第6面117井戸
- 4 田井中第6面119溝
- 5 田井中第6面134井戸
- 6 田井中第6面147土器群
- 7 田井中第6面148土器群
- 図版12
- 1 田井中第6面143井戸
- 2 田井中第6面143井戸
- 3 田井中第6面143井戸
- 4 田井中第6面143井戸完掘状況
- 5 田井中第6面120落込土器群1
- 図版13
- 1 田井中第7面全景
- 2 田井中第7面158焼土土坑
- 3 田井中第7面189土坑
- 4 田井中北西壁断面(5~8層)
- 以下 遺物 サマカイト石器類
- 図版14 木の本
- 1 第4層
- 2・3 第5層
- 4 第6-1層
- 図版15 木の本第6-1層
- 図版16 木の本第6-1層
- 図版17 木の本
- 1 第5層
- 2・4 第6-2面44落込
- 3 第6-1層
- 5 第6-2面48溝
- 図版18 木の本第6面48溝
- 図版19 木の本
- 1 第6-2面49落込
- 2~4 第6-2層
- 図版20 木の本
- 1 第6-2面48溝
- 2 第7面65溝
- 3 第6-2層
- 4 第7面58落込
- 5・6 第7面65溝
- 図版21 木の本
- 1 第7面65溝
- 2~4 第7層
- 図版22 木の本第7層
- 図版23 木の本第7層
- 図版24
- 1~3 木の本第7層
- 4・5 田井中第4層
- 図版25 田井中
- 1・2 第4層
- 3~5 第5-1・2層
- 6 第5-3層
- 図版26 田井中
- 1~3 第5-3層
- 4 第6面131土坑

図版27 田井中

1 第5-3層

2・5 第6層

3・4 第6面134井戸

図版28 田井中

1 第6層

2 第7面189井戸

3 第7層

図版29 田井中

1 第7面189井戸

2 第7面172土坑

3 第6面126溝

# 第1章 調査に至る経緯と経過

## 第1節 遺跡の立地

田井中遺跡は昭和50年に、木の本遺跡は昭和56年に周知された遺跡で（図1）、それ以来、大阪府教育委員会・（財）八尾市文化財調査研究会・（財）大阪府埋蔵文化財協会・（財）大阪府文化財調査研究センターなどにより調査が重ねられてきた。調査原因の主なものとしては陸上自衛隊八尾駐屯地・八尾空港などの諸設備の改修・建設、府営住宅の建て替え、防災拠点の整備などである。

今回の調査は、八尾市空港1-81の陸上自衛隊八尾駐屯地内で、「八尾（23震災関連）電源施設新設等に伴う埋蔵文化財調査」として、近畿中部防衛局と公益財団法人大阪府文化財センターとの間で、平成24年3月28日付けで、平成24年3月29日から平成25年2月28日の期間で委託契約を交わした。それを受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導の下、平成24年7月2日から平成24年9月29日まで現地調査を実施した。

調査区は田井中遺跡と木の本遺跡の境をはさみ、各々の遺跡内に一ヶ所ずつである（図2）。田井中遺跡12-1調査区（以後、「田井中12-1」と略す）は駐屯地北側に東西に連なる建屋施設群の西端付近にあたり、既往の調査区では東に95-2調査区が隣接している。面積164㎡の長方形で長辺が北から25°ほど東に振る。

木の本遺跡12-1調査区（以後、「木の本12-1」と略す）は田井中12-1の南西約60mの芝生敷地内にある。面積64㎡の長方形で、長辺が40°ほど東に振る。

各々調査前に矢板が打設され、その中で調査を行った。まず、現代盛土・現代から近世の耕作土層をバックホウにより機械掘削で除去した後、矢板内の直交する2辺に土層断面観察用のアゼを残し、人力掘削により調査を行った。

木の本12-1では現況地盤高約T.P.+11.00mから、機械掘削は約T.P.+9.9mまで、人力の最終掘削面は約T.P.+8.5mまでである。

田井中12-1では現況地盤高約T.P.+11.30mから、機械掘削は約T.P.+10.3mまで、人力の最終掘削面は約T.P.+8.5mまでである。

両者とも現況地盤高から-2mまでを「人力掘削（1）」、それ以下を「人力掘削（2）」とした。木の本12-1、田井中12-1ともに、8面の遺構面で平面的調査を行った。

調査は木の本12-1が先行し、7月2日に機械掘削開始、8月21日に府教委の立会を受け、9月7日に調査を終了した。田井中12-1は、7月13日に機械掘削開始、9月24日に、府教委の立会を受け、9月29日調査を終了した。

その後、平成24年10月1日から報告書作成作業に入り、平成24年11月30日まで行い、平成25年2月27日の本報告書刊行をもって作業を完了した。



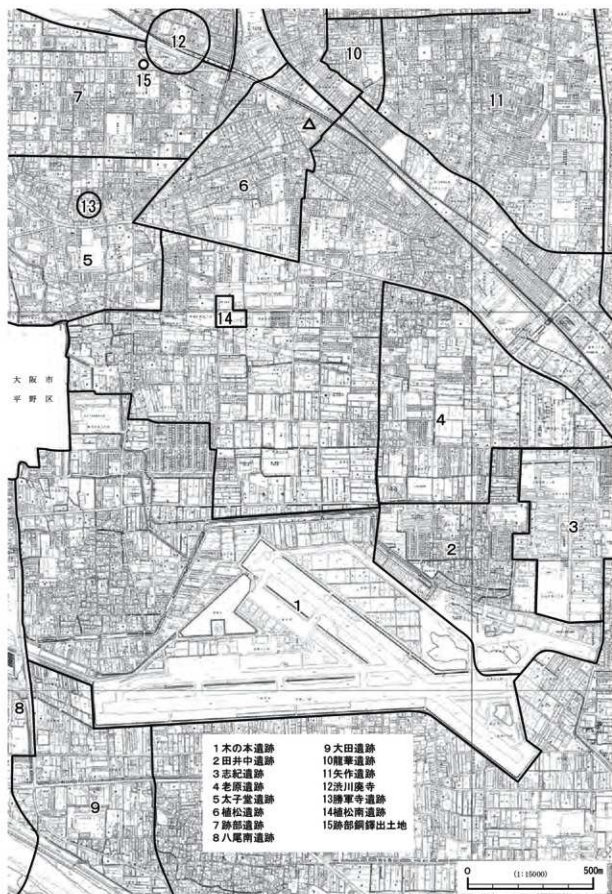


図1 田井中・木の本遺跡周辺の主要遺跡分布図 (S=1/15000)

大阪府が作成した大阪府ベクトル地形図データ1/2500を縮小編集したものである

## 第2節 調査の方法

調査の方法はマニュアル（『遺跡調査基本マニュアル 第2版』2010年財団法人大阪府文化財センター）にのっとり行った。

遺構面・遺構・断面などの実測は、平面直角座標系第IV系（世界測地系）を基準として行った。土層観察・記録のための断面は各調査区の直交する2辺に設定した。各検出遺構面は平板測量により全体図を作成し、高さを記録した。適宜国土座標による割付けで遺構・遺物出土状況などの実測を行った。

遺物は包含層・遺構ごとに取り上げた。出土位置の記録や出土状況図の作成を行ったものは遺構ごとに土器番号・石器番号を付けて取り上げたものもある。また、側溝の掘削や土層断面の除去の際出土した遺物は数層をまとめて取り上げたものもある。

包含層遺物の取り上げは両調査区が狭小であるので、マニュアルとは異なるが、地区割りの10m角（第Ⅲ区画）ごとではなく、調査区ごとに取り上げている。

調査開始面は既往の調査を参考に、現代盛土以下、現代～近世の耕作土層と思われる数層を機械掘削した面である。調査終了面は、側溝筋掘りなどで最下の無遺物流水堆積層を確認した時点で、府教育委員会の立会を受け、その上面とした。

両調査区とも、調査面積に比して大量の遺物が出土し、合計で28リットル入りコンテナで96箱を数えた。

整理作業・報告書作成作業では、まず、遺物は洗浄の後、包含層・遺構ごとの内容を確認し、一部は分類と破片数計量を行ったが、数量の多いものは分類・計量までは行えなかった。

その後、遺構ごと、包含層ごとの破片の接合、土器の復元を行い、報告するのに必要な遺物の選択を行い、さらに掲載可能な遺物の選択を行った。

そして遺物の実測・撮影、図面・写真図版の作成、トレースを行い、執筆を経て報告書を作成した。

掲載遺物の選択は、一応、全ての遺物を概観し、その中から時期的な検討や、遺物群の組成上重要と考えられるものを選択した。さらに整理期間内に実測・掲載可能なものを選択した。また、選択した遺物の中でもサヌカイト製打製石器類は写真掲載のみ、それ以外の遺物は実測図のみの掲載となった。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

田井中遺跡・木の本遺跡は、大阪府八尾市西部の陸上自衛隊八尾駐屯地内で、北東に田井中遺跡、南西に木の本遺跡が位置する関係で境を接する（図1）。田井中遺跡は自衛隊駐屯地の敷地の大部分を占め、そこから北側にも広がり、北東に志紀遺跡、北側に老原遺跡が接する。木の本遺跡は八尾空港の敷地を占め、そこから北西にも広がり、西に八尾南遺跡、南西に大田遺跡が接する。両遺跡の範囲は八尾市田井中・空港・木の本・南木の本を合わせた範囲に一致する。

木の本遺跡の南側には現在大和川が位置するが、これは宝永元（1704）年に付け替えられたもので、大和川はそれ以前、河内平野に流れ出した所で石川と合流し、玉串川・長瀬川などに分流して北流していた。長瀬川は田井中遺跡の北東側で現在でも北西方向に流れており、川沿いの自然堤防の微高地は周囲の条里制地割とは異なる土地区画として地図上でも認識できる。長瀬川の自然堤防は、その上に弥生時代以降の遺跡が並び、弥生時代前期以前に形成された古い微高地である事が知られる。

木の本遺跡内には元々、長瀬川と同じく北西方向に流れる平野川の上流である意川・ようだ川などが条里制地割の坪境に沿って流れていたが、太平洋戦争の始まる昭和16（1941）年に完成した、八尾空港の前身となる陸軍飛行場の建設に伴い大きく変更された。

田井中遺跡の弥生時代集落は、その平野川の自然堤防の上に立地し、木の本遺跡はそれに隣接した低地に広がると言われる。しかし、平野川はその位置から見ても、上流部が古代に条里制地割に沿う形に改変されている事からも、長瀬川と、羽曳野丘陵西側から河内台地までを集水域とした東除川水系に挟まれ、羽曳野市応神天皇陵古墳の西を北流する大乗川の水を合わせながら、沖積平野低地に溜まる水を排水するような河川と思われ、大きく安定した微高地を形成するような営力があるとは思われない。

既往の調査でも両遺跡の境の北端付近は、弥生時代には網状流路のように幾筋もの小規模な流路が南西から北東に流れ、その間に小規模な微高地が形成されている事が判明している。その他には微高地と低地の分布状況が明らかになっている調査は少ない。

田井中遺跡にもし大規模な微高地が存在したとすれば、それは遺跡内の東側で、クレパスプレーなど、長瀬川の営力で形成されたものであろう。

### 第2節 歴史的環境

縄文時代前期に最盛期を迎えた縄文海進により、現在の河内平野の大部分は海と化し、そこに堆積した土砂が沖積平野の元となった。その後、両遺跡の付近が何時頃陸化したかは明確にできる資料がないが、わずかながら縄文時代後期の遺物が見られ、その時期を遡る遺物は二次堆積的にも見られないので、縄文時代後期頃に陸化した可能性が高いとは言えよう。

田井中遺跡の西端から西に、木の本遺跡の範囲に入った所で、長原式土器を使用する縄文時代晩期終末の集落の一端が確認されている。それから東に小規模な流路を3本ほど越えた、田井中遺跡内の微高地に、時期的に重複する弥生時代前期古段階の大溝を巡らした集落が確認されている。弥生時代前期中



図2 調査区位置図 (S=1/5000) 大阪府が作成した大阪府ベクトル地形図データ1/2500を縮小編集したものである

段階の集落でも、使用する土器にわずかに長原式土器が混じり、西方に位置する大阪市長原遺跡では長原式土器を主体的に使用する集落に、若干の弥生土器も見られる状況があるので、田井中遺跡の弥生時代集落が、中河内南部において縄文時代晩期末葉の長原式土器を使用する地域内にパイロット的に成立した弥生文化集落であると評価する事は可能であろう。

田井中遺跡の集落は弥生時代前期新段階には中心をやや東に移すと言われている。北東に隣接する志紀遺跡でその時期の水田が確認されているが、まだ広範囲に全的に広がるものではなく、適地に散在

するような状況であるらしい。

弥生時代中期になると木の本遺跡にも遺物・遺構が増加し、田井中の集落もピークを迎え、木棺が検出されている事から墓域の存在も確認できる。志紀遺跡の水田も範囲を拡大していくようである。

しかし、弥生時代中期後半になると検出される遺構も遺物も減る。弥生時代後期には、周囲の八尾南遺跡・小阪合遺跡・中田遺跡などに居住域や墓域が確認されるようになるのに反し、田井中遺跡・木の本遺跡では遺物量も少なく、実態も不明確になる。

古墳時代初頭、庄内式期には、両遺跡の北側で、長瀬川右岸の中田遺跡群（中田遺跡・小阪合遺跡・矢作遺跡・東弓削遺跡）と左岸の久宝寺遺跡が巨大な一体の集落となった可能性がある。そこで河内型庄内式甕を核とした庄内式土器が成立し、その土器を主体的に使用する唯一の小地域を形成する。田井中遺跡・木の本遺跡でも同時期の遺構・遺物が見られ、木の本遺跡では西側の南木の本に集中する。土器組成を見れば甕において生駒西麓産胎土の河内型庄内式甕が圧倒的であり、V様式系はかなり少数で、両遺跡が庄内式土器を主体として使用する小地域に属している事を示す。ただし遺構密度は低く、その小地域の縁辺の様相と言えよう。

続く古墳時代前期は河内地域に布留式土器が全面的に広がり、両遺跡の北東の楽音寺・大竹古墳群、南東の玉手山古墳群などの古墳群の形成も始まるが、両遺跡では遺物も少なく、様相不明である。布留式土器と初期須恵器が併行する古墳時代中期前半に若干の遺構が見られるようになり、同じ時期の西隣の八尾南遺跡では大阪市長原古墳群と同じような方墳主体の古墳群の形成が始まる。古墳時代中期の河内平野は集落数が増加するが、田井中遺跡・木の本遺跡はその後半には衰退に向かい、東の生駒山に群集墳の形成が盛んになる古墳時代後期の遺物はわずかである。

律令制下の両遺跡は河内国志紀郡に属していた。飛鳥時代・奈良時代の遺物は若干出土するが、遺構はほとんどなく様相は明確ではない。強いて言えば土器の組成は集落的で、両遺跡のどこかにその頃の集落が存在していた可能性は考えられる。

8世紀中頃、称徳女帝の信任厚かった弓削道鏡の出身地の弓削は、田井中遺跡の東隣の町名として残り、今も式内社弓削神社が社叢を保つ。

条里制地割が施行されたのは現在までの調査成果から見れば平安時代頃であろう。志紀郡には「志紀北庄」・「志紀南庄」などの荘園の存在が知られ、その開発に伴い条里制地割が導入された可能性が高い。

平安時代以降、両遺跡は中世・近世の遺物も少なく、耕作地的な様相である。この地を含めた中河内地域は応仁の乱以降、戦国時代の末まで、恒常的な騒乱状態と言ってよいほど戦乱が続く。

近世には田井中遺跡北部に田井中村がある以外は一面の耕作地で、その中に平野川上流の了意川が運河も兼ね、条里制地割坪境に沿って流れていたような景観であった。

宝永元（1704）年の大和川付け替えにより、長瀬川沿いの微高地も新田開発され、河内木綿の栽培が盛んになった。しかし両遺跡周辺では新大和川の流路に耕作地を削られ、堤防に沿って悪水溜りができるなど、様々な不都合も生じたであろう。

その後も長らく農村風景の広がる地であったが、昭和16（1941）年の陸軍飛行場建設に伴い大規模な地形改変を受けると共に、直接的に戦争に巻き込まれる事となった。しかし現在は陸上自衛隊駐屯地・民間の航空会社が利用する八尾空港・大阪府警八尾航空基地・地域防災拠点など、複合的な施設が集まり、大阪府内で独特な位置を占める地となっている。

## 第3章 調査成果

### 第1節 木の本12-1の調査成果

#### 第1項 基本層序(図3・図版4-4・6-6)

現況地盤の高さは平均T.P.+11.02mで、その下は厚さ約60cmの現代盛土の下に、厚さ約20cmの明色化した砂質耕作土層が2層、その下に薄い洪水砂層をはさんで、厚さ約15cmの砂質耕作土層、そしてその直下に厚さ約20cmの洪水砂層が存在した。

そこまでは、設計と周辺の既往の調査から、近現代、遑っても近世後期の層と判断し、機械掘削した。その直下の耕作土層上面、T.P.+10.00mほどから人力掘削により調査を開始した。

結果的にはそれ以下では近世陶磁器や、中世の瓦器の破片が見られなかった。

なお、第4面に至った時点で、下面からの湧水が見られるようになり、その時点で第4層までの断面を実測し、それ以降は調査区四周に側溝を巡らし、常時排水するようにしたが、下にいくに従い湧水は激しくなり、調査区北側では土層がヘドロ化するようになり、土層断面観察用のセクションも崩壊したため、一部断面を実測できなかった。

層と面の関係は、層の上面を同じ数字で表記する。例えば第4層の上面が第4面である。

**第0層** 機械掘削を行った範囲の最下の洪水砂層である。10YR6/4~4/6(にぶい黄橙~褐色)粗砂~中砂、ラミナあり、Feあり。下部のみ人力掘削で包含遺物を探したが、無遺物であった。以下の層の状況から、中世頃の洪水砂層の可能性もある。

**第1層** N4/0(灰色)シルト、部分的にFeあり2.5Y5/3(黄褐色)に染まる、灰白色の結核あり。淘汰良く、止水堆積層のように見えるが、上面に耕地区画が検出され、耕作土層である。包含遺物には近世陶磁器や瓦器を含まないが、量が少ないため、黒色土器B類碗の破片をもって10世紀以降の層としか言えない。すでに弥生土器片・サヌカイト石器類を含む。弥生土器は中期のものが目立つ。

**第2-1層** N4/0(灰色)第1層よりやや暗、粘質土、シルト主体、わずかに極細砂あり。この層には変形構造が見られず、直下の第2-2層から第4層までに変形が見られることから、それが地震変形とすれば、この層が耕作されている期間に起こった地震によるものと考えられる。

**第2-2層** N4/0(灰色)粘質土、シルト主体、極細砂~中砂わずかにあり、地震変形と思われる火災状構造で巻き上げた第3層がラミナ状に入る。

両者とも耕作土層であり、包含遺物の状況は第1層と変わらない。

**第3層** 10Y4/1(灰色)粘質土、シルト主体、細砂あり、粗砂~小礫わずかにあり。地震によるものと思われる地層変形が顕著である(図版4-3)。包含遺物には黒色土器A類碗片・南河内型製土土師器碗片・土師器小皿片などを少数含み、その状況を見れば平安時代頃の耕作土層か。

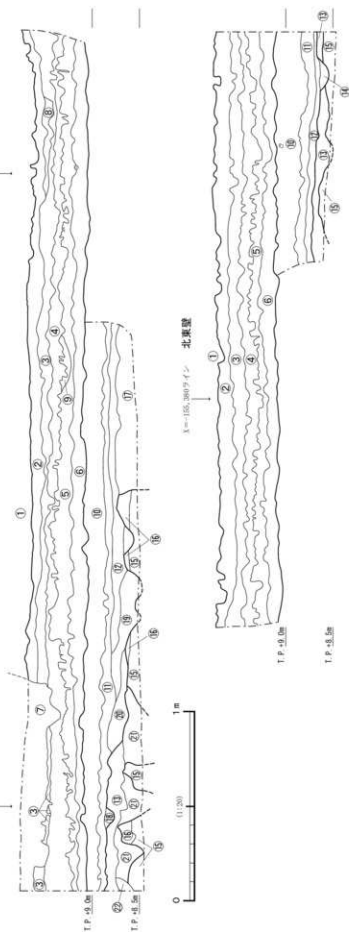
**第4層** 7.5Y4/1(灰色)第3層より暗、粘質土、シルト~極細砂主体、細砂~中砂わずかにあり、地層変形若干あり。包含遺物に少数ながら黒色土器A類碗片・土師器坏片が見られ、奈良時代頃の耕作土層か。

**第5層** 10YR3/1(黒褐色)粘質土、シルト主体、中砂~細砂わずかにあり、管状Feあり。第6層と共に暗色帯を形成するが、第6層より酸化的雰囲気である。包含遺物に弥生土器が多数あるが、わず

北西壁

X=155.3857ライン

Y=36.0209ライン



- ① 10V6/4~4/6 粘質土 細砂~中砂 ラミナあり Feあり 第0層
- ② M4/0E シルト 部分的にFeあり 2.5V5/3黄緑に染まる 灰白色の腐植あり 海浜近く止水堆積のようだが耕作土 第1層
- ③ M4/0E 第1層よりやや暗 粘質土 シルト主体 わずかに腐植砂あり 第2~1層
- ④ M4/0~10V4/1E 粘質土 シルト主体 腐植砂~中砂わずかにあり コンクリュートで敷き上げた第3層ラミナ状に入る 第2~2層
- ⑤ 10V4/1E 粘質土 シルト主体 細砂あり 粗砂~小礫わずかにあり 上り腐植砂あり 第3層
- ⑥ T5V4/1E 第3層より暗 粘質土 シルト~極細砂主体 細砂~中砂わずかにあり 第4層
- ⑦ 第1~2~1層と T7.5V5/1~4/1E 粘質土 シルト主体 細砂~中砂わずかにあり ②の20~4cmのプロック面に第0層の砂入る 4土坑埋土
- ⑧ 第1層・第2層の近層 第2面7溝埋土
- ⑨ 第3層 (やや明色化10V5/1E) の二次堆積 ラミナ状に第2~3層入る 第3面18溝埋土
- ⑩ 10V2/1黒褐色 粘質土 シルト主体 中砂~細砂わずかにあり 管状6あり 第5層

- ⑪ 5V2/1黒 粘質土 シルト主体 細砂若干あり 第6~1層
- ⑫ 5V3/1オリープ黒 粘質土 シルト主体 中砂~細砂あり ぼやけた腐植の1~2cmのプロックわずかにあり 第6~2層
- ⑬ T7.5V5/5/1黄灰 シルト~細砂 T7.5V7/1明黄灰 シルト・粘土の1cm前後の小プロック若干あり 灰化物若干あり 第7層(盛土系)
- ⑭ 5V5/1緑灰 シルト~細砂 第8層
- ⑮ M4/0E シルト~粘土 第7層(本壁系)
- ⑯ ⑬⑭⑯⑰⑱の3~1cmのプロックと T7.5V6/1E 中砂 灰化物若干あり
- ⑳ ⑰内に⑱の2~1cmのプロック
- ㉑ ⑱内に⑱の5~1cmのプロック
- ㉒ ⑱内に⑱の3~1cmのプロック
- ㉓ ⑱内に⑱の4~1cmのプロック若干
- ㉔ ⑱内に⑱のプロック

図3 木の本 調査区壁土層断面図 (S=1/40)

かに MT15～TK10の蓋環などの須恵器の破片あり、古墳時代後期以降の耕作土層か。

第6-1層 5Y2/1（黒色）粘質土、シルト主体、細砂若干あり。自然土壌の上部で、堆積単位は把握できない。土壌化が激しいため、遺構の切り込みは見えないが、第6-2面検出遺構内の遺物の幾つかが第6-2面より上に突出していることから、この層上面から切り込んでいる遺構があると思われる。第6-2層も自然土壌である事からすれば、第7面検出の遺構も本来の切り込みがこの層上面からであった可能性も考えられる。包含遺物は弥生土器と石器類で、弥生時代前期・中期のものが多く、後期の土器も含み、わずかに古墳時代前期の土器もある。切り込みが見えなくなった遺構のものか。

第6-2層 5Y3/1（オリーブ黒色）粘質土、シルト主体、中砂～細砂あり、ぼやけた第8層の1～2cmのブロックわずかにあり。自然土壌下部で、第6-1層とは土壌化の違いのみで、堆積単位としては上下層と同一のようである。包含遺物は弥生時代前期～中期の土器・石器が見られる。

第7層（盛土系）N4/0（灰色）シルト～粘土。炭化物や焼土が混じり、シルトの小ブロックも混じる。盛土・整地土の可能性が高い。包含遺物は弥生時代前期～中期の土器・石器が見られる。

なお、西隅付近のみ、この層の下で第8層上部に形成された自然土壌と思われる層が残存していた。それを第7層（土壌系）とし、上記の第7層は（盛土系）とした。

第7層（土壌系）N4/0灰シルト～粘土。極一部にしか遺存せず、包含遺物は確認できなかった。

第8層 5G5/1（緑灰色）シルト～細砂。ラミナは確認できなかったが、粒子が下にいくほど粗くなる級化構造が見られ、水成堆積層である。有機分の蓄積もない。激しい湧水のため上面での遺構の検出ができず、遺物を回収するため層上部と遺構を第7層と同時に掘削するのみとなったが、遺構らしき部分から集中的に遺物が出土した。それ以外の部分からは遺物は出土せず、無遺物層である。層下端は確認していないが、厚さ50cm以上はあるようである。

## 第2項 第1面（図4・図版1-1）

第0層の洪水砂に覆われていた面である。全体的に洪水砂の入り込んだ足跡・稲株痕らしきものが多く見られた。南北正方位に走る1溝や東西正方位の2段差の他、3ピットや4土坑も隅丸方形でほぼ正方位を指向する。南西辺沿いには不整形な溝状の5浸蝕痕が見られた。

ただし、4土坑は北西壁断面で（図3）、第0層より上から切り込まれている事を確認されている。3ピットも埋土に第1・2層以外のブロック土も含み、ブロック土間に砂が入るので、上層からの掘り込みの可能性が高い。5浸蝕痕は第0層がそのまま埋土となっている。1溝は第0層より細かい細砂～中砂に第1層の小ブロックが若干混じる埋土だが、第0層堆積と同時の洪水により埋没したのであろう。

5浸蝕痕以外の部分でも全体的に緩く浸蝕を受けているようで、1溝は2段差から北に下がった部分で浅くなり途切れ、2段差も東側の一部で肩部が不明確になっていた。また、耕地区画として、溝や段差沿いには本来畦畔があったと思われるが、それも浸蝕されたのであろう。特に1溝東肩部は、足跡の残りが少ない部分が帯状にあり、畦畔の痕跡のように思われる。1溝自体も洪水砂で埋没し、肩部がやや不整形なので、浸蝕を受け、本来の幅を保っていないのであろう。

1溝と2段差により画された耕地区画が4面あるとし、浸蝕の影響の少ない部分を本来の面と高さとする、一番高いのは南東側でT.P.+9.77mほど、次は南西側でT.P.+9.74mほど、続いて北東側のT.P.+9.72mほど、一番低い区画は北西のT.P.+9.66mほどとなる。耕地区画は第2-1面のものを踏襲したものと考えてよからう。



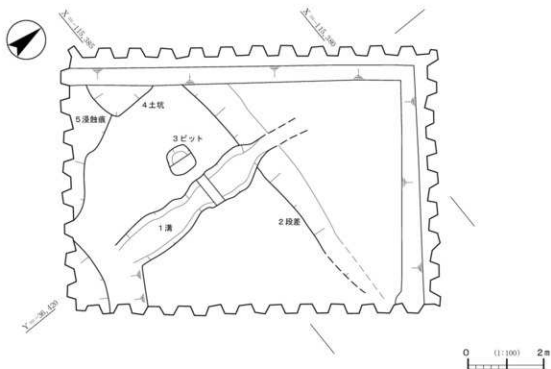


図4 木の本第1面 全体図

第1層包含遺物 破片数で弥生土器72 (甕底部3・壺4 (底部1・櫛描直線文1・広口壺2)・土師器19 (環10・椀3・高台1・小皿4)・黒色土器椀5 (A類2・B類3)・サヌカイト19 (チップ11・剥片8) である。弥生土器広口壺口縁には下部に拡張して波状文の入ったものもある。

既に弥生土器の割合が多いが、層の耕作期間の参考となるものは黒色土器B類椀片のみであろう。それでも10世紀以降としか言えず、遺物の総量も少ないため、瓦器・瓦質土器・陶磁器の不在から耕作期間の下限を限定するのは無理があると言える。

小結 砂層が堆積するような洪水により埋没した面で、浸蝕により不明となった部分もあるが、正方位の耕地区画と水路が検出できた。

畦畔が検出できず、第1層が止水堆積のように淘汰の良い層である事から、この層自体も洪水堆積層で、第2面の遺構上に均等な厚さで堆積したために擬似的な段差・溝が作られたのではないかと考えた。しかし、足跡・稲株痕らしきものがあり、それらを埋めた第0層もラミナが保たれ、足跡が第0層を上面から攪拌して入っているものではない事、1溝に第0層とは異なる埋土が残る事、第2面に浸蝕の痕跡がない事などから、耕作土層と判断できた。

第2面の状況を踏襲している事からも、正方位の耕地区画が存在したと考えられ、条里制地割の一部が検出されたと評価できる。1溝は用水路であろうし、水利体系を復元する資料となりうる。

遺物の少なさから時期を限定しづらいが、これより上部に残存していた耕作土層も包含遺物を取り上げていれば、この層の耕作期間もいままし限定できたかもしれない。

#### 第3項 第2-1面 (図5・図版1-2)

第1層と接する面だが、畦畔が検出された。本来は第1層中にも同位置に畦畔盛土があり、それにより第2層時点、この面の畦畔の頂部が保護されていたためと思われる。

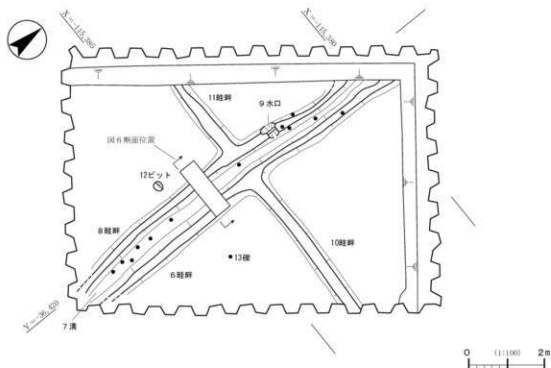


図5 木の本第2-1面 全体図（ドットは木杭）

第1面1溝とほぼ同じ位置に7溝が南北正方位に通ち、その両脇に6・8畦畔が沿う。10・11畦畔は第1面2段差よりやや南だが、東西正方位に通ち、北に落ちる段差に伴う畦畔である。8畦畔には11畦畔よりやや北で9水口が開く。南西側耕地区画内には8畦畔沿いに12ピットがあり、南東側耕地区画では上面から13礫が検出された。

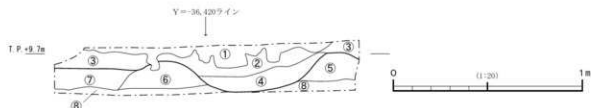
畦畔はいずれも幅50cm前後、高さ5cm前後で、やや幅は大きいものの坪境の大畦畔のようなものではなく、小畦畔に類するものと思われる。

7溝底部や6・8畦畔上面には打ち込まれた杭や杭痕が散在するが、特に規則性は見られない。全て径3～4cmの丸木杭である。第1面では痕跡を留めていなかったのも、それより上面から打設されたものではない。第1面に水路を踏襲する際に打設されたものか。

7溝底部は南端の高さT.P.+9.58m、北端の高さT.P.+9.52mで、調査区内約9mで6cmほど北に下がり、全ての位置で両側の耕地区画より2～5cm低い。

7溝・6・8畦畔の断面は第1面の1溝検出時点で設定した位置で確認した（図6・図版4-2）。1溝は第0層相当の埋土の下に溝機能時の埋土と思われるものも残るが、両側の畦畔の盛土は耕作土層と区別できず、確認できない。6・8畦畔盛土は第3層の上に盛られており、第2-2層時点から第2-1層時点まで継続して機能した事が分かる。8畦畔盛土内からは、調査区南端付近で23cmほどの、煤が付着した石英閃緑岩が出土し（図8にドットで示す）その北側から大きめの円筒埴輪片（図7）6片が集中的に出土した。埴輪片を転用した水口などの遺構は確認できず、他の部分の盛土にはさほど土器片は含まれないので、盛土補強のために入れられたものでもないようである。礫も盛土上面には達せず、盛土底面からも浮くため、畦畔を作る目印とされたとも考えにくい。

9水口は第1層で埋まり、この面の埋没時に開いていたと思われる。12ピットは第2-1層に似るシルト～粘土の埋土で、この面切り込みの遺構と思われる。13礫は12cmほどの閃緑岩礫で、面にやや



- ①「10YR6/6～5/6明黄褐～黄褐 中砂～細砂 ラミナあり」内に「10Y4/1灰 シルト 極細砂わずかにあり」ラミナ状に入る 第0層相当  
 ②5Y4/2暗灰黄 (Feに染まる部分)・10Y4/1～3/1灰～オリブ黒 粘質土 シルト主体 極細砂わずかにあり Feあり (まだらに染まる) 第1層  
 ④5GY4/1暗オリブ灰 シルト 土器片多し 7溝埋土  
 ⑤2.5GY4/1～3/1暗オリブ灰 粘質土 シルト主体 極細砂あり ブロック状構造 6畦畔盛土  
 ⑥2.5GY4/1暗オリブ灰 粘質土 シルト主体 極細砂～粗砂わずかにあり 8畦畔盛土  
 ⑦ ⑥とほぼ同じ 灰白色の結核あり 第2層  
 ⑧7.5Y4/1灰 粘質土 シルト主体 極細砂～細砂あり 第3層

図6 木の本 第2面 6畦畔・7溝・8畦畔断面図 (S=1/20)

めり込むような状態で出土した。

畦畔で区画された四つの耕地地区画は、南東側が一番高く T.P.+9.62m ほど、次が南西側で T.P.+9.59m ほど、北東側と北西側はほとんど高さの差なく T.P.+9.57m ほど。

8畦畔盛土内出土埴輪片(図7) 集中して出土した6片のうち1片を示す。ほかの破片も全て、ナデ仕上げでタガが高く、胎土も共通である。

円筒埴輪片と思われる。外面はタテハケ後左上がりナデで、タガを付ける部分のヨコナデが他のナデを切る。タガは全体にヨコナデ、高く張る。体部との接合部分は下方はほぼ直角に屈曲し、わずかに接合痕を残すが、上方は緩い曲面でナデ付ける。タガの貼り付けはわずかながら蛇行している。表面にわずかに赤色顔料が残る。内面は荒れて、左上がりのナデの痕跡が残るのみである。全体の水平方向の円弧は不均等で復元径は推測できないが、かなり大型の円筒埴輪と思われる。径60cmを越える事は確実であろう。

胎土は淡黄2.5Y8/3～浅黄橙7.5Y8/4を呈し、断面は褐灰10YR4/1で、粗粒の石英・長石を多く含むが、わずかに黒雲母・片岩系の砂粒・チャートを含む。中粒砂以下の砂粒は石英・長石・黒雲母のみである。中河内地域産の胎土ではない。

最終調整はナデだが、その下のタテハケ、高く張るが蛇行しているタガという要素は南河内地域西平に多く分布する「日置荘型埴輪」の範疇に入るとと思われる。古墳時代後期中葉頃のものか。

第2層包含遺物 第2-1層と第2-2層は同時掘削し、遺物は分別していない。包含遺物は「第2層」のものとして報告する。破片数の集計は行っていないが概観すると、この層も弥生土器の割合が高いが、須恵器の甕や壺の破片もあり、甕は内面の同心円文タタキを消していないもののみである。高台の高い土師器碗もあり、黒色土器碗は2片のみだがA類碗である。土師質平瓦の破片も見られる。付け木や桃核も比較的多く出土する。

全体的に見て、黒色土器B類碗の破片がいくらいで耕作時期を判断する材料は第1層と変わりがなく、10世紀以降としか言えない状況である。しかし、直下第3層の包含遺物の状況を見れば、さすがに近世に下る可能性は低いと思える。

小結 この面では畦畔やそこに開いた水口まで検出され、第1面では浸蝕により不明確であった部分が

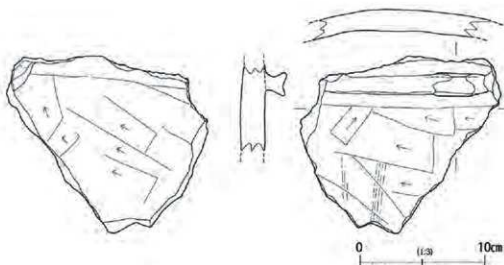


図7 木の本 第2面 8畦畔盛土内出土埴輪片

はっきりしてきたと言える。この面を踏襲した第1面もほぼ同じような状況であったであろう。

両側に畦畔を伴う水路は、畦畔の規模や、第3面での水路と位置が異なる事からも坪境とは考えられず。北側住宅地の土地区画に残る坪境を延長すれば、調査区より10m前後西側を通るものと思われる。しかし、坪内に水路が通る形態の例として、また、この面で南東側がやや高い地勢や、水を流す方向が北向きである事などが水利体系の資料として得られたと言える。

第2-1層が耕作されていた期間に関しては、第1層と変わらず、限定しにくい状況だが、8畦畔盛土から出土した円筒埴輪片が目に見える。程近い羽曳野市西部を中心とした丹比地域では、奈良～平安時代に、古墳時代後期に丹比地域の日置荘遺跡付近で生産された埴輪を、そのまま井戸枠に、破片は板状の材として、転用した例がしばしば見られる。今回の埴輪も、タガは高いが割付が不正確で直線的にならない、日置荘型埴輪の範疇に入れても良いものと思われる。そこからも埴輪転用例が減少する中世まで下らない証左になるようにも思われる。

#### 第4項 第3面(図8・図版2-1)

この面でも両側に畦畔を伴う水路が見られるが、溝の中軸線で見ると第2面のものより約2.2m西にある。また、それらも含め溝・畦畔は概ね正方位を指向するとは言えるが、その16・17畦畔・18溝は北側がやや西へ、東側の14畦畔はやや東に曲がるようにも見える。

中央、東西に走る15畦畔の南側の耕地区画の幅は、14畦畔と18溝の心々距離で見れば約5.4mで、条里制坪一辺109mの1/20に近似し、条里制坪内の均等な地割りの類としては最小の幅と言えるが、区画された四つの耕地の高低差が激しいわけでもない。

また、畦畔は高さが5cm前後と低いにも関わらず、幅はほとんどが1mを越えるのも形態的に奇妙であり、むしろ畦畔の下面が両側の耕作土の耕作から削られ残った「畦畔基部」のような印象を受ける。耕作土層と盛土の切り合いが見えれば否定できるが、地震変形もあり断面でも確認できない。

この面は最も地震変形の激しい層境であり(図版4-3)、畦畔の曲がりや不自然な幅の広さは、その影響による水平方向の変形の可能性も考えられる。

地震変形が激しいため、元々の面の高さは不明だが、直上の第2層が荷重痕状に沈み込む単位が輪郭として完結して見える高さまで下げ、その平面的な分布密度がほぼ同じくらいになるように揃えた。そ

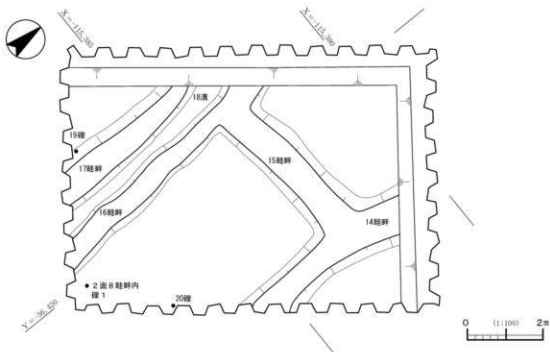


図8 木の本第3面 全体図（ドットは礫）

の状態では四つの耕地区画の耕作土上面は、南側が一番高く T.P.+9.34m ほど、東西の区画がほぼ同じ高さで T.P.+9.30m ほど、北側が一番低く T.P.+9.27m ほどである。

**第3層包含遺物** 下層が火炎状構造を見せて立ち上がり、上層が荷重痕状に沈み込む変形構造（コンボリュートラミナの一種）では、荷重痕の中に土器片が入る場合が多く、それもやや厚く重い土器片である事が多い。土器片自体が荷重痕形成の要因の一つとなっていると思われる。そのため、この層では、第2層の沈み込みが見られる上部から出土した遺物は第2層に含め、下部から出土したもののみ第3層包含遺物とした。量が多いため破片数集計はしていない。

概観すると全体的には弥生土器が圧倒的に多く、その文様では多条沈線や櫛描直線文が目立つ。サヌカイトも多く、石鎌サイズの剥片が最も多いが、押圧剥離の微小なチップもあり、石剣・石錐の未製品もある。古墳時代のものとしては土師器布留式甕が1片あり、古墳時代後期の須恵器蓋環が2片。奈良～平安時代頃の須恵器壺3片も見られる。矮小化した高台を含む黒色土器A類碗片も7片あるが、最新の遺物は南河内型粗製土師器碗3片であり、10世紀頃のものである。棒状木材の先端が炭化した付け木や桃核も出土しているが少数である。

全体の包含量はある程度多く、その中で黒色土器や粗製土師器碗が多くはないが若干含まれている状況を見れば、瓦器の不在はこの層が耕作されている期間が瓦器の出現以前である事を示している可能性が高いと言えよう。平安時代頃の須恵器片もある事を見れば、第3層が耕作されていた期間は概ね平安時代頃と推測できる。

**小結** 畦畔の曲がりか地震変形の影響かどうかは、この調査面積では検証が難しいが、次の時期の第2面の状況や、推測される時期からしても条里制地割内の正方位の耕地区画と認定しても問題はなからう。

注目されるのは、畦畔を伴う南北方向の水路が、この面から第2面にかけて東に移動している事である。水路の移動は水利体系の整備のような画期があった事を推測させる。

下の第4面の状況が不明確なところがあるので、確定的ではないが、この面が瓦器出現以前、11世

紀後半より前とするのが妥当ならば、これが調査区内の最古の条里制地割の可能性も考えられる。

#### 第5項 第4面(図9・図版2-2)

この面では北側で次第に下から水が染み出すようになり、北東壁沿いではその水圧で面が膨張し、ひび割れるような状態になった。そのため、その付近の遺構の検出は困難で、検出面の高さも本来のものとは違う状態である。

22畦畔も、検出時には、まだ北に伸びるような感じがしたが、続きを検出できなかった。21畦畔は22畦畔を越えて東に伸びるかさえ分からなかった。北隅でかろうじて26溝を検出したが、東西方向の溝と思われるものの、検出した範囲ではなんとも言えない。

西側では24・25木根痕を検出した。形状から25木根痕の中心付近に株のある小さな立ち木の痕のようである。その東隣に23ピット、南端近くに27礫があった。27礫は12cmほどの大きさの砂岩で、一部に煤が付着していた。

面の高さはT.P.+9.24~9.16mほど、木根痕の北東側付近が一番高く、22畦畔の東側が一番低い。

検出された畦畔の評価は難しい。やや不整形ながら正方位を向くとも、正方位とは関係ない方向性を持つとも、どちらも言えそうである。地震変形は残るものの、第3面以上の変形があったようには見えない。また、この畦畔が第3層下面に残った畦畔基部か、第4層を耕作土層とした畦畔かの検証も、21畦畔盛土と耕作土層としての第4層との切り合いを断面で確認できず、確定できない。

そこで注目できるのは木根痕である。第4層は耕作土層と思われるので、その耕作期間と第3層の成立までの間に木が育つ程度の、耕作がなされない時期があった事が考えられる。

**第4層包含遺物** 総量は第3層よりやや多く、コンテナの1/2箱ほどである。ほとんどが弥生土器で、文様には簾状文と列点文が見られ、中期のものが多い。サヌカイトも16点で原礫・石核・剥片・チップが見られる。しかし、須恵器裏片が1片あり、黒色土器A類碗片、土師器坏片も若干見られる。土師器坏には、底部から丸く立ち上がり、垂直近くまで立ち上がった口縁の端部を内側に丸める、奈良時代頃の特徴が確認できるものもある。弥生土器・サヌカイト以外のものが同時期と考えても齟齬がない事からすれば、第4層の耕作されていた時期は奈良時代頃の可能性が高い。

図版14-1は第4層出土のサヌカイト製石核である。しかし、剥片を剥離した痕跡は一つしかなく、他は偶発的な割れのように、ほぼ使用された原礫の大きさを保つ。どのような大きさの原礫を使用していたか分かる好例である。最大厚は53.2mmである。

**小結** 第4層と第3層の間に时期的断絶があるという事は、少なくとも河内地域では条里制地割施行後に一時耕作が放棄されたような調査例はほとんどない事から、また、奈良時代に遡る条里制地割がほとんどない事からしても、最古の条里制地割に伴う耕作土層は第3層であると見たほうが妥当であるように思われる。

ならば、第4面に残された畦畔は自然地形に基づいたもので、正方位を指向していないと言えそうだが、これが第3層床面遺構として残った「畦畔基部」とすると、第3面に見られた状況よりも古い、第3層成立当初の耕地区画の痕跡である可能性も否定できない。

いずれにしても、奈良時代から平安時代の条里制施行に至るまでの間に、空白期があるかもしれないという点は、遺跡を考える際に重要と思われる。既往の調査では平安時代以降の調査がほとんどなされていないのが残念である。

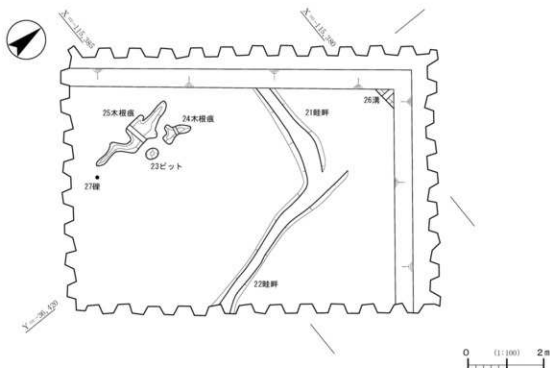


図9 木の本第4面 全体図（ドットは礎）

#### 第6項 第5面（図10・図版3-1）

この面から、湧水に対処するため排水用側溝を四周に回し、常にポンプで排水するようにしたため、平面的調査を行える面積は縮小した。しかし、遺構面以下から水がしみ出すのは止まらなかった。土層観察用のアゼもこの面で上部を実測し、除去したが、残した下部も北隅付近から徐々に崩壊し始めた。

この面では、正方位を指向するような遺構は皆無で、確実に条里制地割施行以前の面と言える。第5層から第6-2層に至る暗色帯の最上面だが、第5層は耕作土層と見られ、その上面となる。

遺構は土坑・ピット・溝・落込だが、切り合いにより2群に大別できる。28溝を31溝・36~38土坑が切り、28溝は埋土に切り合いなく29・30落込・42溝につながるの、28・42溝・29・30落込が古く、31溝と土坑・ピット群が新しいと考えられる。

それは、埋土からも裏付けられる。前者は「5Y3/2~4/2オリブ黒~灰オリブ 粘質土 シルト主体 細砂あり 粗砂わずかにあり 第5層に似る」で、後者は「7.5Y4/1灰 シルト 細砂わずかにあり 植物遺体わずかにあり 第4層に似る」と分かれる。土坑・ピットの深さが深いものでも10cmほど、ほとんどが5cm前後なので、後者は第4層床面遺構の可能性が考えられる。

遺構内出土の遺物はほとんどが弥生土器の破片で、遺構と同期的なものとは思われない。わずかに30落込から土師器甕1片、坏1片が出土しているのが同期的に近い可能性があるのみである。

29・30落込の底部は比較的平坦で、そこに溝が取り付く形は耕作地と考えられる。自然地形に合わせ耕地区画を作り、それを溝でつなぐような形態であろうか。新しい方の遺構は、土坑・ピットは性格不明と言わざるを得ないが、31溝は水口状の突出部もあり、耕作地関連のような形態である。

面の高さはT.P.+9.12~8.99mほどで北隅付近が最も高く、東隅付近が最も低い。落込底部平坦面の高さは29落込がT.P.+9.06mほど、30落込がT.P.+8.99mほどである。北側の方が低い傾向にあった第1~4面とは異なる微地形が現れてきたと言える。

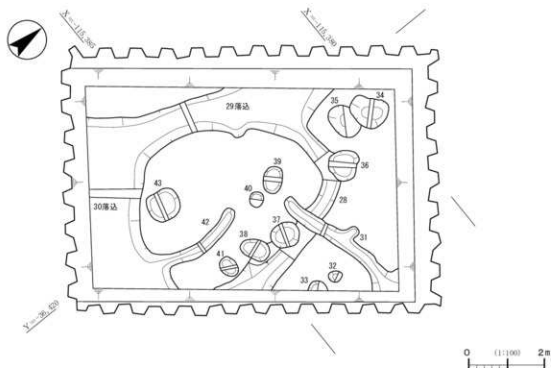


図10 木の本第5面 全体図

第5層包含遺物 弥生土器は第4層よりさらに増え、中には櫛描直線文・籐状文が見られる。サヌカイトも多量となり、石核・剥片・チップの他、石鏃も見られる。しかし、須恵器が2片あり、そのうち1片はかなり径の大きい蓋環の破片で、その大きさからMT15～TK10段階、6世紀前葉から中葉のものと思われる。

図版14-2はサヌカイト製石剣もしくは石槍の未製品と思われる。ポジ面の剥離が良く残り、ネガ面の剥離も一部残る。かなり幅広い横長剥片から作られている。刃部に細かい押圧剥離はなく、ポジ面右側の刃部の剥離は一部ステップ状剥離になっている。下端は折れ。最大厚10.5mmである。

図版14-3はサヌカイト製石核である。ネガ面を見ると、上辺の原礫面を打撃面にして左右に打点を移動しながら剥片を採っていったのが分かる。左上と右下の剥離は剥離面調整か。ネガ面右端部は表裏に剥離を起す打点が散在し、ツブシ状になり、フィッシャーが発達している。打撃具として転用されたのかもしれない。最大厚20.5mmである。

図版17-1は長三角凹基式石鏃である。鋒部とネガ面右の逆刺しは折れる。刃部は左右とも大きめの剥離を鋒部から基部に向かって入れていき、最後に基部の抉りを入れる。その後押圧剥離で微調整している。最大厚3.5mm。

以上3点は第5層の同時期的な遺物ではないが、上層にも混じる弥生時代石器の組成をよく示すものとして取り上げた。

第5層の耕作されていた期間は、少数だが須恵器片に基づいても良いと思われ、最大幅古墳時代後期～奈良時代の間のどこかであろう。

小結 時期の細かい特定は無理だと言っても、条里制地割施行以前の耕作地の状況の一端が垣間見えた面と言える。

しかし、土坑・ピット群の在り方は、ある程度密集しながら、土坑同士が切り合うのは34土坑が35



土坑をわずかに切る例があるのみで、その様相は耕作地的とは思えない。第4層が耕作土層として成立する前に、耕作地とは異なる土地利用があった可能性もある。

だとすると、弥生時代の集落域であった時期から、条里制地割が施行されるまでの長い間、時には耕地になり、時には別の土地利用がなされるなど、散漫に人為的活動が及ぶような期間があったのではないかと想像される。その間の一時期の様相がこの面に現れているのであろう。

#### 第7項 第6面（図版3-2）

第6-1・2層の自然土壌の最上面である。第6-1層が黒色を呈し、土壌化の激しい層である事が断面でも観察されていたので、面的な遺構の検出は難しいと予想されたとおり、この面では一切の遺構が検出できなかった。ただし、第6-2面・第7面検出の遺構が、本来はこの面から切り込んでいた可能性のある事は、基本層序のところで先述したとおりである。面の高さはT.P.+8.93~8.87m、やや西が高く東が低い傾向にある。

第6-1層包含遺物 切り合いが見えなくなった遺構上部内の遺物が混入しているであろう事は、41片が接合した弥生V様式のタタキ甕があり（図11-11）、土師器小型丸底鉢2片が含まれる事からも推測される。それらが本来、第6面から切り込んでいた遺構のものとするれば、第6面の下限は古墳時代前半頃の可能性が高い。第7層（盛土系）には弥生V様式の土器が含まれない事から、盛土されたのが弥生時代中期IV様式期の事であり、その上部が土壌化して第6-1・2層が形成されたと思われるので、上限は弥生時代中期後葉にまで遡るだろう。

弥生土器は底部片で甕15個体、壺5個体が確認できる。上記とは別に接合しないタタキ甕の破片やV様式の口縁が外反する高環の破片も少数見られる。数量的に多いのは櫛描直線文・波状文、麁状文、垂下口縁など弥生Ⅲ・Ⅳ様式のもので、ついで4~5条の沈線文、刻み目口縁の甕なども見られる。サヌカイト製石器も大量で、石核・剥片・チップ・木製品・製品の全てが揃う。製品には石鏃・石匙・石剣・石錐・尖頭器・搔器などが見られる。

図11-9は弥生土器長頸広口壺片である。外面タテハケ後、口縁部ヨコナデ、6条のやや蛇行する櫛描直線文帯が見られ、その間に一条のヨコミガキが入る。内面は下部が磨滅で不明確になるが、左傾タテハケ後口縁部ヨコハケである。口縁端面はわずかに上下に拡張し、ほぼ垂直である。

胎土は黄褐色2.5Y5/3を呈し、2~1mmの砂粒は長石・石英があるが、角閃石も若干、細粒では圧倒的に角閃石が多く、黒雲母も若干ある。生駒西麓産胎土である。

頸部が強めに外傾するが、口縁端部はまだ下に拡張が顕著でない形態は河内Ⅲ-1様式頃か、櫛描直線文帯間にミガキが1条入る形は河内Ⅲ-2様式に類例がある。

図11-10は弥生土器甕底部片と思われるが、体部の開き方が急なので、壺の可能性も否定できない。外面タテハケ、内面左上がりナデで、底部外面は粘土板の周囲に粘土紐を回し、その接合部分を強く撫で付けた凹部がよく残る。胎土にはぶい褐色7.5YR6/3~褐色7.5YR5/1を呈し、粗粒の石英・長石を含むが、1mm前後の黒雲母・チャートもわずかに含む。中粒砂以下にはわずかに角閃石も含み、河内低地産胎土である。底部の大きさや形態を見ても、胴部が強く張り、頸部が較られる甕の底部と思うが、その類例と比べても体部の開きが急である。河内Ⅲ~Ⅳ様式頃のものか。

図11-11は弥生土器甕である。残存率は50%で、破片が集中的に出土したため、土壌化で見えなくなった遺構内にあったものかもしれない。外面はタタキ、胴下部で上下のタタキを切るヨコナデが帯状

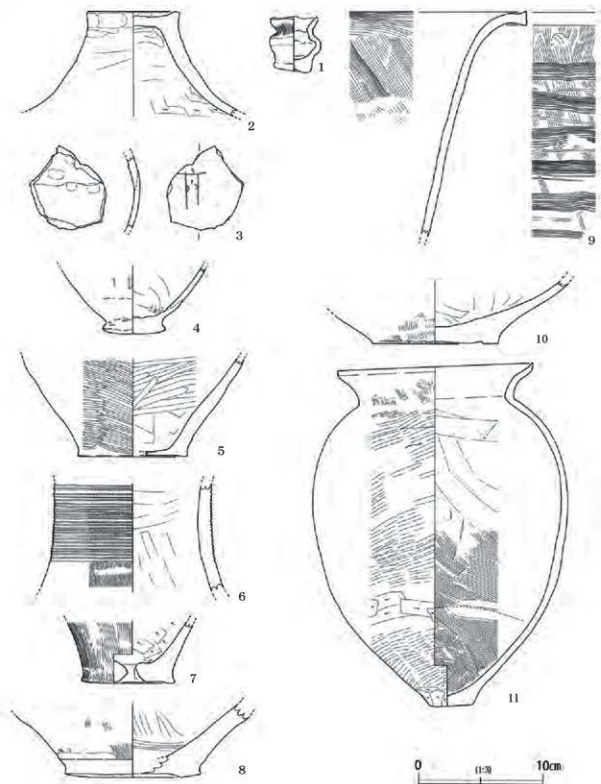


図11 木の本第6-2面 (1・2:44落込、3~5:49落込、6~8:48溝)  
第6-1層出土遺物 (9~11)

に入る。口縁部はタテハケ後ヨコナデ、底部側面はタテケズリである。胴部最大径部から、底部より6cmほど上まで煤附着する。

内面は胴部左上がりハケ後、胴部上半左上がりナデ、外面のヨコナデと同じ位置でハケを切るヨコナデが入る。口縁はヨコナデ、図の点線以下はコゲが附着する。

胎土にはぶい黄橙10YR6/3を呈し、長石・石英含み、細粒にはわずかに黒雲母・角閃石を含む。河内低地産胎土である。

口縁端部には垂直の不明確な面がある程度だが、調整や器形の崩れは見られないので河内V-2~3様式頃のものか。

以下、写真図版のサヌカイト製石器について述べる。

図版14-4は石匙である。ネガ面は石の目が強く出て、打撃方向が明らかではないが、ポジ面では把手の右上方向からの打撃による剥離と分かる。把手の左上にわずかに原礫面が残るので、打撃も原礫面であった可能性が高い。下辺輪郭の大きめの凹みはガジリである。最大厚12.8mmである。

図版15-1は石錐である。ネガ面にわずかに剥片剥離のネガが残り、写真上方からの打撃と分かる。剥離の稜はやや磨滅する。最大厚5.6mmである。

図版15-2はや柳葉形石鏃片と思われる。上部欠損、基部は斜行する。ネガ面に残る剥片剥離面から横長の剥片を利用したと思われる。刃部の剥離は基部側のものが鋒部側のものを切る。最大厚は5.9mmである。

図版15-3は柳葉形石鏃か。やや分厚く、調整を見ても尖頭器とした方が良いかもしれない。ネガ面にわずかに残る剥離面から基部からの打撃による剥片を使用していると思われる。両側面の剥離は鋒部から基部への順で入る。微少な押圧剥離は鋒部周辺と基部側面の一部にのみ施されるが、基部のものは刃部形成ではなくツプシである。最大厚は8.2mmである。

図版15-4は尖頭器である。かなり分厚い。ポジ相当面には原礫面が残り、基部右側はステップ状剥離になっている。その面の両側の剥離は鋒部から基部への順に施されるが、ネガ相当面の剥離はランダムである。特に鋒部左側の剥離は深く抉れ、全体のバランスを損なっている。最大厚12.8mmである。

図版15-5は二次加工のある剥片である。ネガ面には風化が進行してから自然に剥離した面も残る。原礫の表面に近いのであろう。上辺の原礫面を打撃面として剥離した後、両側を打ち欠き、下辺に刃部を形成する。ネガ面側は徐々に薄くなるように加工するが、ポジ面側の刃部の剥離は刃先からの剥離のみで、やや風化の弱い剥離面もあり、使用時の欠損の可能性も考えられる。最大厚16.1mmである。

図版15-6はほぼ二つに割れた搔器、形態からは打製石庖丁の可能性も考えられる。わずかに残る剥片剥離面から横長の剥片を使用している事が分かる。上辺の剥離はツプシ、下辺はネガ面右側の先端付近のみがツプシで、そこから左は刃部形成である。最大厚10.3mmである。

図版16-1は身部の短い石剣である。鐮状の左右の突起はネガ面右側は先端が欠失する。それ以下把部の両側の剥離はツプシである。剥片時点での面はほとんど残らない。身部が把部最大厚8.9mmである。

図版16-2は小型の搔器か。横長の剥片を使用し、上辺はツプシ、下辺は刃部形成をポジ面側からのみ行う。形態からは、石鏃作成中にネガ面左端の上辺からの剥離によって折れ、残りを搔器に作り直したようにも見える。最大厚9.2mmである。

図版16-3は搔器か。横長の剥片を使用し、上辺はツプシ、下辺は刃部形成である。剥離の稜線に磨滅が見られ、ポジ面側に特に顕著である。ただ、ネガ面側の右下方からの割れには磨滅が見られず、これは完成後の破損と思われる。それにより廃棄か。最大厚11.2mmである。

図版16-4は剥片である。上辺に打撃面となった原礫面が残り、ポジ面の打点も残る。最大厚8.9mmである。剥片としてはやや薄すぎて廃棄か。

図版17-3も剥片である。ポジ面・ネガ面とも上辺に打点が残りに、そこに剥離による打撃面があっ

た事を示す。最大厚8.9mmである。

小結 第6-1層包含遺物は、一部切り合いの見えなくなった遺構の遺物が含まれていると思われる他は、ほぼ、第7層と同じ構成を持つと言って良い。第7層上部に形成された自然土壌としては当然の事であろう。しかし、第7層より量の多い弥生時代中期の土器は、第7面遺構の土器構成に似る。サヌカイトの様相は石器製作地であった事を示し、その製品が多様である事は弥生時代後期よりも中期の様相と言える。また、第5層と比較し、この層以下の包含土器の破片が格段に大きなものになり、1片でも実測可能なものが多い状況は、耕作土層と盛土層の差として考える事ができる。

#### 第8項 第6-2面(図12・図版4-1)

この面を検出した時点で、調査区北東辺付近の一部は第6-2層以下が湧水によりヘドロ化し、遺構検出は不可能な状態になっていた。そのため水圧で膨らんでくる部分を放置して調査した。

検出された遺構は、落込・溝・土坑・ピットである。48溝は底部が調査区南西壁側にやや上がり、深い部分が北西から南西に向けて通るので溝と判断した。47・49落込と44落込南西部は、第7面の65溝が埋まる過程で、残された凹地のようなものである。

53~55土坑は、44落込・45溝の肩部から下の斜面で遺構の外形が明確に見え、第6-2面上では不明確であった(図版5-1)。50・51土坑は44落込底部で第7層が露出している部分で検出された(図版4-5)。56土坑は第6層の残る44落込底部で検出された。これらの土坑は全て落込や溝より形成が古く、第7面検出遺構と時期的に近いものと思われる。

落込と溝の埋土は、自然堆積層と思われる「5Y4/1~1/3灰~オリーブ黒 シルト主体 細砂~粗砂あり」だが、46落込と48溝にはその上層に「5Y3/1~2/1オリーブ黒~黒 シルト~極細砂」内に第7層の3~1cmのブロック土を含む層があり、人為的に埋められた可能性がある。落込と溝の埋土からは多量の土器片・石器片が出土し、大きめものは出土状況を記録したが、土器片のほとんどは弥生時代中期以前のもので接合もほとんどしない事から、遺構と同時期的なものとは思われない。位置のみを図12に示しておく。

44落込(図版4-5) 調査区南東辺沿いで一段落ち、底部は平坦である。深さは10~15cmほど。南側で西の47落込、南西の48溝とつながる。底部で検出された50・51土坑は第7層露出部分にあり、その面の58落込の埋土を切り、44落込より先行する遺構であるのは確実なので、第7面で調査した。遺物の出土は散漫で、位置を記録した土器1・2も、たまたま個体把握可能な状態で埋土内にあったけいようである。ほとんど接合する土器はない。

弥生土器は180片を数え、甕17(タタキ3)、壺22、鉢3、高坏1、蓋2である。文様は沈線文が1条のものから7条以上のものまで、各1片ずつ、櫛描文は直線文9、麁状文2、列点文1、扇状文1である。サヌカイトはチップ3、剥片6、石核2、石錐1である。

図11-1は土器1、弥生土器ミニチュア壺である。外面は頸部上下にタテハケ、底部側面に粘土接合痕が残り、最終調整はヨコナデ、内面は底部・胴部・頸部に粘土接合痕が残り口縁部はヨコナデ、他の内面もナデか。胎土にはふい黄2.5Y6/3を呈し、1mm弱の長石・石英が若干あり、角閃石もわずかにある。0.5mm以下の砂粒では角閃石が多く、黒雲母もある。生物骨骼産胎土である。時期を特定できる要素はないが、ミニチュアで、粘土紐を使用した成形で、手捏ねではないのが珍しい。

図11-2は弥生土器裏蓋片である。外面はヨコナデ、天井部側面のみは強めのユビヨコナデで凹部

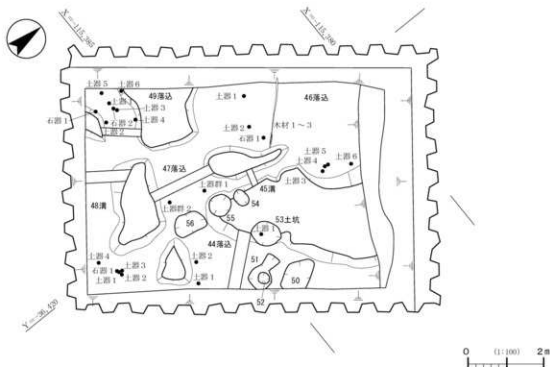


図12 木の本第6-2面 全体図

を形成している。天井部上面は弧状に巡るユピナデである。内面もヨコナデで、天井部付近のみユピナデである。胎土にはふい黄橙10YR7/4を呈し、粗粒の石英・長石多く、わずかにチャートもある。細粒には上記の砂粒の他、黒雲母・泥岩のような黒色砂粒も若干見られる。他地域産であり、摂津産か。時期は特定できない。

図版17-2は石錐か。長軸方向と90度異なる打点方向の剥片から作られている。ボジ面からの成形剥離はなく、ネガ面には一部原礫面が残る。最大厚4.5mmである。

図版17-4は石核である。ネガ面には2面の剥離のみで、右の剥離の際、打点より右が割れ、左の剥離では、下辺付近に風化が強い部分があり、剥離前のひびがあった事を示す。そのため剥離面下半には強い凹凸が生じている。拳大より小さな原礫から剥片を採取していた事が分かる。最大厚39.9mmである。

46落込 調査区北側に広がる落込である。埋土掘削時から湧水が激しくなり、底部の形状把握に若干の不安はあるが、後述の木材1～3の出土状況を見ても底部は平坦のようである。底面の傾きも認められない。深さは安定して8cm程度である。南側で47落込とつながり、南東辺に南から45溝が取り付く。

特徴的なのは落込の検出範囲をほぼ二分するかのようにな木材1～3が北西から南東に直線的に並んで出土した事である(図版5-2)。いずれも樹皮を剥いただけの材で、木材1は側溝掘削時にその北西端を確認し、それより北西には別材も見られない。最大径4.4cm、長さ99cmの直線的な材である。それと46落込の南東肩部をつなぐように木材2・3が併行して並んでいた。どちらも最大径2.4cm、木材2は長さ52cmで、枝の節が2ヶ所に見られその部分でやや曲がる。木材3は長さ41cmで直線的である。これらの周囲では、南西沿いに細かな植物遺体はやや多かった以外は、固定する杭などは見られない。しかし、偶然直線的に並んだとも言いがたい状況である。

出土遺物は多く、土器の破片数は計量していないが全て弥生土器である。ほとんど接合はしない。底

部片は裏が8個体、壺が5個体分確認できる。文様のある破片では、多条沈線文、櫛描文では直線文・簾状文・波状文が確認できる。裏はハケ裏が多く、2～5条の沈線文に刻み目口縁の裏片もあるがタタキ裏片も1片ある。サヌカイトは22点でチップ・剥片・石核があるが製品はない。出土位置を記録したものは土器1～6、石器1があるが、土器2が壺胴部片である以外は、土器1・5・6が裏底部片、土器3・4が壺底部片である。石器1はサヌカイト剥片である。タタキ裏以外は第7層の遺物構成と似て、この遺構と同時期的なものはないように思える。

49落込 (図版5-4) 上述のとおり、第7面65溝西端部分の直上に当たり、形状も似ている。深さは約10cmである。65溝の埋土内で焼土塊が多い部分であることを反映するようにこの落込埋土にも焼土塊が多く見られる。土器片・サヌカイトは集中する事なく全体的に出土した。

出土土器の破片数は弥生土器152片中、裏15、底部は3片。壺は17片で、文様は沈線文5条以上が3、櫛描文(直線・扇状・波状)14、刻み目突帯1である。高坏片1、簾状文の鉢2片。ほとんど接合しない。サヌカイトは13点でチップ4点、剥片8点、石核1点である。

図11-3は図12の49落込内土器1の1片で、土器1-2とした。弥生土器壺胴部片である。内面と破断面に見える粘土接合痕から図の上下方向を特定した。外面には幅1mm前後の沈線で絵画が描かれる。中央上下の短い線は絵画に含まれるのか判然としない。題材も、家や倉とも、人物とも判然としない。内外面最終調整はヨコナデで、胎土は灰黄2.5YR6/2を呈し、1mm弱の角閃石あり、長石・石英若干、細粒には黒雲母もある。生駒西麓産胎土。

図11-4も土器1の1片で、これを中心に壺下半部があるような出土状況であったが、接合しなかった。これを土器1-1とした。弥生土器壺底部片である。外面はタテハケ後ナデ、底部は粗い不定方向ナデ、内面は底部付近にユビオサ工後左上がりナデである。胎土の色・砂粒共にほとんど図11-3と同じで、同一個体と見て良いものと思われる。小ぶりな球胴でミガキも見られず、底部の形態からは弥生時代後期の長頸壺の可能性が高い。

図11-5は土器2で弥生土器壺底部片である。外面はヨコミガキ、底部側面にはその下にヨコナデが残る。底部は棒状工具によるナデである。内面は下部に左上がりナデが残る、それを切って上部にやや右上がりのヨコミガキである。胎土はにぶい褐7.5YR6/3を呈し、粗粒の石英・長石多い。1mm弱の角閃石も若干あり、細粒にも角閃石・黒雲母があるが、石英・長石ほどはない。河内低地産胎土である。底部が径大きく、厚さが薄い形から弥生時代中期のものと思われる。

図版19-1は剥片を採取する前の、原礫面を除去するチップか。原礫面の多く残る方に2面の剥離のネガが残る。ボジ面にも下辺に2面の剥離が見られるが、右は同時期割れか。上辺には打点が残る、剥離面を打撃面になっている。最大厚22.3mmである。

45溝 (図版5-1) 比較的直線的な溝で北は46落込に取り付き、そこから47落込を横断して48溝につながる。47落込とは埋土に切り合いなく、その落込の土器群1が、この溝から流出したかのような雑多な弥生土器の小片の集まりであるのも同時期併存を示しているようである。深さは10cm前後で、底部はやや南に傾斜する。

出土遺物は弥生土器の小片が多く、櫛描直線文・簾状文が見られるが、タタキ裏も2片あり、サヌカイトは剥片5点、チップ1点が出土している。

48溝 (図版5-3) 調査区南西辺に沿って、片方の肩部は調査区外だが、形状からすると南東端は東側に、北西端は西側に曲がるようである。底部で一番深いラインは調査区内に通る、北西側では

T.P.+8.76mと深さ10cm程度だが、南東の45溝が合流する付近ではT.P.+8.59mと深さ20cmを越える。

第7面の同じ位置には75落込が重なり、それが形状から小規模な流路の肩部とも推測されるので、流路埋没後、その肩部に形成される溝状の自然地形かもしれない。蛇行を見せる形態もそれに符号する。

弥生土器が248片出土しており、甕底部3、壺底部3、文様は7条の沈線文帯、櫛描文の直線文・櫛状文・列点文・波状文が見られる。サヌカイトは53点、チップ10、剥片20、二次加工のある剥片4、石核4・石鏃4・石剣2・石匙1が見られる。他にスサ入りで成形面のある粘土塊が4点ある。南東端付近で出土位置を記録したものは、土器1が壺らしき底部片、土器2が7条沈線文帯入り長頸壺頸部片、土器3が壺胴部片、土器4が甕底部、石器1が石鏃である。やはり接合はほとんどせず、遺構と同時期的な遺物はないようである。

図11-6は土器2で、弥生土器長頸壺頸部片である。外面はタテハケ後、多条沈線文、残存部だけでも22条を数える。内面は破片下半はタテナデ、それを切って上半ヨコナデである。胎土はにぶい橙7.5YR7/4を呈し、3~1mmの石英多し、チャート・長石あり、中粒砂以下も同様で、他地域産か。弥生時代中期前葉頃のものか。

図11-7は土器4、弥生土器甕底部片である。外面はタテハケ後、部分的に弱いヨコナデ、底部はナデで、中央が周囲幅4mm前後から1mm強高い平坦面を為す。底部の孔内もヨコナデが入る。内面は左上がりナデである。胎土は褐灰10YR5/1を呈し、粗粒の石英・1mm前後の角閃石が多く、長石もあり、中粒砂以下では上記に加え、黒雲母も見られる。生駒西麓産胎土である。弥生時代中期のものであろう。

図11-8は土器1で、弥生土器甕底部片である。外面はタテハケ後ヨコナデ、特に底部側面は強めのヨココビナデが入る。底部は周囲幅1.7cmほどが無調整で植物茎圧痕が見られ、中央はそこから3mmほど上がり平坦面を為し、ナデが見られる。内面は底部付近ヨコナデ、上部はタテナデで、両者の切り合いは不明である。胎土は黄灰2.5Y5/1を呈し、粗粒の石英・長石多し、2~1mmのチャート・泥岩のような黑色砂粒が若干、中粒砂以下ではそれに黒雲母も見られる。摂津産か。弥生時代中期か。

図版17-5は石剣の基部か。しかし、ボジ面は右に残る原礫面を打撃面にした剥離で、ネガ面は上辺側に打点があり打撃方向が90度異なる。また上下辺ともツブシが入るが、上辺は直線的で、下辺は粗く蛇行する。最大厚5.8mmである。

図版18-1は石鏃である。刃部先端は折れる。剥片剥離の打点はネガ・ボジ面で異なるがいずれも写真の上方向からである。最大厚は把手部と刃部の境にあり6.0mmである。

図版18-2は柳葉形石鏃である。ネガ面右方向に打点を持つ横長の剥片から作られている。刃部形成の剥離は基本的に鋒部から基部へと進行している。ネガ面のステップ状剥離は剥片ネガ面に生じたヒビが刃部形成時に剥離したものか。最大厚は4.2mmである。

図版18-3は石鏃か。上下を欠失する。左右から剥離して中軸の稜線を形成し、その後刃部に微細な押し剥離を施す。稜線がやや磨滅する。最大厚5.4mmである。

図版18-4は尖頭器である。成形剥離にステップ状が多く、やや粗い印象を受ける。微細な押し剥離はわずかである。やや斜めになる基部には原礫面が残る。最大厚9.1mmである。

図版18-5は石鏃片である。ボジ面にわずかに剥片剥離時の面が残り、上辺方向からの打撃で剥離した事が分かる。ネガ面の左は折れ、右は柄に装着するための上下に通る凹部が形成されている。上下片はツブシ、右端は原礫面である。最大厚12.4mmである。

図版20-1は尖頭器である。ボジ相当面の一部に原礫面が残る。刃部形成の剥離はランダムで規則

性はない。最大厚8.1mmである。

土坑 50～56土坑は、先述の通り、この面では切込みが不明確なものもあり、落込・溝より古く、第7面で調査したので、次項で後述する。ただ、自然土壌の上部でも見えやすい遺構がより新しいものとすれば、51～56土坑は、この面の落込・溝と第7面検出遺構の間の時期の遺構と捉える事ができるかもしれない。

第6-2層包含遺物 この層の包含遺物も多量で、土器破片数は計量していない。弥生土器片はタタキ甕など弥生時代後期以降のものは見られず、自然土壌層でもあるので、基本的には第7層と同様と考えられる。底部片では甕10個体、壺5個体が確認できる。文様は沈線文が3～6条、櫛描の直線文・波状文が見られる。サヌカイトは26点、取り上げられなかった微細なチップも多かったが、チップ7、剥片17、石核1・搔器1を回収できた。接合する剥片が確認できたのは特徴的である。また、第6-2面の遺構にも若干見られた、ヌサ入りで成形面のある粘土塊が6点ほど出土している。

図版19-2～4は大型の剥片の接合資料である。19-4の状態では、上下左右の辺に原礫面が残る。右の面も剥離のネガで、ネガ面と90度打撃方向が異なり、石核のような状況である。ネガ面の左辺は両面から小さめの剥離が見られるが、これは原礫面除去や剥離面調整か。上下片からの剥離は、そこを打撃面にして剥片採取を試みたものか。その後、ネガ面とほぼ同じ打点で19-3を剥離する。19-2・3の接合状況は、ネガ面左の原礫面付近に2ヶ所、同時期割れと見られる薄い空隙が開くのみである。残った19-2は石核と言って良いだろう。接合時の最大厚は34.1mmである。

図版20-3は搔器である。ネガ面右下の剥離面は右側の打点をボジ面と共有しており、同時期割れである。その左上の気孔のない平坦な風化面がおそらく剥離前に原礫面から進行したヒビで、そのために同時期割れしたのであろう。左上辺は折れで、上部の剥離は把手状に形を整えたものか。その後下辺に両面から刃部形成するが、ネガ面は左端の原礫面を残し、その部分は刃部になっていない。最大厚は8.3mmである。

小結 この面で検出された遺構は、本来第6面から切り込んでいた遺構のうち、比較的新しいものと考えられる事ができる。中でも44・47・49落込と48溝は、第7面検出遺構が埋没していった後に残された自然地形の凹地と理解するのが妥当であろう。しかし、46落込はある程度の面積が検出されても、その範囲で底部が平坦であり、45溝はそこから48溝に排水する経路として最適である。その組み合わせは耕作地的であると言える。それらの落込・溝は46落込にタタキ甕片が見られるように、弥生時代後期頃のもので、第6-1層の遺物から見れば下限が古墳時代前期となる。

ならばこの面であらうじて検出された土坑類は、やはり第7面の集落域的な、密集する土坑・ピット類の末尾に位置づけられ、弥生時代中期のものであろう。

この面検出の遺構で耕作地の存在が肯定できるならば、その時期は弥生時代中期に第7層が盛土され、その上面に土坑・ピット類が累積して形成された後、弥生時代後期から、第6-1層出土の土師器小型丸底鉢から見れば古墳時代前期までの間と考えられる。強く土壌化が進行して形成された第6-1層の存在からすれば、その後第5層が形成されるまでの間、長く放置される時期があったと推測される。

遺構出土の遺物も、土器は大きめの破片が多く、若干の接合例はあるが、接合しても大きめの破片を成すのみで、個体で存在したものは44落込土器1のミニチュア壺しかない。弥生時代中期の土器が多いのは、この面では見えない第7面検出遺構の埋土に包含されていたものに由来するのであろう。わずかに49落込土器1が、弥生時代後期の長頸壺の可能性があり、46落込のタタキ甕片と共に、遺構と同時



期的と言えるのみである。サヌカイトの石器類も第6-1層と同じような状況である。ただ、第6-2層から剥片の接合資料が確認された事は石器製作が行われたとの見解を補強する資料である。

#### 第9項 第7面(図13・図版5-5)

この面ではさらに下面からの湧水が激しくなり、形成された湧水孔は20を越えた。層がヘドロ化して遺構が検出できない状態の部分も北側で調査区の1/4に近い面積に達した。93ピット、94土坑などは輪郭の一部を確認したが、掘削前に埋土と基盤層の区別がつかなくなり、95土器群は遺構に伴うものかも判然としない。

検出された遺構は1本の溝・3個の落込・多数の土坑とピットである。遺構同士の切り合いも多く見られる。土坑は長さ1m前後の不整形な長楕円形の平面形のものが目立つ。ピットはこの面では深さ10cm以下のものばかりだが、本来の切り込み面が第6面だとすると深さ30cmを超えるものも多く、柱穴の可能性も考えられるが、柱痕などが認められるものもなく、建物のように並ぶものもない。

面の高さは湧水の影響もあるので本来の状況はよく分からないが、T.P.+8.64~8.70mの間でほとんど平坦であるようだ。自然土壌下面だが、土壌化の進行と共に自然の浸蝕で凹凸ができる以前の、盛土上面の状況を反映している可能性も考えられる。

遺構埋土は、焼土や炭化物が混じるものが多く、特に調査区西隅付近の遺構埋土に焼土塊が多い。全ての遺構の埋土は以下の4要素の組み合わせに類型化できる。

A:2.5Y2/1黒 シルト~細砂 第6-1層に似る、自然土壌由来である。埋土の主体になる場合が多い。

B:5Y3/1~4/1オリーブ黒~灰 シルト~細砂 中砂~粗砂若干あり 第6-2層に似る、自然土壌由来である。埋土の主体になる場合が多い。

C:5G6/1~5/1緑灰 粘土~細砂 第7・8層に似る。土壌化の及ばないそれらの層まで掘削が達して入ったものか。ブロック土としてある場合が多い。

D:2.5YR6/8明赤褐 シルト 焼土である。ブロック土として入る。今回の調査では遺構壁や底面自体が被火により赤変した例はなかった。

E:炭化物 検出してすぐに黒色化する植物遺体ではなく、明確に被火により炭化した植物片である。

各遺構の埋土も上記A~Eの組み合わせとして記述する。全体としては、埋土の主体がAよりもBであるものが、土壌化の進行がまだ軽い時点で掘削された古い時代の遺構と考えられ、それは遺構の切り合いとも対応する。確認できるだけでも58落込・59土坑を切る50土坑、90土坑を切る89土坑・92ピット、68ピット・72土坑を切る67・69・71ピット、75落込を切る74ピット、77ピットを切る78ピット、85ピットを切る84ピットは、切られる方の埋土がB主体で、切る方の埋土がA主体である。

58落込 調査区南東壁にかかる不定形な落込で南西側は50土坑に切られている。深さは10cm程度で、埋土は上述のB内Cの3~1cmのブロックとEである。不定形な形は自然地形のようだが、埋土にはブロック土があるので、自然土壌形成後に人為的に埋められたものであろう。

出土遺物は弥生土器25片(裏口縁2、壺4(底部1、広口壺口縁1、櫛描直線文1、麿状文1))、サヌカイト4点(チップ1、剥片2、二次加工のある剥片1)である。

図14-1は弥生土器広口壺口縁部片である。口縁端部を上下に拡張しその垂直に近い外面に3条の凹線文が入る。水平に近く開いた口縁上面には櫛描列点文が並ぶ。外面はナデ、内面はヨコハケ後ヨコナデである。胎土にはぶい黄橙10YR6/3を呈し、3~1mmの石英・長石あり、中粒砂以下ではそれに

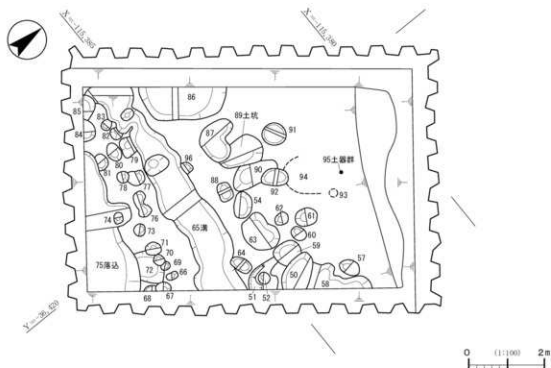


図13 木の本第7面 全体図

わずかに角閃石・黒雲母が加わる。河内低地産胎土。河内地域で、凹線文は少数派で、このタイプの口縁部に入るのは河内IV-1～3様式頃か。開いた口縁上面に文様を施すのも同時期に類例が多い。

図版20-4は二次加工のある剥片である。ネガ面左辺に表裏から押圧剥離による刃部形成が見られる。最大厚8.3mmである。小型の挿器のようなものか。

75落込 (図15・図版6-3) 調査区南西壁にかかり、北側肩部は西北西から入り、南東に抜ける。検出範囲のほぼ中央で北東に突出する部分があり、そこで埋土上面を74ピットが切る。肩部から10cm弱落ちた後、一旦緩い傾斜になるが再び傾斜がきつくなり、調査区内でも深い部分は南隅で深さ40cmを越えるようである。埋土はB内にCのぼやけた3～1cmのブロックにD・Eが若干、ブロック土の輪郭がぼやける事から、滞水状態で人為的に埋められたようである。その事と遺構の形状から、大型の溝か、小規模な流路であった可能性が高い。

出土遺物は、弥生土器52片 (裏10 (口縁9、沈線文3～4条4)、壺25 (底部4、広口4、沈線文4、櫛描直線文1、簾状文1)、蓋1)、サヌカイト剥片10である。出土は散発的で、ただ、肩部が突出する付近でのみ、やや集中が見られたので、出土状況を記録した (図15)。壺下半部 (図14-2) とハケ裏底部片である。他の土器片はほとんど接合しなかった。

図14-2は図15で出土状況を記録した弥生土器壺下半部である。外面は下部のタテハケ後、上部のヨコハケ、底部側面ヨコナデ、底部ナデで、最後にミガキ散在する。ハケは部分によって目の間隔が異なるが同一工具のようである。内面は底部付近ユビオサエ、左上がりハケ後、全面ヨコナデ、最後に下部にミガキ散在する。胎土にはぶい黄2.5Y6/3を呈し、2～1mmの石英あり、1mm前後の長石・角閃石若干、黒雲母わずか、中粒砂以下も同様だが角閃石はわずかで、河内低地産胎土である。

時期を限定できる要素はないが、胴部最大径位置が高く、肩が張りそうな器形と言える。

86落込 調査区北西壁にかかる。深さ4cmほどに皿状に落ち込む。埋土はB内にCの0.5cmほどの小

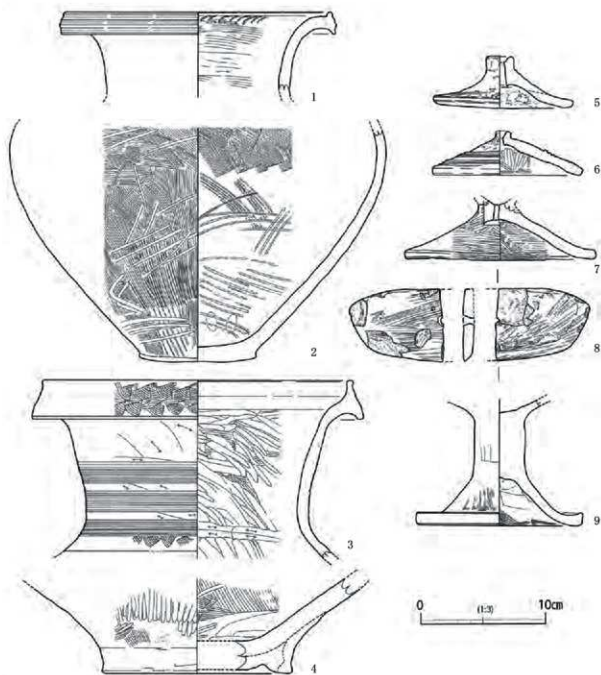


図14 木の本第7面 遺構出土遺物（1：58 落込、2：75 落込、3・4：65 溝、5～8：89 土坑、9：53 土坑）

ロックを含む。この面では珍しく、他の遺構と切り合いが見られない。自然地形か。

遺物は、弥生土器が43片（罍口縁1、壺4（刻み目突帯2条1、櫛描直線文1、糜状文2））、スサ入り、成形面ありの粘土塊2、サヌカイト2点（剝片・チップ）である。

65溝（図15・図版6-2） 肩部が直線的ではないが、ほぼ東西で、東がわずかに南に曲がる方向性で調査区を抜ける溝である。底の高さはほぼT.P.+8.63mほどだが、東端でやや下がり始め、T.P.+8.59mまで下がる。また、西端で85ピットの下に枝溝が伸びていた可能性もあり、85ピットに近い部分は深くなる。流水があったとすれば西から東への流れであろう。西半の底部に2ヶ所土坑状に深くなる部分があり、別遺構とも思われるが、埋土の違いは確認できなかった。埋土は単層でA主体、だが西端付近はDの焼土塊が非常に多く、率的にはAより多いほどであった。ブロックの大きさは10cmを越える

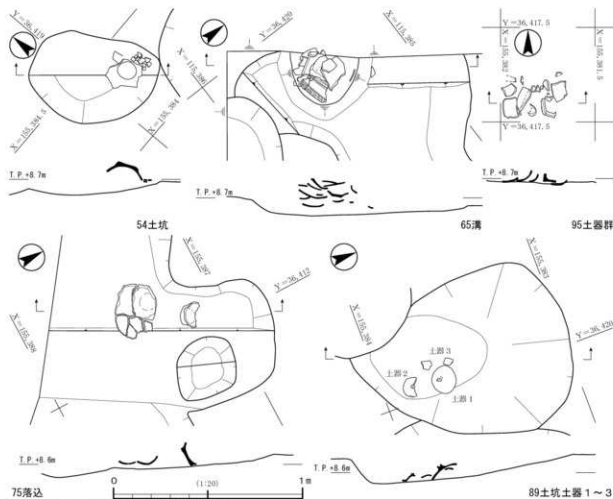


図15 木の本第7面 土器出土状況

ものもある。Eの炭化物も混じる。東に行くとどちらも少なくなるが、東端でもわずかながら入る。遺構形成時期の終わり頃に底浚いして埋められ、その際、西端部分に集中的に焼土が入られたのであろう。

この溝を境にして、北側には土坑が、南側にはピットが多い。75落込が溝か流路なら、この溝はその分水路の可能性が高い。

西端側溝際に土器片が集中しており、土器群1として出土状況を記録した。上部の土器片は検出肩部より14cmほど高い位置にあり、そこから底部より4cmほど上まで破片が累重している。破片は凹面を上にしたものが多く、接合するものは少ない。内容は弥生土器102片(甕2(底部1、口縁1)、壺30(広口9、沈線文2、櫛描直線文14、扇状文5)、サヌカイト剥片1)である。壺の広口9片は同一個体で図14-3である。

それ以外の出土遺物は、弥生土器156片(甕9(底1、口縁8)、壺22(底2、広口4、櫛描直線文7、麁状文1、流水文2、沈線文6)、鉢2、器台3)、スサ入り成形面あり焼土塊3、サヌカイト12(チップ1、剥片8、石核1、石鎌1、石錐1)である。

図14-3は土器群1内の弥生土器広口壺口縁部片である。口縁端部は上下に大きく拡張し、その面にヨコナデ後、櫛描直線文1帯、その上に上下2列に扇状文を並べる。外面は右上がりナデ後、3条の櫛描直線文帯、最下の下端に沿い扇状文を並べ、その下には麁状文帯があったようである。内面は、口縁部はヨコナデ、頸部はヨコハケ後、左上がりミガキで、胴部との境には2条のヨコナデが入り、胴部

は左上がりナデである。胎土は橙2.5YR6/6を呈し、8～5mmの閃緑岩礫がわずかに見られる。粗粒の石英・長石あり、中粒砂以下ではそれらに加えわずかに角閃石がある。河内低地産胎土である。頸部の長さと同軸端部の拡張の度合いから見ると河内Ⅲ-1様式頃のものか。

図14-4も土器群1内の裏底部片か。外面はタテハケ後、底部側面ヨコナデ、上部はタテミガキ、底部は、周辺は磨滅するが、ナデ、磨滅した周辺部分と中の粘土板を接合した部分に強いユビナデを入れる。内面は左上がりハケ後、底部に右上がりナデ、ミガキ散在する。粘土接合に沿った剥離から、底部の作りは、円形の粘土板に体部の粘土を乗せ、粘土板周囲にさらに粘土を付加して補強している事がわかった。胎土は褐灰10YR6/3を呈し、粗粒の石英多く、長石・角閃石あり、15mmの閃緑岩礫1個確認でき、中粒砂以下は角閃石が最多で、黒雲母もある。生駒西麓産胎土である。河内型ミガキ裏か。

図版20-2は石錐である。ネガ面に原礫面が残り、横長の剥片の下端部付近を使用しているのが分かる。その右辺は押圧剥離で刃部形成されているが、左片は折れのような剥離があるのみである。最大厚5.1mmである。

図版20-5は小型の石錐である。ボジ面の剥片剥離の打撃は右方向から。左の辺は折れ、刃部先端も折れか。実用品か疑問な大きさである。最大厚は4.7mmである。

図版20-6は被火痕跡があり、煤も付着するので石質が分かりにくく、サヌカイトより軟らかい凝灰岩の可能性が高い。石庖丁の可能性もある。上辺は粗いが丸く加工する。表裏とも研磨され、石庖丁によく見られる擦痕がある。左右端部は折れ状だが、磨滅している。下辺は全て割れて、刃部は確認できない。割れの剥離面には煤が付着しているものと、それより新しく付着の見られないものもある。最大厚14.8mm。

図版21-1は剥片である。ネガ面上辺から右側、下辺に至るまで原礫面が遺存し、原礫は非常に小さい。左辺は折れて、それと打点付近が厚さ1mmほどになったため廃棄か。最大厚10.2mmである。

50土坑 第6-2面44落込の底面で検出されたものである。長楕円の平面形で幅約75cm、長さは検出範囲でも1.1mを越す。この面での深さは約14cmである。埋土はA内Dの2cmほどのブロックわずかにあり。出土遺物は弥生土器43片（裏口縁7、壺7（底部1））砂岩礫1、サヌカイト剥片1で、意図的に入れられたと思われるものはない。

51土坑 50土坑の南西隣で同じように検出された。52ピットが埋土を切る。表面が焼土に覆われていたので、遺構面が被火した痕跡かと思われたが、断面で見ると、焼土もブロック土で、下部にはAもブロックで混じり、炭化物もあった。深さ約5cm、壁面も底面も被火の痕跡はない。何らかの施設の防湿のための下部構造と推測される。遺物は出土していない。

53土坑 第6-2面では不明確にしか見えなかったがその面でも調査し全体図にもそちらで記録したが、結果的に第7面検出遺構と同じものとすべきと考えたので、ここで記載する。51土坑の北西隣で、63土坑を切っている事になる。第6-2面でも既に鉢脚部片（図14-9）が見えていたが、他に遺物はない。埋土はA内にCのブロックわずかである。

図14-9は台付き鉢脚部片か。磨滅が激しいが、外面は脚部タテハケ、脚裾端部ヨコナデ、脚部内面は脚裾部ヨコハケ、それを切り上部ヨコナデ、最上部はヨコユビナデである。胎土は暗黄灰2.5Y4/2を呈し、角閃石が多く、石英・長石・黒雲母がある典型的な生駒西麓産胎土である。弥生中期頃のものであろう。やや長い中実の脚柱部は弥生時代中期の台付き鉢に類例が見られ、脚裾部の形態も弥生時代的と言える。

54土坑(図15・図版6-1) 53土坑と同じ理由でこの面を調査した。土器1とした弥生土器壺底部は第6-2面でもほとんどが露出している状態であった。他には別個体らしき壺の破片3片とサヌカイト剥片1点が出土するのみである。長軸約68cmの不整楕円形で、深さはこの面で5cm弱だが、土器1から見れば本来は20cm以上あった事が分かる。埋土はA・Dの4~1cmのブロックとEである。土器1は意図的に入れられた可能性がやや高いが、磨滅激しく、調整等が不明なため図化しなかった。壺底部だが、時期を特定できる要素はない。

89土坑(図15・図版6-4) 90土坑をわずかに切り、87土坑に切られる。平面形は北の幅が大きい隅丸三角形のような形で長軸約1.17m、底部は南側に寄り、深さ約14cmである。埋土はA内にB・C・Dの5~1cmのブロックとEである。出土遺物は弥生土器27片(裏口縁4(沈線文4条以下4)、壺4(貼り付け突帯1、沈線文1)、蓋4)、炭化木1点、石庖丁1片、サヌカイト剥片1点である。完形に近い弥生土器壺蓋(図14-7)もあるので、意図的に入れられたようにも見えるが、他は完形率が悪く、断言は出来ない。

図14-5は土器2とした弥生土器壺蓋片である。残存率は50%ほど。つまみ中央に上から孔が貫通する。外面はつまみ側面と裾部にユビオサエが残り、全体にヨコナデ、裾部から端部にミガキが散在する。内面は天井部がタテナデ、裾部はユビオサエ後ヨコナデである。胎土は橙2.5YR6/6を呈し、粗粒の石英・長石が多く、チャートがわずかにある。中粒砂以下は石英・長石のみで、産地は不明である。時期的には弥生時代前期に類例の多い型式としか言えない。

図14-6は埋土内出土の2片が接合し、残存率70%ほどの弥生土器壺蓋片である。つまみ中央に上から孔が貫通する。外面は沈線3条とその上に段が付く文様帯が2帯巡る。つまみ側面はユビオサエ、天井部と裾部はヨコナデだが、文様帯の間はタテナデが残る。内面は天井部タテミガキ、裾部にはそれを切るヨコミガキ、天井部の孔周辺にのみナデが残る。胎土は赤褐2.5YR4/6を呈し、粗粒で磨滅した石英が多く、1mm前後の長石若干・角閃石わずか、中粒砂以下は石英・長石・角閃石・黒雲母がある。河内低地産である。文様帯から見れば河内I-2~4様式に限定できる。

図14-7は土器1とした弥生土器壺蓋である。双耳状に突出した二つのつまみの先端のみ欠失し、その間に孔が貫通する。外面はつまみにタテナデが残る以外はヨコミガキ、ミガキは方向の合う単位があり、裾部で単位が、右が左を切る関係で、4単位で一周、それを天井部の同じ構成のミガキが切る。内面は全面ヨコミガキ、外面と同様の単位があるが、切り合は左が右を、裾部が天井部の単位を切る。胎土はにぶい黄橙10YR6/3を呈し、粗粒の石英・長石を多く含み、1mm弱のチャートがわずかにある。中粒砂以下は石英・長石に角閃石がわずかにあり。河内低地産胎土である。つまみの形状は河内I-2様式に類例があり、弥生時代前期中葉~後葉のものであろう。

図14-8は粘板岩製石庖丁片である。被火の痕跡があり、全体に灰色化、一部赤変する。はげたような割れやヒビもそのせいか。孔は1個しか残らないが、両面穿孔である。表裏に擦痕残る。

これらの遺物を見ても、第7層に弥生時代中期中葉の遺物まで含むのと齟齬があり、遺構と同期的な遺物ではないようである。

95土器群(図15・図版6-5) 調査区北東側で比較的に土器片が集中していた部分である。第7層が完全にヘドロ化していたので遺構の有無は不明だが、土器片の下端は水平に揃う。ただ、面検出以前から上に膨張していた部分なので、遺構の底部にあったものの疑いもある。遺物は弥生土器35片(裏3(底部2、口縁1)、壺8(底1、広口2、沈線文4))、砂岩礫1点、サヌカイトチップ1点である。

接合するものはなかった。裏口縁部片は口縁に刻み目で、胴部タテハケ、胴の張らないタイプである。広口壺口縁片は2片とも端部に拡張のない面があり、1片はその下辺に刻み目が入る。沈線文は2条以上・3条・4条・5条以上が各1片である。

第7層包含遺物(図16・図版21~24) 北東付近のヘドロ化した部分は混入を防ぐため遺物を分別したが、それ以外でコンテナ5箱分の遺物が出土した。

ただし、第7層は第8面検出を目指して掘削したが、四周の側溝を先に充分掘り下げ、2台のポンプを稼働させても、第8面は検出した数秒のみ土色が見えた後、すぐに泥水に覆われるような状況になり、遺構が存在する事は分かったが、その輪郭を検出する事さえ不可能な状態であった。また、安全面でも不安が生じてきたので、第7層掘削と同時に第8面の遺構とおぼしき土層も掘り上げ、遺物を回収した。そのため、第7層包含遺物としたものの中に第8面の遺構内の遺物がかなり入っていると考えられる。とは言え、第7層自体にもかなり大きな破片の土器などの遺物が密度高く含まれている事は現場で確認している。また、第8面の遺構は弥生時代前期のもの可能性が高いが、第7層にも前期の土器片が含まれている事も確認した。

その内容は、量が多いため、破片数の計量はしていないが、弥生土器では、壺が最多で、底部片で確認できる個体数は11個、垂下口縁下端に刻み目の入る広口壺口縁1片、肩部突帯あり(図16-5含む)、木葉文6片あり、沈線文は2~4条のみだが、垂下口縁に横状文の入る図16-6が1片あり、櫛描直線文があと1片ある。

裏は底部片で把握できる個体数は9個、口縁はほとんどが刻み目あり、沈線文は3~4条のみ。体部調整はタテハケ・タテミガキ・ナデが確認できる。蓋は7片あり、木葉文のあるもの(図16-4)1片、鉢は図16-8~10が確認できたのみである。

サマカイトは14点取り上げたが、原礫・石核・剥片・チップで製品が見られない。見落としたものもあるように思われ、微細なチップも多く見られたが取り上げられなかった。

図16-1は弥生土器蓋片である。つまみの上部は欠失しているが、天井部頂点よりややずれ、その頂点側にわずかに上から下に抜ける穿孔が残るので、図14-7のような双耳形つまみの片方と思われる。外面はつまみ周辺と裾部2条の沈線文から端部までのみナデ残り、天井部はタテミガキ、裾部はヨコミガキである。内面は頂部にナデ残り、その周囲はヨコミガキ、その下にタテミガキ、裾部はヨコミガキ、ユビオサエが残るがミガキより前である。胎土にはぶい褐7.5YR5/4を呈し、長石・石英あり、黒雲母わずか、中粒砂以下にはわずかにチャートと黒泥片岩が見られる。産地不明で、沈線文2条で考えれば弥生時代前期中葉から後葉か。

図16-2はつまみのない弥生土器壺蓋で、裾部の1/4を欠く。外面は裾端部ヨコナデ、端部近くにユビオサエ後、ほぼ全面ミガキである。内面は頂部付近ユビオサエ後ナデ、裾端部近くにユビオサエの後、ミガキ。胎土は暗黄灰2.5Y4/2を呈し、角閃石あり、長石・石英若干、中粒砂以下は上記のほか黒雲母ありで、生駒西麓産胎土である。時期は弥生時代前期か。

図16-3も弥生土器壺蓋である。裾部を30%ほど欠く。つまみは外面にユビオサエ並び、内面はユビナデ、中央に穿孔する。外面はそれ以下はヨコナデ後ヨコミガキ、内面も同様だがミガキは天井部には及ばない。胎土は褐灰5YR5/1を呈し、石英・長石あり、黒雲母若干、チャートわずかで、中粒砂以下は石英・長石・チャートのみである。他地域産か。弥生時代前期か。

図16-4も弥生土器壺蓋片である。器壁がやや荒れ、内外面ナデがミガキか判然としない。外面に

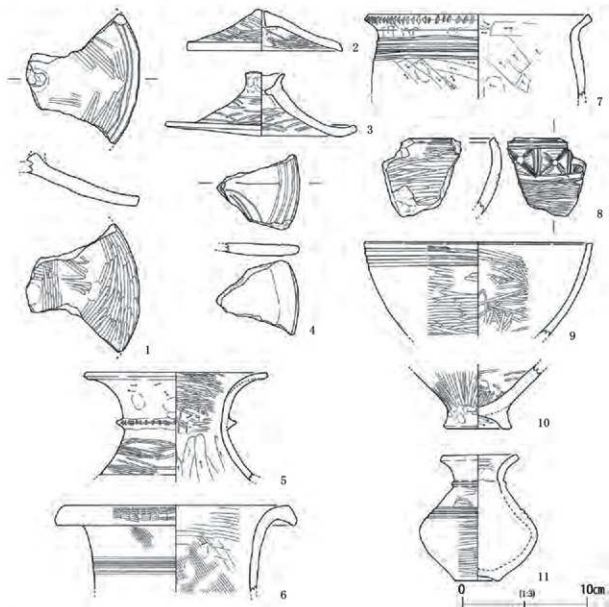


図16 木の本第7層（1～10）・第8面遺構？（11）出土遺物

は木葉文、一葉分の文様の先端にそれに接するもう一葉の先端が残る。間を画する直線の沈線はそれより細い。裾部には3条の沈線文が巡る。胎土は灰黄褐10YR5/2を呈し、長石・石英あり、角閃石わずか、中粒砂以下も同様で、河内低地産胎土である。河内1-1～2様式頃か。

図16-5は弥生土器広口壺片である。外面は刻み目突帯から上にユビオサエ散在し、ヨコナデ後、突帯より下にミガキである。残存部下端にわずかに段の痕跡残る。内面は下部にタテナデ、突帯の裏にヨコケズリが入るが、そこから上端までヨコナデ後ミガキである。胎土にはふい黄橙10YR7/3を呈し、長石あり、石英若干、角閃石わずか、中粒砂以下には黒雲母も若干あるが、角閃石はあまり多くない。河内低地産胎土である。肩部の段と刻み目突帯から見ると河内1-2様式にありうるものか。

図16-6は弥生土器広口壺片である。口縁部周は20%ほど残存、全体の残存率では10%以下の、第7層内では小さめの破片だが、接合する破片もなく、第7面の見落とし遺構のものとは思われない。やや弱めに垂下する口縁端部には簾状文、頸部には櫛描直線文が入る。外面はタテナ後ナデ、ユビオサエの痕跡残り、左上がりハケ後口縁部ヨコハケである。胎土は赤褐5YR4/6を呈し、粗粒の石英あり、



角閃石・長石若干、中粒砂以下は角閃石多く、黒雲母も見られる。生駒西麓産胎土である。文様と口縁端部の形態からすれば、河内Ⅲ様式内におさまるものと思われる。

図16-7は弥生土器裏片である。刻み目口縁に4条の沈線文である。外面は頸部にユビオサエ残り沈線文以上はヨコナデ、以下は左上がりナデ、内面も左上がりナデで、口縁部のヨコナデがそれを切る。胎土は灰N3/0を呈し、石英・長石多く、中粒砂以下には角閃石と黒雲母が見られるがわずかの、河内低地産胎土である。裏で沈線文が4条であると、河内Ⅰ-3～Ⅱ-1様式の期間であろう。

図16-8は弥生土器鉢片である。内外面ともヨコナデ後ヨコミガキで、外面に木葉文帯がある。木葉文帯は先ず、上下2条の沈線を入れ、その間を3条1単位の縦の沈線で正方形に区画する。中の木葉文は葉の中軸線を先に入れる。最後に木葉文中央を棒状工具で浅く刺突する。胎土は灰褐7.5YR4/2を呈し、石英・長石あり、中粒砂以下には種別不明な黒色砂粒もわずかにある。河内低地産か。丁寧な木葉文帯からすれば河内Ⅰ-1様式のものであろう。

図16-9も弥生土器鉢片、口縁部周15%ほど残存する破片である。内外面ともミガキで、外面には3条の沈線文、最上部の沈線より上にはヨコナデ残る。胎土は橙5YR6/6を呈し、石英多し、長石若干、黒雲母わずか、中粒砂以下には角閃石もわずかにありで、河内低地産胎土である。時期は弥生時代前期頃としか言えない。

図16-10は弥生土器鉢底部片で、底部周は40%ほど残る。外面は底部と体部の境付近にタテケズリ後、底部側面ヨコナデ、最後にミガキである。内面はナデ後ミガキ、底部内面はユビナデである。胎土はにぶい褐7.5YR6/3を呈し、石英・長石多し、角閃石・黒雲母・チャートわずか、中粒砂以下は石英・長石のみで、河内低地産胎土である。時期は特定できない。

図16-11は第7層掘削時に出土したが、明らかに第8面の遺構らしき部分から出土した。小型の弥生土器壺である。口縁部を若干欠失するのみ。外面は頸部に削り出し突帯、肩部に3条の沈線文がある。口縁端部ヨコナデ、それ以下沈線文帯まではタテナデが残る。突帯以下はミガキで、底部は不定方向ナデである。内面は口縁部はユビオサエ後ミガキ、頸部以下は観察できなかった。胎土は黒褐10YR3/1を呈し、長石・石英多し、黒雲母・角閃石わずかで、中粒砂以下も同様である。河内低地産胎土である。肩の段が沈線文帯化し、3条までで、削り出し突帯が残る時期とすれば河内Ⅰ-2～3様式であろう。

図版21-2はチップである。ボジ面が凹面を成し、ネガ面の二つの剝離面と断面正三角形形状になるので、突出部を除去した剝離面調整か。最大厚8.0mmである。

図版21-3は剥片か。ネガ面の剝離は打点がほぼ180度違い、原礫面除去か。最大厚5.2mmである。

図版21-4は剥片である。下端部は折れで、原礫はかなり上下幅がある。最大厚10.5mmである。

図版22-1は石核というより原礫か。ネガ面左辺の剝離は表裏同時割れである。この礫自体で何か作ろうとしたのか。最大厚24.9mmである。

図版22-2は剥片である。上辺打撃面は原礫面である。最大厚6.6mmである。

図版22-3は剥片で、ネガ面の先行する二つの剝離は打撃方向が右からである。最大厚9.7mmである。

図版22-4は剥片である。ネガ面上下は折れで、そのためボジ面の打点から右側しか剝離しなかったようだ。最大厚19.4mmである。

図版23-1は剥片か。ネガ面としたほうが全て同時期割れならボジ面である。石英の捕獲岩が多く、そのため複雑な剝離を見せる。最大厚15.6mmである。

図版23-2は剥片で、上辺が原礫面の打撃面で、ボジ面の打点から右側のみ剝離している。厚さも

非常に薄い。最大厚4.0mmである。

図版23-3は原礫面除去のチップか。上辺は原礫面からの三つの打撃で打撃面を作り、それから本品を剥離している。最大厚18.8mmである。

図版23-4はチップか。ネガ面相当の面の左下は右方向からの打撃で、それ以外は破碎したような折れである。本品自体が折れた部分か。最大厚26.4mmである。

図版24-1は原礫である。試し割りしたような剥離面が二つのみで、一つはステップ状剥離になっている。最大厚27.6mmである。

図版24-2は原礫面除去のチップで、ネガ面はポジ面と同時期割れである。最大厚9.8mmである。

図版24-3は剥片か、ポジ面とネガ面二つの剥離はそれぞれ打点方向が異なる。上辺はポジ面の打撃面、右下は折れである。最大厚9.2mmである。

**第8層の状況** 第8層は、第7層掘削前に側溝を下げ、そこで観察したところでは、無遺物の水成堆積層で、有機物をほとんど含まず明度は高い。上部は細砂～シルトだが、噴出孔から水と共に噴出する砂粒は中砂であり、側溝断面でも級化構造が見られた。

有機物を含まない明度の高さは、洪水堆積層ゆえと思われるが、級化構造があり、粗砂以上の粒子を含まず、斜行するラミナも見られないことから、微高地を形成する自然堤防・クレバススプレーなどの本体の堆積ではないようである。微高地裾部から低地の堆積であろう。第7層が盛土される前、調査区にわずかに残されていて第7層（土壌系）とした層が第8層上部に形成された自然土壌で、本来は第8層上部を覆い、第8面遺構埋土にも入っていたと考えられる。

**小结** 第7面検出遺構は、ある程度遺物が出土するものには、ほぼ普遍的に籬状文の破片が見られ、それが無いのは89土坑・95土器群のみである。ある程度時期を限定できる遺物を見ると、65溝の河内Ⅲ-1様式広口壺片と58落込の河内Ⅳ-1～3様式広口壺片があり、下限に限定できない幅があるが、ほぼ弥生時代中期中葉から後葉の遺構面という事ができる。しかし、上限は第7層の遺物の解釈により変る要素がある。

第7層包含遺物の土器は大部分が河内Ⅰ様式の範囲に収まるものであり、さらに限定できるものは河内Ⅰ-1～2様式の時期にまとまる。

しかし、わずかに河内Ⅲ様式の土器がある。それらが、第6-2面検出遺構に見落とした遺構があり、その内部にあったものである可能性を完全には排除できない。もしそうなら、第7面検出の89土坑の遺物が、遺構と同期的な可能性も出てきて、第7面の上限は弥生時代前期まで遡る事になる。

しかし、89土坑の埋土はその面でも新しい時期の遺構のA主体埋土であり、他の遺構を切る。また、第7面の上限が89土坑出土遺物から弥生時代前期まで遡るとすると、そこから65溝の遺物の示す河内Ⅲ-1様式までの間、河内Ⅱ様式に限定できる遺物がこの面にまったく見られない。直上層の第6-2層にも、直下の第7層にも含まれず、完全に時期的な空白が見られる。

それと、第7層最新の遺物が河内Ⅲ様式で、65溝が第7面最古の形成なら盛土の時期と遺構形成開始の時期がほぼ一致する。

やはり第7層盛土の時期は弥生時代中期中葉の初め頃で、その包含遺物は盛土採取の際、弥生時代前期の遺構・包含層を削平して入ったものと考えたほうが妥当であろう。ならば、残念ながら遺構検出ならなかった第8面は河内Ⅰ-1～2様式の遺構面の可能性が高いと言える。

第7面の遺構は弥生時代中期中葉初頭から後葉までの長い期間に累積した事を示すように切り合いが

多い。性格は不明ながら、土坑・ピットの集中は、集落域的な様相と言ってもよいであろう。

その中で、注目できるのは65溝である。75落込が小規模な水路か大溝と考えられる事と、その位置関係から、この溝はそこからの分水路と思われる。調査地点が集落域なら、集落への導水、または排水、そして集落内の区画も兼ねた溝の可能性もある。分流地点が近くにあるという事は、集落の中心地ではなく縁辺部なのであろう。それは既往の調査で田井中遺跡の西側の弥生時代集落が、木の本遺跡との境付近を縁辺としていると考えられる事と合致する。

もう一つ特徴的な事は、65溝を境として、北側には土坑が、南の75落込との間にはピットが集中するという事である。南側は75落込との間の幅1～1.5mほどの細い部分なので、大きな遺構が立地すべくもないが、それでもピットが多数あるほど利用されているという事である。また、切り合いの多い遺構群がこの溝を境に一貫して種別を分けて立地しているという事は、この溝が遺構形成期間の大部分の間存続していた可能性が高い事を示す。

北側の土坑群は、長楕円形に近い形のものが多く、その性格を考えると土墳墓の可能性としてあげられるが、供献されたような遺物もなく、土坑の長軸は大きいものでも1.2mに満たない。ただし、この面検出の遺構は、本来第6面切り込みと考えられるので、元の深さは最低でも15cmは加味できるはずであり、平面規模も大きくなる可能性は高い。

第7層が盛土された理由は、第8層の状況から見れば、第8面は遺構が見られるものの微高地には立地しておらず、その縁辺にあたり、そこに盛土して人為的に微高地の拡大を図ったものと考えられる。第7面に水路らしき溝が見られる事からすれば、微高地同士を結んで水路を延ばすためにされた盛土の可能性もある。

いずれにしても調査地点は弥生時代中期中葉から後葉の、人為的に造成された、集落域もしくは集落の関連地域に属しているとは言えるだろう。

## 第10項 木の本12-1のまとめ

今回の調査では、第1面から第7面まで、計8面の遺構面を調査し、弥生時代前期から中世頃までの時期についての成果を得られた。

**条里制地割** 第1面から第3面において、条里制地割に基づいたものと考えられる。正方位の耕地区画・水路が検出された。遺物が少ないため時期の特定は難しいが、条里制地割が平安時代頃に施行された可能性が高い事、水路が坪境以外の坪内に走り、それが付け替えられた時期があった事などが判明した。中世以降の層・遺構面が良好に遺存している部分があり、それにより条里制地割の実態や変遷が追える事が証明されたのも大きな成果である。

将来的に坪境などが調査されれば、現代に残った条里制地割までの変遷も明らかにでき、遺物が蓄積されれば、条里制地割の施行時期や変遷の画期の時期も特定されよう。

**弥生時代後期から奈良時代** 第4面から第6-2面で検出された落込・溝の時期までに当たる。この部分でも遺物が少なく、時期の特定が難しいが、土地利用の状況を順に見ると以下ようになる。

弥生時代後期から古墳時代前期には第6-2面の落込・溝により耕地の存在が推測できる。そこから第6-1・2層の強い土壌化が進行する空白期があり、古墳時代後期には第5面の落込・溝で耕地の存在が推測でき、その後、同面の土坑群が形成される別の土地利用がある。その後、おそらくは飛鳥時代頃が空白期となり、奈良時代頃には第4層が耕作土として成立する。その時点ではまだ条里制地割は見

られないようである。そして、条里制地割が施行される平安時代頃まで、第4面に木根痕が残されるような空白期がある。

この時期は耕地の進出と廃絶が緩慢に繰り返された時期と言える。耕地が廃絶する理由はおそらく、弥生時代集落の立地していた微高地への給水のしにくさであろう。この微高地が長瀬川の自然堤防と接した大規模な微高地だったとしても、長瀬川に堰を設置して給水するのは、奈良時代頃でも困難な事であろう。網状流路に囲まれた小規模な微高地だとすれば、労働力を投下しても耕地にできる面積自体が少ないという問題がある。

しかし、見方を変えれば、何故弥生時代と同じように集落域として利用しなかったのかという疑問も残る。既往の調査や今回の調査で、田井中遺跡・木の本遺跡で古墳時代初頭・前期、飛鳥時代・奈良時代の遺物がある程度集中している部分もあるので、小規模な集落は存在したようだが、弥生時代前期から中期の集落域とは遺物も遺構も比較にならない程度である。そこになんらかの環境の変化があったと考えざるを得ないだろう。そして平安時代に荘園開発に伴い、広範囲の水利体系が出来るまで、耕地を維持するには困難な状況があったと思われる。

**弥生時代中期** 第6-2面検出の土坑・ピット類と第7面検出遺構の時期に当たる。既往の調査からみれば、弥生時代前期から次第に中心を東に移してきた、田井中遺跡の弥生時代中期の集落の縁辺部と見る事ができよう。それらの遺構の形成は弥生時代中期中葉の初頭頃に第7層を盛土するということから始まった。調査範囲が狭く、盛土の範囲を類推する術もないが、集落域となる微高地を人為的に拡大する行為だとすれば、微高地高所を削平して洪水時の冠水のリスクを高めてでも、平坦な集落域を拡大しようとする、かなり大規模な開発と言える。

しかし、そこまでの労力を投入したわりには、盛土上面に住居・建物などは検出されず、中期の遺物も完形率の悪い破片が多く、集落の中核的な様相とは程遠い。

むしろ、盛土上面に溝が見られ、その溝の水の流れが西から東へと考えられるのが注目できる。これが集落のある微高地に水を引く水路だとすれば、ここより西側に堰を作りやすい小規模流路があった可能性が高い。そして取水地点から微高地をつないで、水路を通すための盛土であった可能性も考えられるのである。集落にも水を供給し、かつ近辺の低地に拓いた水田にも配水できるとすれば、それだけの労力を投下する価値はあるだろう。

**弥生時代前期** 検出できなかったが、遺構が存在した第8面、そして第7層に包含されていた遺物の大部分の時期に当たる。既往の調査で田井中遺跡の西端部分で検出された弥生時代前期集落との関連が考えられるが、その集落は網状流路と思われる何本もの流路が流れる中の、小規模な微高地上に大溝を巡らせて完結しており、この調査地点付近まで広がるものではない。ただ、その集落以外にも遺構は分布しているようなので、今回出土の遺物もそういった遺構に含まれていたものの可能性はある。また、幾つかの近接した小規模な微高地上に複数の集落が併存する形も考えられよう。

ただ、第7層の弥生土器の器種構成は壺が最多であり、また、壺蓋も多めに見られる。通常の集落の器種構成ではないと言える。盛土採取に削平した部分が、集落的でない器種構成の土器が豊富に含まれている所と考えると、弥生時代中期の集落の立地する微高地とは異なる微高地で、弥生時代前期に墓域や祭祀の場として使われていた所を削平したのではないかと推測される。

しかし、第7層に包含されていたサヌカイトは、上層とは異なり、製品が確認できなかった。採取できた数があまり多くないので、偶然とも考えられるが、消費的に製品が混じる様相と比較すれば、よ

り一層石器製作地点的と言えなくもない。そうであるならば盛土採取地点を考える上で上記の内容と相反する要素にもなる。

検出はできなかったが、第8面にも遺構が存在したのは確かであり、それを考えると第7層の盛土の意味が曖昧となる。この調査区付近から東側の当時の微地形を把握できる資料が乏しいため、第8面の遺構が低地にあるものか、微高地上にあるものかの判断は難しい。

しかし第9節「第8層の状況」で先述したとおり、基盤となる第8層は微高地を形成したような層とは思われないので、この調査区の第8面は微高地裾部の低地に位置していた可能性が高い。

おそらくは集落の立地する微高地から耕地の広がる低地に出るような部分であったのだろう。

今後の課題 今回の調査は激しい湧水に悩まされ、特に第8面の検出・調査がかなわなかったのが悔やまれる。調査地点付近は現在、保水力の高い芝生地となっており、それが第8層を滞水層とする地下水位を上げている可能性が考えられる。今後付近で調査を行う際は注意願いたい。

成果を振り返ると。遺構の形成のある各時期の間に、遺構形成が行われない空白期が数多くある事が注目できる。今回は確定できなかったが、調査地点が微高地縁辺にあるなら、その立地のためそのような傾向が強いとも考えられる。特に弥生時代後期から奈良時代は遺物も激減し、耕地の進出が図れながら持続できない低調な時期となっており、遺跡全体にもその傾向がある。

今後はそのような様相の原因となるものを見出す努力も必要となってくるだろう。

また、既往の調査ではあまり成果が出ていない、条里制地割に対する調査も重要であると言える。集落が遠いのか遺物は非常に少ないが、それだけ耕地が広がっているという事は、その調査の重要性も増すという事であろう。

条里制地割の施行時期と変遷の様相、水利体系の復元などが重要な課題となってくるだろう。

## 第2節 田井中12-1の調査成果

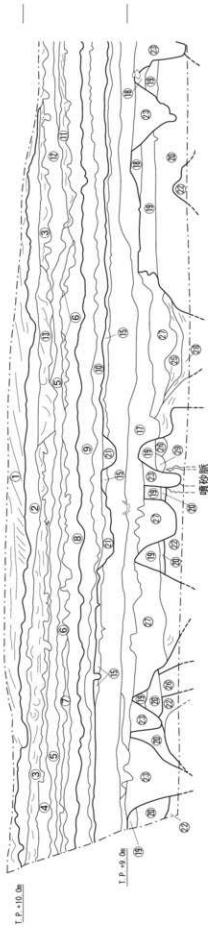
### 第1項 基本層序(図17・18、図版6-7、13-4)

現況の高さ T.P.+11.30m から、現代盛土約60cmの下に厚さ20cmほどの砂質の耕作土層が2層あり、その下に厚さ20cmほどの洪水砂層があった。木の本12-1の状況を踏まえ、上の2層の耕作土層を近世～現代のものと考え、下の洪水砂層直下の耕作土層上面から平面的調査を行う事とし、その面の保護のため、若干の洪水砂層を残し、T.P.+10.30m ほどで機械掘削を終え、調査を開始した。

第0層 第1面保護のため、一部残して機械掘削した洪水砂層である。2.5Y7/1-10YR4/4(灰白色～褐色)粗砂～中砂、ラミナあり、極細砂～小礫あり、Fe・Mnあり。ラミナの様相から、南東から北西に流れる流水で堆積したと思われる。包含遺物は少ないが、瓦器・土師器・須恵器・弥生土器など、陶磁器はない。中世頃の洪水堆積か。

第1-1層 5GY5/1-5Y5/1(オリーブ灰～灰色)砂質土、シルト～細砂主体、粗砂～中砂あり、4～1cmのブロック状構造の間に粗砂あり。構造から、荒起しのような状況で第0層の砂をかぶった耕作土層と思われる。ブロック土自体かなり砂質なのは第1-2層の影響か。包含遺物は少ないが、既に弥生土器・サヌカイト石器類の割合が高い。黒色土器A・B類碗・瓦器碗などの破片も少数ながら見られ、最新の遺物としては魚住産瓦質甕口縁の破片が見られる。14世紀以降の耕作土層か。

第1-2層 5Y6/3-6/1(オリーブ黄～灰色)粗砂～中砂、ラミナあり、Feあり。洪水砂層。ラミ



- ① 2.577/1~10764/4 灰白～褐 粗砂～中砂 ラミナあり 極粗砂～小礫あり Fe・Mnあり 洪水砂第0層
- ② 5075/1～515/1 オリーブ灰～灰 砂質土 シルト～細砂主体 粗砂～中砂あり 4～7cmのブロック状構造の中に粗砂あり 耕作土 第1～1層
- ③ 576/2～6/1 オリーブ灰～灰 粗砂～中砂 ラミナあり Feあり 洪水砂 第1～2層
- ④ 1064/1 暗緑灰 粘質土 シルト主体 中砂～粗砂若干あり 耕作土 第2～1層
- ⑤ 1064/1 暗緑灰 (部分的に575/3灰オリーブ) 粘質土 シルト～細砂主体 粗砂～中砂あり 管状Feあり 耕作土 第2～2層
- ⑥ 10674/1 暗緑灰 (部分的に575/3灰オリーブ) 粘質土 シルト～細砂主体 中砂あり 粗砂若干あり 耕作土 第2～3層
- ⑦ 10665/1 青灰 粘土～極細砂 ラミナあり 洪水堆積層 第2～4層上層
- ⑧ 10665/1 青灰 シルト～粘土 部分的にラミナあり 洪水堆積層 第2～4層下層 質・色は第3層に近い。
- ⑨ 10664/1～515/2 暗緑灰～灰オリーブ 粘質土 シルト～粘土主体 粗砂若干あり 植物根痕あり 耕作土? 第3層
- ⑩ 564/1～515/2 暗緑灰～灰オリーブ 粘質土 シルト～粘土主体 粗砂若干あり 植物根痕あり 耕作土 第4層
- ⑪ 576/3～5/3 オリーブ灰～灰オリーブ 粘質土 シルト～粗砂 Fe若干あり ラミナあり
- ⑫ 4の7～3cmのブロック間に粗砂あり 第2～1層上層 (部分的)
- ⑬ 3に極細砂～小礫・6～2cmの4のブロックあり 遺構土
- ⑭ 3に1位のブロックあり 遺構土
- ⑮ 573/1～N3/オリーブ灰～暗緑灰 粘質土 シルト主体 粗砂若干あり 第5～1層 (第5層上部 粘土階下部分分)
- ⑯ 2.572/1 黒 粘質土 シルト主体 粗砂～粗砂若干あり 耕作土? 第5～2層
- ⑰ 572/1 黒 粘質土 シルト主体 粗砂あり 中砂～小礫若干あり 盛土? 第5～3層
- ⑱ 572/1 黒 粘質土 シルト主体 粗砂～粗砂あり 腐化物若干あり
- ⑲ 10075/1 暗灰 シルト・「1065/4にぶい黄褐色 シルト」の1～2cmの小ブロックわずかにあり 盛土? 第6層?
- ⑲ 573/1 オリーブ灰 粘質土 シルト主体 粗砂あり 腐化物若干あり 「10075/1 暗灰 シルト」
- ⑳ 1065/4にぶい黄褐色 シルト・「1072/1 黒 シルト」の1cm厚の小ブロック多し 盛土? 第6層
- ㉑ 2.5674/1～5/1 暗オリーブ灰 粘質土 シルト～極砂主体 炭化物質あり ⑲のブロック3種3～0.5cmで多し
- ㉒ 2.5676/1 オリーブ灰 細砂～中砂の5～1cmのブロックあり 盛土? 第7層 (図18北西壁断面に続く)

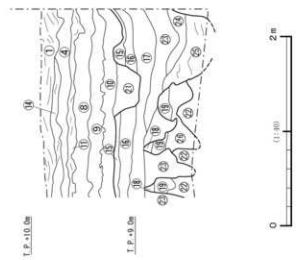
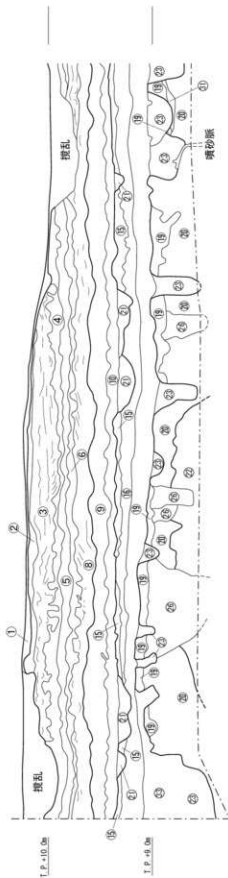


図17 田井中 調査区壁土層断面図 (北東壁) (S=1/40)



- (図17北東壁断面と地層)
- ①M3/4層区～区 粘質土 シルト主体
  - ②S5/5層区～中砂わずかにあり 第5～1面道構理土
  - ③110/2/1層区 シルトの生痕多し 第8層
  - ④「10/2/1層 シルト～細砂」内に22の1～6cmのブロック若干あり 第6面道構理土
  - ⑤⑥⑦⑧⑨に粘土のブロック・炭化物あり 道構理土?
  - ⑩17.5/4/1区 シルト」内に22の5～1cmのブロック・炭化物・粘土あり ラミナあり
  - ⑪110/6/1層区 粘質土 シルト主体 細砂～中砂若干あり」の1～4cmのブロック間に炭化物・「10/2/1層シルト」のブロックあり
  - ⑫第7面道構理土?
  - ⑬⑭⑮の20～5cmのブロック間に「10/2/1層 シルト」
  - ⑯炭化物層 ラミナあり
  - ⑰28と22の境界内に1cm大の粘土のブロック若干あり
  - ⑱⑲と⑳の境界 第5～3面道構理土
  - ㉑1.5/7/1灰白 細砂～中砂 ラミナあり
  - ㉒110/4/1区 シルト」内に第8層、
  - ㉓110/3/1オリープ黒 シルト」・炭化物の1cm前後の小ブロックあり 第7層?
  - ㉔7.5/3/1オリープ黒 粘質土 シルト～細砂主体 中砂～細砂あり 炭化物若干あり

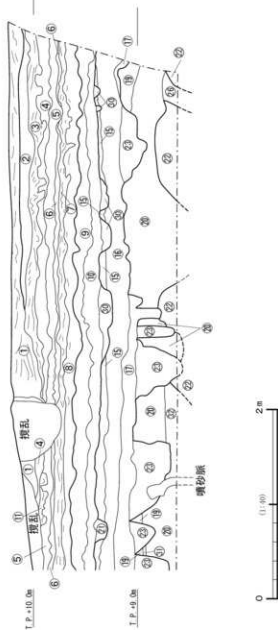


図18 田井中 調査区壁土層断面図 (北西壁) (S=1/40)

ナの様相から流水方向は第0層とほぼ同じか。ほとんど遺物を包含しない。

第2-1層 10G4/1(暗緑色)粘質土、シルト主体、中砂～粗砂若干あり。耕作土層で、部分的に下の第2-2層との間に薄い洪水砂層をはさむ。第2-1～3層の包含遺物は非常に少なく、古墳時代後期の蓋環を含む須恵器2片、土師器小片9片、先端が炭化した付け木2点しかない。

第2-2層 10G4/1(暗緑色)粘質土、シルト～細砂主体、粗砂～中砂あり、管状Feあり。耕作土層で、第2層中、一番砂質である。

第2-3層 10GY4/1(暗緑色)(部分的に5Y5/3灰オリーブ色)粘質土、シルト～細砂主体、中砂あり、粗砂若干あり。耕作土層。

第2-4層 全体的に、見た目は第3層に似るが洪水堆積層である。北西側に分布が限られラミナの目立つ上層と、全体に分布しラミナの目立たない下層に分かれるが、おそらくは一連の洪水の堆積と思われる。

上層:10BG5/1(青灰色)粘土～極細砂、ラミナあり。洪水後半の堆積か。

下層:10BG5/1(青灰色)シルト～粘土、部分的にラミナあり。第3層上部を巻き上げながら堆積した洪水前半の堆積か。

包含遺物は土師器小片5、サヌカイトチップ3のみで、時期は特定できない。

第3層 10BG4/1-5Y5/2(暗青灰～灰オリーブ色)粘質土、シルト～粘土主体、細砂若干あり、植物根痕あり。粒子の淘汰が良く、止水堆積層にも見えるが、上下面の遺構の状況からすれば耕作土層である。遺物はわずかしかなく、それも下の第4面付近の出土なので、第4層包含遺物の可能性が高い。弥生土器裏底部3片、土師器3片(椀1、小皿2(外反口縁1)) 須恵器甕1片、サヌカイト剥片5である。

第4層 5G4/1-5Y5/2(暗緑灰～灰オリーブ色)粘質土、シルト～粘土主体、細砂若干あり、植物根痕あり。耕作土層。この層以下の包含遺物量は急増し、この層では破片の状態でコンテナ5箱分である。その破片がほとんど細片なのが特徴的である。第5層上部を耕作で攪拌し、包含土器も割れたような状況か。遺物は土師器・須恵器・弥生土器・サヌカイト石器類で、弥生土器が多い。最新の遺物は平城宮1期以降の須恵器高台環片で、それからすれば奈良時代以降と言える。今回の調査では最古の条里制地割に伴う耕作土層であると考えられる。

第5-1層 第5層は3層に分けたが、結果的に第5-1層と第5-2層は上面からの土壌化の度合いの違いのようである。それらと第6層は黒色層で、暗色帯を形成する。

5Y3/1-N3/(オリーブ黒～暗灰色)粘質土、シルト主体、細砂若干あり、植物根痕目立ち、その中を青灰色シルトが降下する。第5-2層の上部で、耕作が停止した後、土壌化が進行した部分である。

第5-2層 2.5Y2/1(黒色)粘質土、シルト主体、細砂～粗砂若干あり。第5-1面の遺構の状況からは耕作土層と考えられる。しかし10cm大を越える土器片が多量に混じるといふ包含状況からは、耕作されているとは考えにくいようにも思う。

第5-1・2層包含遺物はコンテナ8箱分、弥生土器が多いが、布留式甕・小型器台・二段口縁小型丸底鉢などの土師器の破片が若干あり、わずかに須恵器もある。最新の遺物としては生駒西麓産胎土の土師器羽釜片、土師器牛角形把手片、丸底放射状暗文1段の土師器環などがあり、古墳時代中期以降の層とは言える。

第5-3層 5Y2/1(黒色)粘質土、シルト主体、細砂あり、中砂～小礫若干あり。非常に土器・サヌカイト石器類などの遺物が多く、破片も大きいので、耕作土層とは考えにくい。包含遺物は層内で粗



密なく、個体がその場で割れたような出土状況もなく、土器が投棄されながら徐々に堆積した層とも考えられない。ブロック状構造は確認できないが、弥生時代の集落域を、その基盤の古土壌と共に削平した土を盛った盛土と推測する。包含遺物はコンテナ7箱分、弥生土器は前期から中期のものが多く、後期のものも若干ある。サヌカイト石器類も多い。わずかに土師器もあり、最新のものとしては布留式鬚片と二段口縁の小型丸底鉢片がある。盛土とすれば、それと上面の遺構出土遺物から、古墳時代前期後半から、古墳時代中期の布留式と初期須恵器の併存期間までの間に盛土がなされたと考えられる。

第6層 5Y3/1(オリーブ黒色)粘質土、細砂あり、炭化物若干あり、下部に「10GY5/1緑灰色シルト(第8層系)」・「10YR5/4にぶい黄褐色シルト」・「10Y2/1黒色シルト」の1cm以下の小ブロック多い。第7層上部に形成された自然土壌層のように見えるが、包含遺物の構成に違いがあり、第7層上に新たな堆積があってから、第7層上部にかけて土壌化したものであろう。

包含遺物はコンテナ5箱分、大量の弥生土器とサヌカイト石器類に少量の石庖丁・被火粘土塊・礫などがある。弥生土器は前期から後期のものまでである。

第7層 2.5GY4/1-5/1(暗オリーブ灰～オリーブ灰色)粘質土、シルト～細砂主体、炭化物あり、第6層の三種のブロックと同じ質のブロック3～0.5cmで多し、「2.5GY6/1オリーブ灰色、細砂～中砂」の5～1cmのブロックあり。調査区の南・東辺付近では第8層が第6層と直に接し、全体的には第8面で調査区南東隅近くに端を発し、北西に抜けていく浅い谷状地形の中に堆積しているように見える。部分的には2層に分かれるが、質的には変化がほとんどない。包含遺物は多量で、非常に破片が大きい。遺物を包含した遺構などを削平した土を盛った盛土と考えられる。下の第8層内から上がってくる噴砂脈が多く見られる。

包含遺物はコンテナ10箱分、大量の弥生土器・石器類と被火粘土塊・礫・鹿の角・下顎骨片などである。土器は弥生時代前期中葉～後葉にまとまる。破片が大きいだけでなく、大型の土器が多いようで、壺類の比率が高い。一般的な集落の土器様相とは異なるようである。

第8層 5B5/1(青灰色)シルト～細砂。上面からの植物根痕など生痕が多く見られる。層下端は確認していないが、上部のみでも下に次第に粒子が粗くなる級化構造が見られ、水成堆積層である。第7層内に続く噴砂脈には中砂が入るので、下部はそこまで粗くなると推測される。層の厚さは最低でも50cm以上はある。無遺物層である。

## 第2項 第1面(図19・図版7-1)

機械掘削の途中から、調査区北寄りに最大径8mほどの不整形円の攪乱が検出され、掘削すると深さは第8層にまで達し、コンクリートのベタ基礎の中心に、人頭台の礫と鉄筋を入れた構造物が残っていた。鉄筋は今では見られない古い仕様のもので、コンクリートに大きめの礫を入れるのは物資が不足した第二次世界大戦中に見られる構造なので、旧陸軍の施設のようなものである。それにより全ての遺構面が調査区面積の1/4強失われている。

第1面は洪水砂に覆われていた事もあり、南から北へ向かう形に形成された3・4浸蝕痕が見られた。浸蝕痕には直接第0層で埋没している。しかし、3個のビットと2本の畦畔が遺存していた。畦畔は南北正方位を指向する。2畦畔がやや傾くように見えるのは、本来太い畦畔で両側を浸蝕されたためと考えられる。面全体が若干の浸蝕を受けていると思われるが、高さはT.P.+10.24～9.98mで、西が高く、東が低い。南北に高低差は見られない。

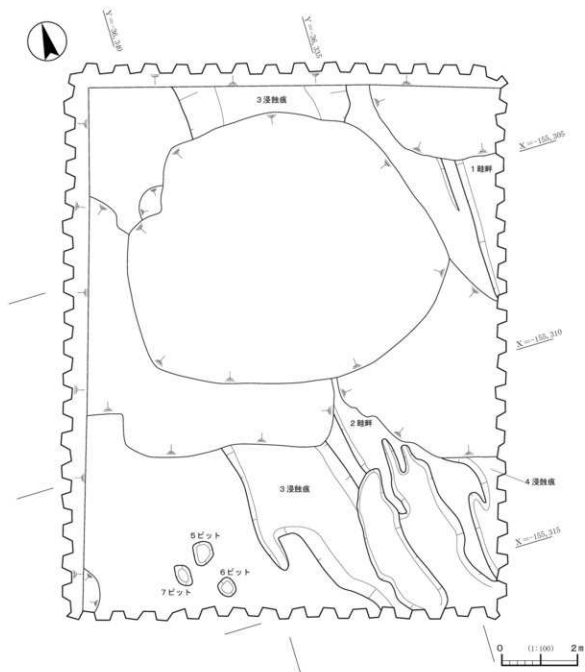


図19 田井中第1面 全体図

**第1層包含遺物** 第1-1層と第1-2層は同時掘削したが出土遺物のほとんどは第1-1層である。第3層以上の層が遺物がほとんどないような中で、例外的に若干の遺物が包含されている。付近の包含層の土砂が耕作土層に加わったものか。

最多は弥生土器で63片〔タタキ甕2、甕口縁1、壺3（V様式長頸壺1、底1、列点文1）〕、土師器53片〔甕10、小皿3、椀6（高台2）、高坏1、小型丸底壺1〕、須恵器36〔甕9、壺6（波状文2、奈良時代1）、蓋坏5（6世紀後半）〕、瓦器椀9（外面ミガキ1）、瓦質甕口縁1（魚住産）、青磁蓮弁碗1、無軸陶器1、サヌカイト剥片1である。第1節で瓦質甕片から14世紀以降としたが、それはこの層を耕作していた期間の一点がそう考えられるという事で、耕作期間の上限も下限も定かではない。

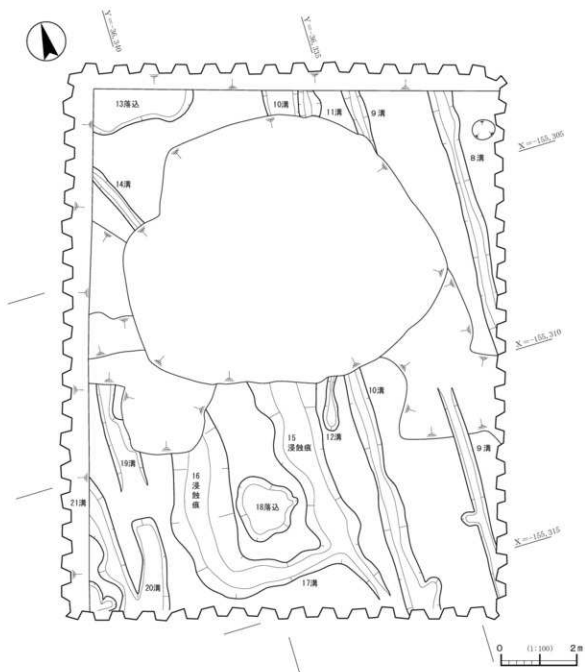


図20 田井中第2面 全体図

### 第3項 第2面 (図20・図版7-2)

この面も洪水砂層である第1-2層の下面なので、若干の浸蝕を受けている。しかし、15・16浸蝕痕は17溝でつながっているように、元々は溝で、それが洪水により肩部に浸蝕を受けたものと考えられる。

落込と溝が見られるが、溝は正方位のものと斜行するものがある。

斜行する14・19~21溝は壁が垂直に立ち、底面に鋤跡が見られ、埋土は第1-2層の砂に第2-1層のブロックである。おそらくは第1-2層堆積後、第1-1層形成前に掘られたものであろう。東大阪市・八尾市の池島・福万寺遺跡で見られる、洪水後に耕作土を復旧するために洪水砂の下から掘り出す、「溝状土坑」に似る。

8～10溝は心々距離がほぼ2.5mで等間隔に並ぶ。浸蝕痕も、本来の溝が15浸蝕痕でその西寄りに、16浸蝕痕で東寄りにあったとすれば、ほぼ同じ間隔で並ぶと見ても問題はない。また、溝間の面は、中央付近がわずかに高く、両側の溝に向かって傾斜する、太めの畝のような形が見られた。このような形は水田ではなさそうで、畑であったと考えられる。東西約12.5mの調査範囲で南北方向畦畔が認められない事から、条里制地割の中での畑なら、二毛作のような時期が変れば水田になるようなものではなく、恒常的な畑の可能性が高い。

二つの落込はどちらも深さ10cmほどだが、埋土は周辺よりやや酸化が強いという違いがあるだけで、性格は不明である。

面の高さは21溝の西側が一番高く、T.P.+10.05mほどで、南北溝間ごとに東に低くなり、8溝の東側が一番低いT.P.+9.85mほど、その溝間の南北方向では北側が高い傾向にある。

第2～1～4層は包含遺物が皆無に近い事は先述したとおりで、時期の特定ができないが、洪水砂土面から切り込む「溝状土坑」の類例が今のところ中世に遡らない事が参考になるかもしれない。

正方位の溝は条里制地割の中の耕地形態と見て良いであろう。畑の存在は耕地の中の微高地を思わせるが、下の第3～5面では畦畔が見られる。第2層は洪水堆積層の第2～4層がやや厚めに堆積した後、洪水により土砂の供給が繰り返され砂質の耕作土の第2～1～3層が累積したと考えられる事から、それらにより、地盤が高まったと共に水はけも良くなり、水田より畑に適した条件が出来たと思われる。

#### 第4項 第3面(図21・図版8-1)

南北正方位の畦畔3本、溝1本と東西正方位の畦畔1本が検出された。洪水堆積層である第2～4層に覆われ、その層がこの第3層を巻き上げているようなので、全体的に若干浸蝕はされていると思われるが、構成粒子から流速の違い洪水であったと考えられるので、明確な浸蝕痕は残されていない。

22・23畦畔と24溝は両側に畦畔を伴う水路である。24溝と23畦畔が南側で途切れるのは、23畦畔の東側の傾斜が緩くなり、途切れた南側では22畦畔東斜面が凹面をなし、その東の平坦面も急に低くなる形態から、洪水時に破壊されたものと思われる。24溝は洪水の影響でなければ、底面はわずかに南側に傾斜する。検出範囲で高さ5cmほどの差である。25畦畔が若干蛇行する理由は不明である。22畦畔と26畦畔は幅1mを越えるが高さは5cm強である。

畦畔に区画された各面の平均的な高さは、26畦畔の北側が一番高く、T.P.+9.63m、その南側がT.P.+9.59m、22・25畦畔間は攪乱の南北でも高さ変わらずT.P.+9.55mなので、26畦畔は25畦畔を東に越えないのであろう。23畦畔の東が一番低く、T.P.+9.51mである。

第3層出土遺物はわずかで、それもほとんどが第4層との境付近で出土している事は上述したが、口縁外反の土師器小皿片のみは、第4層包含遺物と時期が異なる。これは中河内に「て」の字状口縁の小皿が波及する10世紀後葉に出現するものである。1片のみで時期を云々するのは危険だが、この層の耕作期間の一点が10世紀後葉以降であるとは言えるだろう。ならばこの面の状況は平安時代以降のものと言える。実際には中世頃であろうか。

畦畔を伴った水路は条里制地割の坪境の可能性を感じさせるが、周辺に残る条里制地割からすればこの調査区の位置には坪境は存在しないはずである。坪内を南北に走る水路として、木の本12-1の第1～3面に共通するものがある。ただし北西が高く、溝の流水方向が北から南へとなるのが異なる。この調査地点は弥生時代以来の微高地上でやや南へ下る自然地形の上にあるのかもしれない。

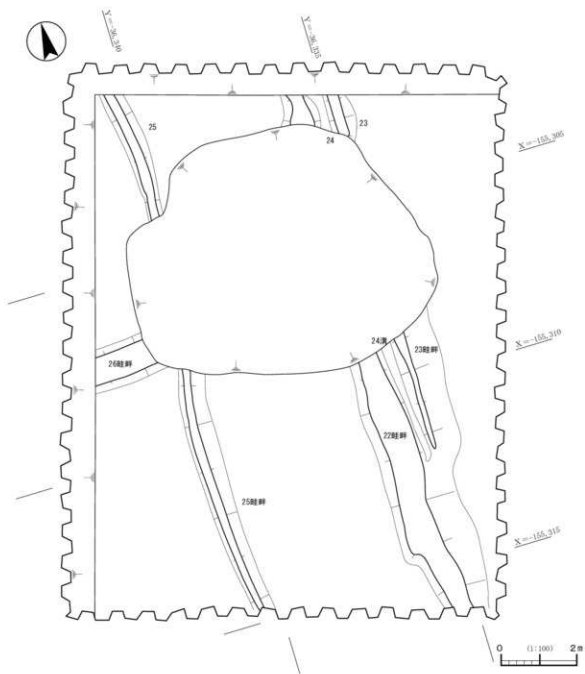


図21 田井中第3面 全体図

第5項 第4面 (図22・図版8-2)

耕作土層としての第3層と接しているせいか、畦畔はわずかししか検出されていない。上層の耕作により削平を受けているものと思われる。その中で正方位を指向しない遺構も見られる。

正方位を指向する遺構としては、29段差・30落込・32溝・33畦畔があげられる。その他、31畦畔の北辺も東西正方位と言って良い。また、30落込の西肩部を北に延長したラインでは、そのラインの西では面に粗砂～小礫が多くあり、鉄分の沈着が強いが、その東では砂粒も鉄分も少ない。これは東から西に落ちる段差が削平された痕跡と思われる。30落込も底部がT.P.+9.22mほどで平坦で、これ自体が耕地区画であろう。29段差の北側もT.P.+9.33mほどで平坦であり、29段差は31畦畔北辺と通じて本来畦畔があった段差であろう。

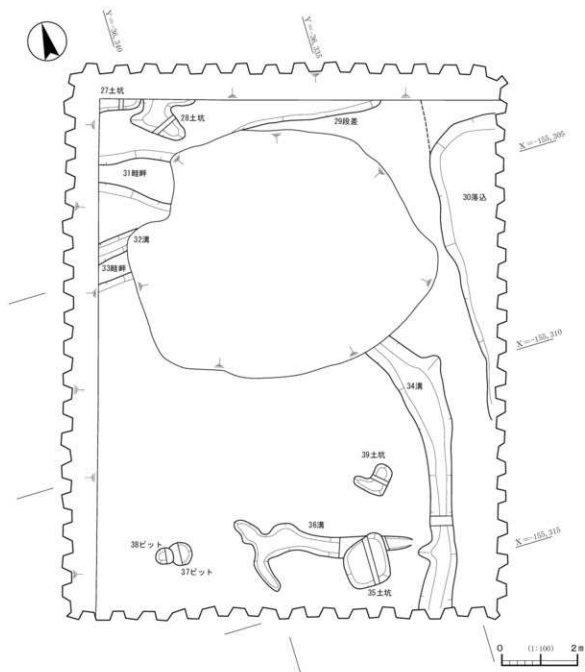


図22 田井中第4面 全体図

しかし、調査区南東側で34溝が攪乱から南東方向に伸び、弧を描いて調査区外南西方向に抜けていく。この溝の東肩部は攪乱を挟んで31畦畔南辺とつながりそうな形を示す。ならば32溝とつながっていた可能性が高い。底部の高さは南に低くなる。36溝も西北西から東南東に伸び、本来は34溝につながっていたようである。つながる部分と、西端で二股に分かれる部分は水口のような印象を受ける。

状況を見ると本来は各溝・落込・段差などに畦畔が付随した耕地区画があったように推測される。また、遺構の見られない面も調査区南西側33畦畔と34溝に画された部分は36溝が西で二股に分かれる位置の東西で、西が平均 T.P.+9.28m、東が平均 T.P.+9.23mと高さが異なる。段差となるラインは第3面で25畦畔があった部分なので、その床面としての段差の可能性が高い。

土坑としたものは4個見られたが、不定形なものも多く、深さも5cmに満たない。ただ35土坑が、

北辺が斜行する以外は隅丸方形に近く、正方位を指向しているのが注目できる。

全体的に見れば、正方位とそうでないものが混在した耕地区画があったと見られるだろう。正方位のものには条里制地割に基づくものと思われる。削平された段差があるように、この面は本来、第3面より高低差のある自然地形が残り、条里制地割だけではそれに対応しきれなかったのではないかと推測される。正方位基調の耕地区画では今回の調査で最古のものであり、条里制地割施行時に形成されたものと考えられる。

**第4層包含遺物** 量が多いので破片の分類・計量はしていない。層内の遺物の密度を見ると、この層はまだ破片の大きさが小さいとは言え、作物の障害にならなかったか疑問が生じる。

最多のものは弥生土器で、底部片で個体数が把握できるものは、甕29、壺19、鉢6、甌1であり、高坏・壺蓋・甕蓋も認められる。器種構成の割合は集落的と言える。文様は沈線文2～5条、櫛描文は直線文・籠状文・扇状文・列点文がある。タタキ裏片が若干見られる。

サヌカイトは105点（チップ21、剥片60、二次加工のある剥片6、石核12、石鏃2・石剣1・尖頭器3）である。

土師器は少ないが庄内式甕・布留式甕・高坏（有稜・椀形）・小型精製三種・直口壺が見られる。

須恵器は蓋坏2（6世紀後半身部1）・高台坏1である。

全体の内容に古墳時代中期から後期前半と飛鳥時代の遺物を欠くと言える。

須恵器高台坏1片をもって、この層が耕作されていた期間は奈良時代以降と考えられる事は第1節で上述したが、第4面に正方位の耕地区画があり、条里制地割の施行時期を考えると奈良時代まで遡る可能性は低いと言える。

以下、同時期的な遺物ではないが、包含されたサヌカイトで特徴的なものについて述べる。

図版24-4は尖頭器である。基部は折れて欠失する。微細な押圧刺離は鋒部にしかなく、最大幅の付近の刃部は左右とも一部刃部形成できずツブシ状になっている。最大厚は10.8mmである。

図版24-5は石鏃である。鋒部を欠失する。ボジ面基部右側の刺離も欠失か。両側の刃部には微細な押圧刺離が多く入る。最大厚6.9mmである。

図版25-1は表裏に原礫面があり、原礫を直接製品に加工したものである。未製品か。上辺の刺離はツブシである。下辺は両面からの刺離で鋭くはなっているが、粗い割りのみで、刃部として完成しているようには見えない。最大厚23.7mmである。

図版25-2はなんらかの未製品である。上下辺ともツブシであるので、可能性としては折れた石剣の把部かもしれないが、明らかに上辺が直線的に、下辺は曲線的に加工している。最大厚11.4mmである。

## 第6項 第5面（図23・図版9-1）

畦畔・溝・段差・ピットが検出されたが、正方位を指向していると言えるものは皆無である。条里制地割施行前の面である可能性が高い。

調査区北西側で向き合う52・53段差は、どちらも二段落ちだが、両方の下段が大きめの溝であった可能性もある。北東隅の40段差は直角に曲がる角に溝が開いていたような形である。

攪乱を挟んでの遺構のつながりが分かりにくい、40段差は52段差と直線的につながりそうで、55畦畔は伸ばせば攪乱南西の区画の東辺に合う。56溝の北側肩部は51段差とつながりそうである。

高い部分には畦畔が見られないが、南東側で45水口が切られている高台は、水口が切られている事

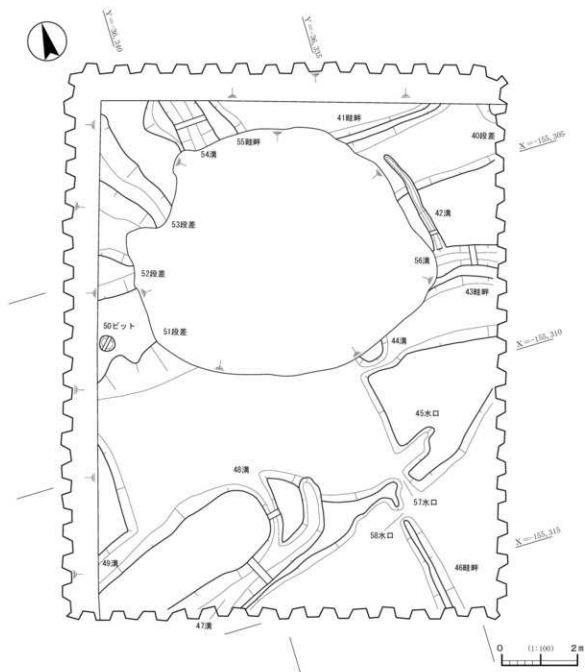


図23 田井中第5面 全体図

を見ても、本来は畦畔を伴う耕地区画であった可能性がある。

復元的に見れば、43畦畔から40段差の間が52段差から51段差の間につながり、里道のような高台になる。そこを東から伸びてきた56溝が攪乱南西側の区画に開口すると同時に、42溝を通じて北側にも給水する。54溝や52・53段差の間の溝は流れの方向が分からないが、里道状の部分の切っ掛け、56溝から分岐し、地形的に高い部分を越えて、北や北西方面に導水しているのかもしれない。攪乱南西側の区画は南側の区画と水口でつながり、47～49溝は、その区画からさらに南西に導水する溝である。

各耕地区画は里道状の部分に沿って長方形を基調として並んでいるようで、いわゆる「等高線形」の小区画水田の可能性が高い。

地形的には北西側が高く T.P.+9.28m ほど、里道状部分より北は42溝が達する区画が低く T.P.+9.12m



ほどである。里道状部分は東がT.P.+9.17m、西がT.P.+9.26m。南では46畦畔西側の区画が一番低くT.P.+9.07mほどで、47・49溝間は高くT.P.+9.23mほどである。

なお、ほとんどの遺構は、埋土にわずかな土器の小片を含むのみで、それも同時期的とは思えないものばかりである。47溝では弥生土器68片、土師器12片が出土しているが、その中の最新の遺物は二段口縁土師器小型丸底鉢片である。

**第5-1・2層包含遺物** 遺物は第4層よりさらに多く、耕作に疑問が出るほどである。

最多は弥生土器で、底部で把握できる個体数は、甕63・壺23・鉢4・甔2で集落的構成である。文様は櫛描の直線文・籠状文・波状文が多く、沈線文はわずか、しかしタタキ甕の破片もある。

土師器は第4層とほとんど同じ構成だが、生駒西麓産羽釜1片・牛角形把手1片・放射状暗文一段丸底環1個体がある。須恵器は蓋環の身部1片のみ。

サヌカイトも多数あり、計量はしていない。様々な種類が揃う。以下に3点を掲げる。

図版25-3は搔器、剥片上部には特に追加の加工はせず、下辺刃部にネガ面からは二段階に剥離を、ポジ面からは押圧剥離を一列入れる。最大厚は上辺で12.8mmである。

図版25-4は二次加工のある剥片、ポジ面の打点は左辺である。その後下辺に両面からツブシを入れ、上辺にも剥離があるが、粗いもので止まる。最大厚33.9mmである。

図版25-5は石錐である。ネガ面のつまみ左辺は剥片の打撃面、右辺には押圧剥離が入る。刃部先端は欠失。最大厚6.7mmである。

**小結** この面は条里制地割施行以前の面で、古墳時代中期以降の時期、そして小区画水田がある。これらは全て整合的である。しかし、時期を限定できる要素は少ない。

おそらくは奈良時代頃でもこのような水田が存在していた可能性はあると思われる。しかし、第5-3面の63ピット・65井戸が古墳時代中期前半と思われ、それらが本来は第5面の古い段階で形成され、耕作時期の途中で放棄された第5-1・2層床面遺構の可能性もある事から、それらも含む古墳時代中期～後期頃の面と考えるのが妥当と思われる。

大量に包含されている弥生土器は時期的に遊離したもののだが、弥生時代中期を中心に集落的な器種構成を見せている事が、これより下層の状況についての資料となるだろう。

なお、第5-1・2層は、耕作が停止した後、第4層が形成されるまで、また土壌化が進行し、自然土壌である第5-1層部分が形成される。つまり第4層まで耕作地として継続するわけではなく、一旦耕作が放棄された時期があったようである。

## 第7項 第5-3面(図24・図版9-2)

盛土・整地層上面の可能性が高い面である。また、耕作土層である第5-1・2層の床面でもある。溝・井戸・土坑・ピット・段差が検出されたが、遺構密度は低い。

北東隅の59溝は、北東壁断面により、40段差が形成される前の第5面遺構である事が判明した。

他に第5面の遺構と関係しそうなものを見ると、60ピットは43畦畔の、63ピット・65井戸は51段差の裾部にあり、64土坑・65井戸の隅丸方形の形は、第5面の攪乱南西側の耕地区画の方位性に近い。62段差はそれ自体が51段差の縮小したような形である。61溝は46畦畔と直交し、畦畔の下に潜る前に途切れる。66溝は49溝の北隣に平行して走る。つまり、上記の遺構は第5面の古い段階の遺構の痕跡としての、第5-1・2層床面遺構である可能性もある。

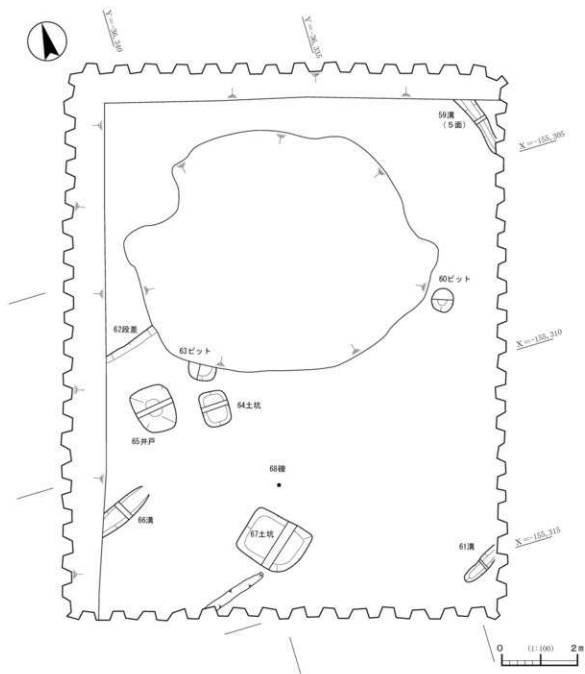


図24 田井中第5-3面 全体図

67土坑は47・48溝が合流する所の下にあり、方位性も異なり、埋土も他の遺構と異なり、やや酸化・明色化したものなので床面遺構ではないだろう。

面の高さはT.P.+9.18~8.93mで、西側は平均9.07m、67土坑より東、59溝周辺から南がやや低く、平均T.P.+8.97mである。

後述する63ピット・65井戸以外の遺構からはめぼしい遺物は出土せず、ほとんどが小片である。64土坑からは弥生土器32片、サヌカイト剥片1、土師器22片(甕15(庄内口縁1)、高坏5、二段口縁小型丸底鉢1)、66溝から弥生土器18片、67土坑から弥生土器113片、サヌカイト剥片1、土師器14片(甕28(庄内口縁2、布留口縁1)、高坏2、鉢4)が全てである。なお68礫は約10cm強の石英片岩礫である。

63ピット（図25・図版10-1）一部が攪乱に切られるが、長径約80cm、短径約72cmの楕円形で、深さ約22cmだが、輪郭を検出する前に、土器1の口縁が既に6cmほど突出して検出された。

土器1はほぼ完形の土師器甕で、ピットの南側で、口縁を北に傾けた形で、ピット底面に接している。その南西に接した破片を土器2としたが、これは刻み目突帯の付いた弥生土器壺口縁から頸部の破片で、接合するものはなかった。他に出土したのは弥生土器32片（甕口縁1、壺3（櫛描直線文2）、サヌカイト5点（剥片3、チップ2）、土師器甕4片（庄内口縁1）である。

埋土は第5-2層とほぼ同質である。

図26-5が上述の土器1で、口縁に欠ける部分があるが、ほぼ完形の土師器甕である。外面はハケ、胴部最大径部付近のヨコハケは、タテハケと切り合い的にも交錯する。その後、口縁2条、肩部2条のヨコナデ、内面はやや磨滅した底部にユビオサエ残り、胴部下半右上がりケズリ、上半はそれを切ってヨコケズリ、口縁部はヨコナデである。外面はほぼ全面煤付着し、幾つか器表のハゼが見られる、底部はやや磨滅、内面は底部と肩部を除く胴部に焦げが付着する。胎土は灰黄2.5Y6/2を呈し、石英あり、長石若干、黒雲母・角閃石わずか、中粒砂以下でも角閃石は多くない。河内低地産胎土。

口縁端部に折り返しや内傾面がなく、肩が張り、底部がやや尖底気味だが、内湾する口縁、肩部のヨコナデは布留式的要素である。小型の甕なので、非布留的要素が一概に古いとは言えない。ただ、肩部のヨコ調整がナデなのは古い要素なので古墳時代前期のものではあるだろう。

ピットはこの土器を埋納したものと考えられるが、磨滅が見られ、外面の煤も焼き付いた、かなり使った土器を完形で埋納するのは珍しいのではないだろうか。また、その使用痕と1個体のみという事を考えると、遺構形成の時期を古墳前期とするのも危ういと思われる。ただ、後述の65井戸が埋められるのよりは早い時期の遺構であろうし、古墳時代前期以降とするには問題ない。第5-3面の時期のおおよその上限を示すものと思われる。

65井戸（図27・図版10-2～4）遺構の輪郭を検出する前から土器2-2の破片が面より8cmほど突出している状態であった。遺構を検出してから土器2-2を検出し始めると次々と土器片が現れ、上半が割れた状態で土器1も検出された。そのため、埋土上端の確認を怠り、断面図での上層①の上端は定かではない。

平面形はやや不整な隅丸方形で、長軸約1.18m、短軸約96cm、深さは約76cmである。遺構壁は途中で一旦緩やかになった後、下部は急角度に落ち込む。

埋土は上下2層に分かれ、遺物の出土状況もそれにより分かれる。上層では土師器甕の土器1が南半で口縁を東に向けて横置状態にあり、その形で上部が割れ、周辺に破片が散らばる。その北側には人頭大の凝灰岩の礫1があり、その下と周辺に布留式甕の大きめの破片が散乱していた。1個体の甕が礫で割られた状態かと思える土器2としたが、取り上げてみると別個体であり、土器2-1・2-2とした。その周辺にも土器の小片が多数あったが、土師器だけでなく、弥生土器もかなり混じっている。土師器では甕・甎の破片以外に小型丸底壺1片、二段口縁小型丸底鉢1片もあった。

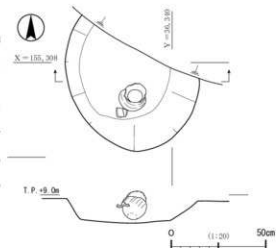


図25 田井中第5-3面63ピット遺物出土状況

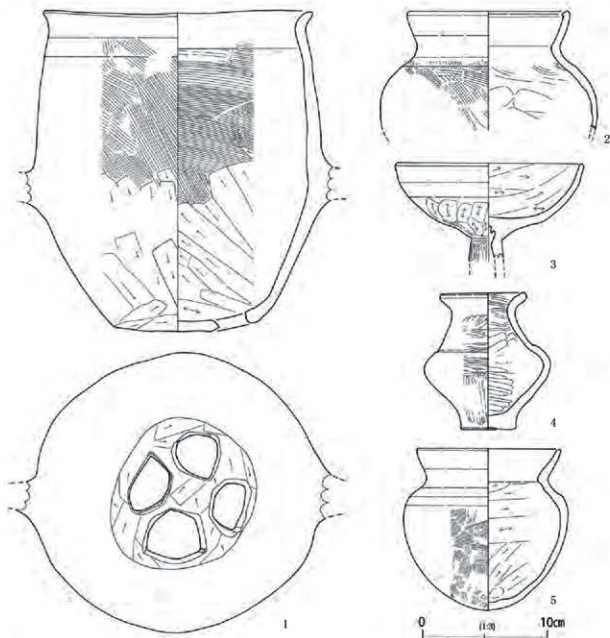


図26 田井中第5-3面 遺構出土遺物 65 井戸（1：土器1、2：土器2-1、3：土器4、4：土器6） 63 ビット（5：土器1）

下層では底部で西側壁に立てかけたように、脚部を欠く土器器高環の土器4があり、その北東側には人頭大の閃緑岩の礫2が立てかけられている。礫の上に乗るように弥生土器小型広口壺の土器6があり、弥生土器蓋片の土器3はかなり上に浮いた状態にある。土器5・7・8は取り上げようとする、半分遺構壁内に入り込んだ状態であった。土器5は弥生ハケ甕口縁片、土器7が弥生ナデ甕口縁片で沈線文3条、土器8は器種不明の弥生土器片である。

その状況から見て、下層の弥生土器は、遺構壁の浸蝕・崩落の進行に伴い、井戸内に入っていった、第5-3層から第7層に包含されていた遺物と考えられる。底部からは土器4以外にも15片ほどの土器片が出土したが全て弥生土器であった。

図26-1は土器1、土器器甕である。接合すると口縁の一部と把手が欠失するのみであった。把手の破片は埋土内に見当たらない。外面はハケを、口縁からのヨコナデ2条と下半部のケズリが切る。下

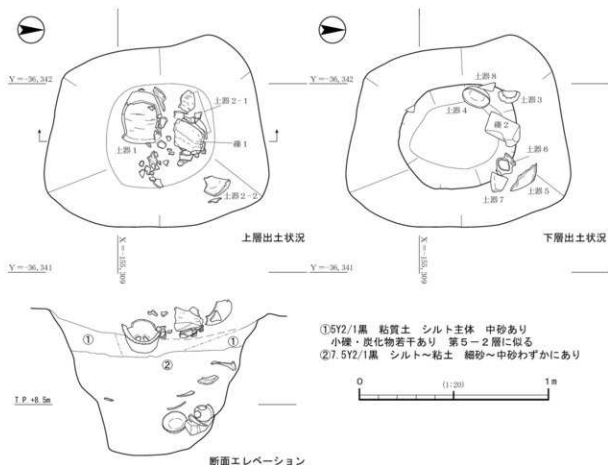


図27 田井中第5-3面 65戸遺物出土状況 (S=1/20)

半部のケズリは底部のケズリに切られる。内面はヨコハケ主体だが切り合いは外面と同じである。底部の孔は不整形な4孔でその輪郭は内外面から面取りされている。胎土は橙5YR6/8を呈し、閃緑岩の小礫が何個が見られ、石英・長石多し、黒雲母・角閃石・チャートわずか、中粒砂以下でも黒雲母・角閃石はわずかである。河内低地産胎土である。

底部の穿孔が中心1孔、周囲3孔に定型化する以前の甌である。定型化しないものが須恵器のTK208段階に共存する例もあるので、5世紀の中葉を含む前半と考えて良い。

図26-2は土器2-1で、土師器布留式甕片である。外面はハケを口縁から3単位目の肩部ヨコナデが消す。内面は頸部付近のヨコナデがハケを消すが、ハケと下部のコビナデとの切りあいは不明である。胎土にはふい黄2.5Y6/3を呈し、石英・長石あり、黒雲母・角閃石・チャート・種別不明の黒色砂粒わずかにあり。中粒砂以下も角閃石は少ない。河内低地産胎土である。

器壁も厚く、内面のケズリも省略されており、初期須恵器と併行する時期の布留式甕と考えると良い。5世紀前半頃のものである。

図26-3は土器4、土師器高環である。外面は体部上半ヨコナデ、下半タテナデ、脚部との接合部分に細いヨコミガキが3条入り、脚部タテナミガキがそれを切る。体部内面は上下二段にヨコナデで、どちらも右上にナデ上げる。脚部内面は、上に一旦絞り込まれた先が、また開き、上面中央に棒状のものを刺して回転させた痕が残る。胎土は橙2.5YR7/8を呈し、石英あり、長石・黒雲母わずか、中粒砂以下も同じで角閃石はない。石英は磨滅し、亜角礫になっている。南河内産か。器表にまったく磨滅がない。椀形高環として上述の2点と時期的齟齬はない。むしろその時期の高環の好例とも言える。

図26-4は土器6、弥生土器小型広口壺である。外面は口縁部がやや磨滅して調整不明だが、ほぼ全面ミガキ、肩部には段、内面は頸部の途中までミガキだが、それ以下はナデ、胴部下半は棒状工具の強いヨコナデが入る。胎土は黒褐2.5Y3/1を呈し、角閃石多し、長石・石英あり・黒雲母わずかにありで、生駒西麓産胎土である。河内1-1~2様式のものである。

破碎していないが、胴部に幅6cmほどの削られたような孔があり、包含層中にある時、井戸の掘削で削られ、残りが後に井戸内部に露出して落ちたのではないかと推測される。

井戸埋土にブロック土はないが、土器4の存在から上下層の遺物は同時期的なので、上下層が人為的に短期間で埋められたと考えられる。上層の土器はやや風化を受けるが、使用による磨滅がまったく見られないのも土器4と共通する。埋め立ての過程は、井戸底に土器4と礫2を立てかけるように置いてから、浅い土坑状になるまで埋め、その上で甕1個体、布留式甕2~3個体を破碎し、礫1を置いてから完全に埋めた形が復元できる。小型丸底壺・鉢は1片のみなのでその場で割れたとは断言できない。

上層土器の一部の破片は後の削平で失われたのであろう。しかし、土器1の出土状況で見られた割れがほぼ埋土内の破片で接合できたのに対し、土器1の把手と土器4の脚部は、埋土内にまったく破片がないため、あらかじめ折り取られていた可能性が高い。

古墳時代中期前半の井戸埋め立て時の祭祀行為を復元できる好例と言える。

**第5-3層包含遺物** この層の遺物も大量で計量はしていない。拳大から人頭大の礫がやや増えてくる傾向がある。最大量の弥生土器・サヌカイトなどは、集落的様相が見えるところなど、ほぼ第5-1・2層の状況と同じである。土師器の数は少ないが、庄内式甕・布留式甕・小型器台・二段口縁小型丸底鉢が見られ、63ピット土器1と同時期的なものがある。この層が盛土層であるなら、盛土された時期はそれらの土師器を上限として、そう下らない時期であろう。

層の形成時期とは遊離したものだが、大量に出土したサヌカイトのうち、代表的な製品5点を以下に取り上げる。

図版25-6は石鎌である。鋒部先端を欠失する。剥片時点でのネガ面が一部残り、そこから見ると横長の剥片から作られている。最大厚3.8mmである。

図版26-1は尖頭器である。基部には原礫面が残り、微細な押圧剥離は鋒部にわずかにあるのみである。最大厚13.2mmである。

図版26-2は石剣未製品か。ネガ面に剥片時点の剥離面が残り、それから見れば上辺方向が打点の剥片から作られている。その左辺は折れで、ポジ面からの垂直の衝撃で折れている。下辺の一部にツブシ状の剥離が見られるので、石剣でも把部か。最大厚13.7mmである。

図版26-3は搔器である。左右辺に原礫面が残り、上辺は剥離面、ネガ面は上辺からの打撃だが、ポジ面は上辺と右辺の角が打点である。下辺に両面からの押圧剥離で刃部を形成するが、ポジ面からの剥離が多い。最大厚は12.1mmである。

図版27-1は石鎌である。ポジ面左辺鋒部側は折れ状の剥離をそのまま刃部になっている。かなり小型の石鎌である。最大厚は鋒部寄り5.5mmである。

**小結** この面は、遺構は少なかったが、その遺構と同時期的な遺物が残りの良い状態で出土し、時期を確定できる成果があった。しかし、その時期は第5-1・2層下面遺構として、むしろその耕作土層の耕作期間を示す可能性もある。また、63ピット土器1によって、遺構面の時期の上限をどこまで遡らせる事ができるかは不明確である。また、65井戸は、水利体系が把握できる第5面の耕地区画に伴う

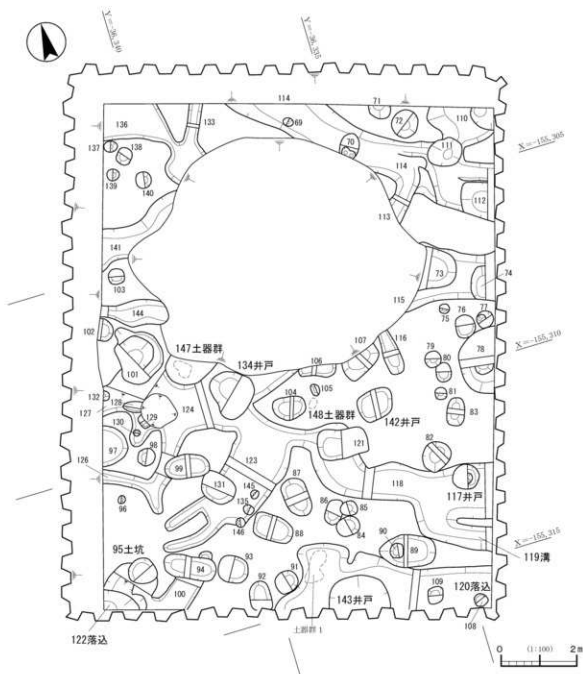


図28 田井中第6面 全体図

ものとするのはやや不自然であろうし、遺構密度が低くても居住に伴う遺構の可能性も捨てがたい。やはりこの面検出の遺構は第5面の状況よりはやや古い、古墳時代中期頃のものと思われる。

#### 第8項 第6面(図28・図版10-5・11-1)

井戸・土坑・ピット・溝・落込が検出された。遺構密度は高く、遺構同士の切り合いも多い。遺構面ちよほどの高さでは遺構の輪郭が不明確なものも多く、精査で何度か遺構面を削ってようやく検出できた遺構も多い。おそらく遺構形成後も一定期間この面で土壌化が進行したのであろう。

他遺構埋土を切り込む遺構は特に検出しにくく、そのため、落込や溝の底面で検出した遺構も、遺物の出土状況から本来はそれらの埋土上面から切り込んでいたと思われるものもいくつかあった。よって

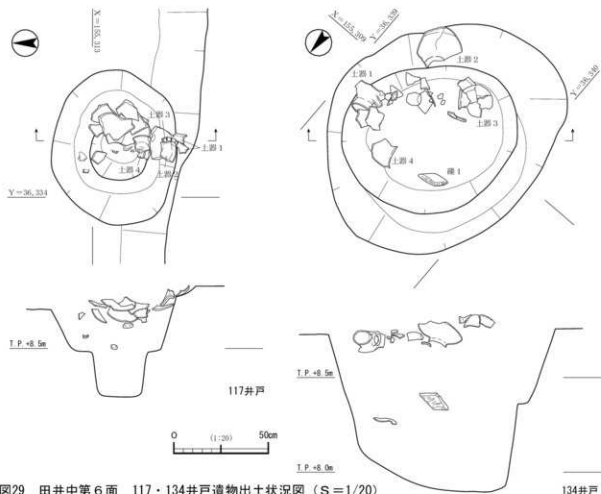


図29 田井中第6面 117・134井戸遺物出土状況図 (S=1/20)

図28で、他遺構の埋土を台状に残した上に切り込んだ表現にした遺構以外は切り合いが不確かである。それを踏まえると、土坑・ピット類は溝・落込埋没後に大部分が形成されているように推測される。

遺構の埋土は、以下の4種類の土と炭化物の組み合わせにより類型化できる。

A: 7.5Y2/1黒 粘質土 シルト～細砂主体 中砂若干あり 粗砂～小礫わずかにあり 第5層に似る。埋土の主体となるものが多い。

B: N2/0黒 粘質土 シルト～粘土主体 中砂若干あり 黒泥土的。埋土の主体になるものが多い。

C: 10G6/1緑灰 粘質土 シルト主体 中砂～粗砂若干あり 第8層に似る。主にブロック土として見られる。

D: 7.5YR6/2～6/6灰褐～橙 粘質土 シルト主体 中砂～粗砂若干あり 焼土。ブロック土として見られる。今回の調査では遺構壁・底面自体が赤化したものはなかった。

この面の遺構埋土に関しては表記に以上のA～Dを使用する。

117井戸(図29・図版11-3) 調査区南東部で、118溝の肩部から底部で検出されたが、出土土器片の幾つかは溝底部より高い位置にあるので、本来はこの井戸が溝埋土を切っていたと思われる。平面形は径66～82cmほどの不整形円で、二段落ち状になり、下部は径28cmほどの円形である。埋土はAにわずかに炭化物の入る単層であった。深さ約58cmほどだが、底部には湧水が見られた。

遺物は下部に散在する小さめの土器片と、検出面付近に集中する大きめの土器片に分かれる。土器1～4は後者である。



土器1は弥生土器鉢3片である。口縁部が外反し、端部に拡張する面を持つ。その端面と胴部に籬状文が見られた。残存率は10%以下である。河内Ⅲ-1～Ⅳ-1様式のものである。

土器2は弥生土器壺頸部片で、長頸広口壺か。櫛描直線文が見られる。

土器3は土器2と同一個体の可能性が高い弥生土器壺肩部片で、櫛描の直線文・波状文が見られる。

土器4は弥生土器裏蓋片である。残存率は50%ほどである。

その他の出土遺物は、弥生土器24片〔裏5（ミガキ3、口縁2）、壺8（底1、籬状文1、櫛描直線文3、沈線文2条1）〕、砂岩礫2点、サヌカイト4点（剥片1、チップ2、石核1）である。

主な遺物は弥生時代中期中葉にまとまるが、完形率は低く、第6・7層の土器包含状況から見れば、それらの層から入った可能性も否定できない。しかし、上部に集中する土器片は井戸埋め戻しの際に投棄されたような状況を示す。

134井戸（図29・図版11-5） 捜乱の南西側に接し、124落込底面で検出されたが、高い位置の出土遺物は、124落込埋土上面近くまであり、これも本来は124落込埋土を切って掘られたものの可能性が強い。平面形は長軸1.38m、短軸1.12mほどの不整楕円形だが、途中で北西側に段が付く。深さ約88cmで、埋土は単層で「B内7～5cmのCのブロックわずか」である。

遺物は埋土上面近くに集中するものと、埋土中ほどに散在するものに大別できる。前者を上層遺物とし、土器1～3が含まれる。後者を下層遺物とし、土器4・礫1が含まれる。

土器1（図30-9）は弥生土器水差し形土器片である。口縁から肩部までと把手が残る。口縁端部は把手側に挟りが入る。外面口縁側面は4条の凹線文が巡り、最上の凹線は挟りに合わせて曲がる。内面は、頸部タテナデを口縁ヨコナデと肩部ヨコハケが切り、ヨコハケはややヨコナデに消される。本体肩部に孔を開け、把手先端を差し込んだ後、内面でナデ付けた痕が残る。胎土は褐灰10YR4/1を呈し、砂粒は石英・長石・チャートをわずかに含むのみで、産地不明である。河内地域の編年で見れば、口縁が水平で凹線文が巡るのは、河内Ⅳ-1～2様式に限定されるだろう。

土器2は弥生土器壺片で、残存率20%ほどである。吉備地方菰池式など瀬戸内地域の影響を受けた、「胴部中半のふくらんだ長胴の広口短頸壺」と思われる。器壁がひどく荒れ、調整不明で口縁端部も遺存しない。胎土には石英・長石が多く、チャート若干あり、角閃石・黒雲母はなく、摂津産のような感じである。河内Ⅳ-2～3に搬入の多いものか。

土器3は取り上げると弥生土器ミガキ裏と壺胴部の破片が混在しており、裏を土器3-1、壺を土器3-2とした。どちらも生駒西麓産胎土で残存率も20%ほどである。裏は内面の一部にコゲ付着する。土器4は弥生土器ハケ裏の単独の破片で、河内低地産胎土、外面に煤付着する。

礫1は凝灰岩の板状のものである。

上層遺物は他に弥生土器41片〔裏24（ハケ2、ミガキ18、口縁4）、壺17（底部1、沈線文3条1、櫛描直線文3）〕、サヌカイト3点（チップ・剥片・二次加工のある剥片）

下層遺物は他に弥生土器41片〔ミガキ裏34、壺6（底部2、沈線文2条以上2）、中実脚部台付き鉢1〕、サヌカイト4点（剥片1・二次加工のある剥片2・石核1）である。台付き鉢片は河内低地産胎土で、外面ミガキ、体部内面ハケである。

図版27-3は下層遺物の二次加工のある剥片である。ボジ面左辺と下辺に二次加工があり、下辺は原礫面側からも加工し刃部を形成する。最大厚20.2mmである。

図版27-4も二次加工のある剥片である。ボジ面下辺に刃部形成、ネ方面からも若干押圧剥離を加

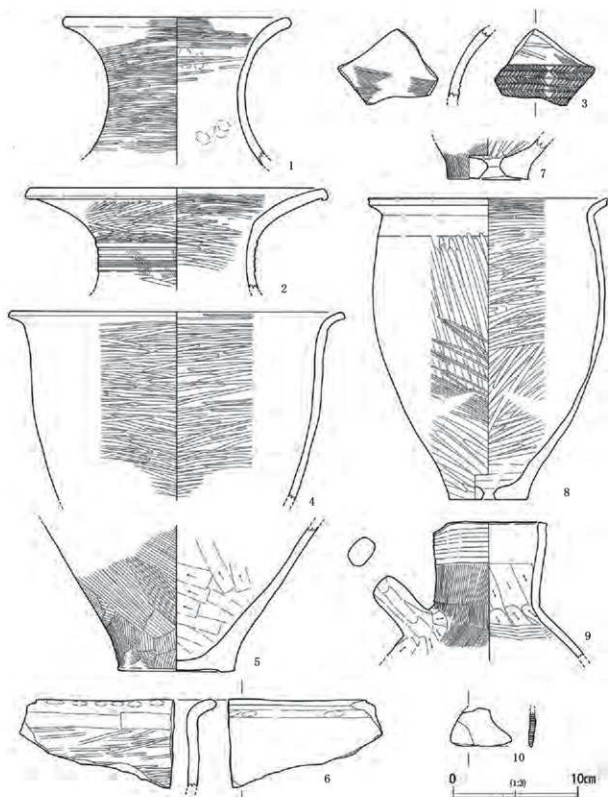


図30 田井中第6面 遺構出土遺物（その1）（1・7：93土坑、6：147土器群、3：92ピット、4：89土坑、5：123落込、8：73土坑、9：134井戸、10：136落込）

える。最大厚16.3mmである。

土器の残存率は悪く、土器1なども埋土内に接合する破片はほとんどなかった。使用痕や磨滅のある土器が見られる事から、上層遺物は井戸を土坑状にまで埋めてから廃棄土坑に転用した可能性も考えられる。時期的には河内Ⅳ様式の時期にまとまるものが多く、他の遺構や包含層に比べて生駒西麓産胎土

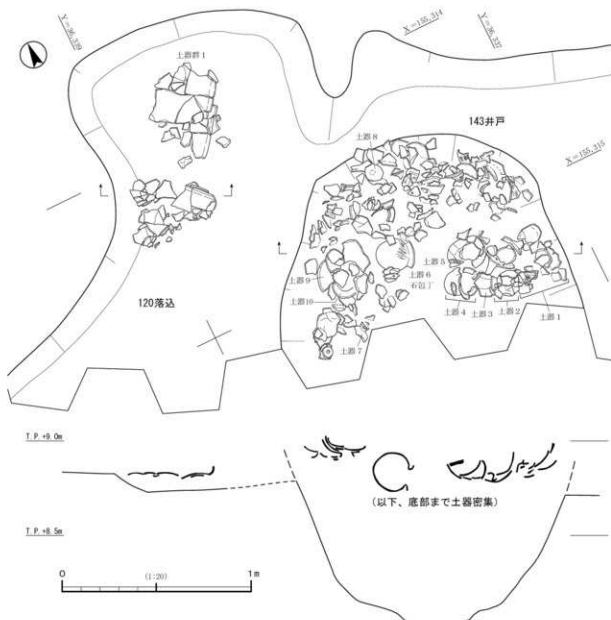


図31 田井中第6面 120落ち・143井戸遺物出土状況図 (S=1/20)

の土器片の割合が高い。

**143井戸** 長辺1.9m、短辺1.6mほどの隅丸長方形の平面形を持ち、下部は中央で径1.2mほどの円形になる。深さ約77cmである。埋土は「B内に10～5cmのCのブロックわずか」である。出土遺物は少なく、弥生土器13片(甕底1、壺3(広口口縁1、櫛描直線文2))のみである。

この面の井戸は浅いが、それでも他の土坑が深いものでも深さ50cmを越えないのと比較すれば差があり、実際掘削すると現在でも若干湧水が見られたので、それで判断した。4基の井戸以外、122落ちも井戸の可能性が高い。

**143井戸**(図31・図版12-1～4) 調査区南西壁沿いには120落ちが広がっていたが、その埋土上面で既に土器片が集中して見えていた部分があった。その時点では遺構の輪郭はまったく確認できなかった。落ち埋土を除去すると土器片が円形に密集しており、落ち底部でようやく遺構の輪郭が確認できたが、その状況から、本来は落ち埋土を切っていたのは間違いない。

遺構の半分ほどは調査区外だが、径1.6mほどの不整形円形の平面形を持つ。深さは120落ち底面から

表1 田井中12-1第6面143戸戸観観察表

裏1		図32-3(土器6)		
法量 (cm)		口縁部	胴部	底部
口径	14.5	形態	調整	尖底
頸部内径	9.8	直線的、端部つまみ上げ	外:	
口径高さ	2.2		左下がりタタキ→上半左傾ハケ	煤・コゲ
器高	18.1	調整	→下半タテハケ	外:下半
胴部最大径	17.6	外:ヨコナデ	内:	内:胴部
底部径		内:ヨコハケ	左上がりケズリ	底部
色調	外:2.5Y6/2灰黄 内:2.5Y6/1黄灰 断:2.5Y6/1黄灰			
胎土	大:2~1mmの石英・長石・黒雲母わずか 小:角閃石・黒雲母・石英・長石			
裏2		図32-2(土器2)		
法量 (cm)		口縁部	胴部	底部
口径	14.9	形態	調整	不明瞭な
頸部内径	9.4	外反、端部つまみ上げ	外:ほぼ水平わずかに左上がり	小平底
口径高さ	1.8		タタキ→上半左傾ハケ→	煤・コゲ
器高	15.5	調整	下半タテハケ	外:下3/4
胴部最大径	16.3	外:ヨコナデ	内:下半左上がりケズリ→	内:底部
底部径	1.7	内:ヨコハケ→ヨコナデ	上半ヨコケズリ	
色調	外:2.5Y6/1黄灰 内:2.5Y6/2灰黄 断:2.5Y7/1灰白			
胎土	大:長石・角閃石わずか 小:角閃石・長石・石英・黒雲母			
裏3		図32-1(土器4)		
法量 (cm)		口縁部	胴部	底部
口径	15.4復元	形態	調整	尖底
頸部内径	10.2復元	外反、端部つまみ上げ	外:	
口径高さ	2.2		左下がりタタキ→上半左傾ハケ	煤・コゲ
器高	14.6	調整	→下半タテハケ	外:下3/4
胴部最大径	14.6	外:ヨコナデ	内:	口縁部
底部径		内:ヨコハケ→ヨコナデ	右上がりケズリ→下半ナデ	内:なし
色調	外:2.5Y5/2暗黄灰 内:2.5Y5/1黄灰 断:2.5Y6/1黄灰			
胎土	大:4~1mm石英あり、1mm前後黒雲母・長石わずか 小:角閃石・黒雲母・長石・石英			
裏4		図32-4		
法量 (cm)		口縁部	胴部	底部
口径	14.1	形態	調整	
頸部内径	10.5	直線的、端部緩くつまみ上げ	外:	
口径高さ	1.9		右下がりタタキ→	煤・コゲ
残存高	9.9	調整	頸部下ヨコナデ	外:頸部
胴部最大径	16.9	外:ヨコナデ	内:右上がりケズリ→	以外
底部径		内:ヨコハケ→ヨコナデ	胴部左上がりナデ	内:なし
色調	外:10YR4/1褐灰 内:10YR5/1褐灰 断:2.5Y6/1黄灰			
胎土	大:1mm弱の角閃石・長石わずか 小:角閃石・黒雲母・石英・長石			
裏5		図32-7		
法量 (cm)		口縁部	胴部	底部
口径	17.2	形態	調整	
頸部内径	11.6	外反、端部つまみ上げ	外:	
口径高さ	2.1		左下がりタタキ→左傾ハケ	煤・コゲ
残存高	8.1	調整	内:上半左上がりケズリ→	外:下3/2
胴部最大径		外:ヨコナデ	頸部下右へヨコケズリ	内:なし
底部径		内:ヨコナデ		
色調	外:10YR7/1~7/2灰白~にぶい黄橙 内:2.5Y6/1~5/1黄灰 断:10YR7/1灰白			
胎土	大:3~1mm石英若干、1mm弱長石・黒雲母・赤色粒わずか 小:角閃石・石英・長石			

注「胎土」欄は胎土内の砂粒・土粒を記載。0.5mmを境に大小にわける。

「・」で列挙する砂粒は左から多い順である。

囊6				
法量 (cm)	口縁部		胸部	底部
口径	14.8復元	形態	調整	
頸部内径	10.9復元	外反、端部つまみ上げ (高い)	外:	
口頸高さ	2.6		左下がりタタキ→?	煤・コゲ
残存高	3.6	調整		外: なし
胸部最大径		外: ヨコナデ	内:	内: なし
底部径		内: 左上がりハケ→ヨコナデ	頸部下ヨコケズリ	
色調	外: 10YR5/1褐灰 内: 2.5Y5/1黄灰 断: 2.5Y6/1黄灰			
胎土	大: 5~1mmの石英・1mm弱の黒雲母・長石わずか 小: 角閃石・黒雲母・長石・石英			
囊7				
図32-10				
法量 (cm)	口縁部		胸部	底部
口径	16.6	形態	調整	
頸部内径	12	外反、端部つまみ上げ (高い)	外:	
口頸高さ	2.7		左下がりタタキ→下2/3	煤・コゲ
残存高	23.5	調整	右下がりハケ→下半ナデ	外: 胴部
胸部最大径	22.7	外: ヨコナデ	内: 下半左上がりケズリ→	内: 下1/4
底部径		内: ヨコナデ	上半ヨコケズリ	
色調	外: 10YR5/2灰黄褐 内: 10YR5/1褐灰 断: 10YR6/1褐灰			
胎土	大: 3~1mm角閃石あり、1mm弱長石わずか 小: 角閃石・黒雲母・長石・石英			
囊8				
法量 (cm)	口縁部		胸部	底部
口径	15.4	形態	調整	
頸部内径	10.5	外反、端部つまみ上げ (高い)	外:	
口頸高さ	2.1		左下がりタタキ→頸部下	煤・コゲ
残存高	6.8	調整	ヨコナデ、肩部ハケなし	外: 口縁
胸部最大径		外: ヨコナデ	内:	部分的
底部径		内: ヨコナデ	右上がりケズリ	内:
色調	外: 10YR5/3にぶい黄褐 内: 10YR6/2灰黄褐 断: 10YR7/1灰白			
胎土	大: 2~1mm石英あり、1mm角閃石・黒雲母わずか 小: 角閃石・石英・長石・黒雲母			
囊9				
法量 (cm)	口縁部		胸部	底部
口径	16.2	形態	調整	
頸部内径	11.1	直線的、端部つまみ上げ	外:	
口頸高さ	2.5			煤・コゲ
残存高	2.8	調整		外: 部分
胸部最大径		外: ヨコナデ	内:	内: なし
底部径		内: ヨコハケ		
色調	外: 10YR7/1灰白 内: 同左 断: 2.5Y7/1灰白			
胎土	大: 1mm弱の角閃石・石英・黒雲母・長石わずか 小: 角閃石・石英・長石・黒雲母			
囊10				
図32-8				
法量 (cm)	口縁部		胸部	底部
口径	16.4復元	形態	調整	
頸部内径	12.1復元	直線的、端部つまみ上げ	外:	
口頸高さ	2.1		左下がりタタキ (少し太め) →	煤・コゲ
残存高	14.1	調整	肩部下から左傾ハケ (まばら)	外: 全面
胸部最大径	21	外: ヨコナデ	内:	内: なし
底部径		内: ヨコナデ	右上がりケズリ	内: 下1/2
色調	外: 10YR4/2灰黄褐 内: 同左 断: 2.5Y5/1黄灰			
胎土	大: 5~3mm閃緑岩・1mm弱角閃石・黒雲母わずか 小: 角閃石・長石・石英・黒雲母			

囊 11				
法量 (cm)	口縁部		胴部	底部
口径	16.3	形態	調整	
頸部内径	10.8	直線的、つまみ上げ	外:	
口頸高さ	2.3		左下がりタタキ→左傾ハケ	煤・コゲ
残存高	5.8	調整	下部不明	外:部分
胴部最大径		外:ヨコナデ	内:	内:なし
底部径		内:ヨコハケ→ヨコナデ	肩部ヨコケズリ (右へ)	
色調	外:10YR6/1~6/2 褐灰~灰黄褐 内:10YR6/1 褐灰 断:同左			
胎土	大:5~1mm角閃石・2~1mm石英・1mm弱長石わずか、小:角閃石・黒雲母・長石・石英			
囊 12				
図 32-9				
法量 (cm)	口縁部		胴部	底部
口径	18.9	形態	調整	
頸部内径	13.7	直線的、つまみ上げ	外:	
口頸高さ	2.3		左下がりタタキ (下部不明)	煤・コゲ
残存高	5.1	調整	内:	外:部分
胴部最大径		外:ヨコナデ	内:	内:なし
底部径		内:ヨコハケ→ヨコナデ	肩部ヨコケズリ (左へ)	
色調	外:10YR6/2 灰黄褐 内:2.5Y6/1~5/1 黄灰 断:10YR7/1 灰白			
胎土	大:2~1mmの石英・長石・角閃石若干 小:角閃石・黒雲母・長石・石英・赤色粒			
囊 13				
図 32-6				
法量 (cm)	口縁部		胴部	底部
口径	16.5	形態	調整	
頸部内径	11.1	直線的、つまみ上げ (高く外反)	外:	
口頸高さ	2.6		左下がりタタキ→左傾ハケ散在	煤・コゲ
残存高	7.9	調整	(下部不明)	外:なし
胴部最大径		外:ヨコナデ	内:	内:なし
底部径		内:ヨコハケ→ヨコナデ	右上がりケズリ	
色調	外:10YR6/1 褐灰 内:同左 断:10YR7/1 灰白			
胎土	大:5~2mm閃緑岩・1mm弱の石英・角閃石わずか 小:角閃石・黒雲母・長石・石英			
囊 14				
法量 (cm)	口縁部		胴部	底部
口径	17	形態	調整	
頸部内径	12.4	直線的、端部つまみ上げ (高く)	外:	
口頸高さ	2.4		左上がりタタキ→左傾ハケ	煤・コゲ
残存高	4.9	調整	内:	外:口縁
胴部最大径		外:ヨコナデ	内:	部分的
底部径		内:ヨコハケ→ヨコナデ	右下がりケズリ	内:なし
色調	外:10YR5/2 灰黄褐 内:10YR4/1 褐灰 断:10YR6/1 褐灰			
胎土	大:1mm弱の石英・角閃石わずか 小:角閃石・黒雲母・石英・長石			
囊 15				
法量 (cm)	口縁部		胴部	底部
口径	15.9	形態	調整	
頸部内径	11	外反、端部つまみ上げ	外:	
口頸高さ	2.3		左下がりタタキ→左傾ハケ	煤・コゲ
残存高	5.1	調整	内:	外:口縁
胴部最大径		外:ヨコナデ	内:	内:肩部
底部径		内:ヨコナデ (右上にナデ上げ)	右下がりケズリ	部分的
色調	外:10YR5/1 褐灰 内:10YR6/1 褐灰 断:10YR7/1 灰白			
胎土	大:4~1mmの長石若干、1mm弱の角閃石・石英若干 小:角閃石・黒雲母・長石・石英			

表 16	図 32-5 (土器 1)		
法量 (cm)	口縁部	胸部	底部
口径	14.4 復元 形態	調整	
頸部内径	9.6 復元 やや内湾、端部つまみ上げ	外：左下がりタタキ→	
口頸高さ	2.2	胸部下 3/4 から左傾ハケ→	榎・コゲ
残存高	7.8 調整	下半タテハケ	外：なし
胸部最大径	19.7 復元 外：ヨコナデ	内：下半左上がりケズリ→	内：なし
底部径	内：ヨコナデ	上半右上がりケズリ	
色調	外：2.5Y6/1 黄灰 内：同左 断：同左		
胎土	大：3～1mmの長石わずか 小：角閃石・黒雲母・長石・石英		
表 17	図 32-5 (土器 1)		
法量 (cm)	口縁部	胸部	底部
口径	13.3 形態	調整	
頸部内径	8.8 外反、端部つまみ上げ	外：	
口頸高さ	1.8	左下がりタタキ？	榎・コゲ
残存高	2.5 調整		外：口縁
胸部最大径	外：ヨコナデ	内：	内：なし
底部径	内：ヨコナデ	右上がりケズリ？	
色調	外：10YR5/2 灰黄褐 内：7.5YR7/1 明褐灰 断：10YR7/1 灰白		
胎土	大：2～1mm長石若干、1mm弱角閃石・石英わずか 小：角閃石・長石・石英・黒雲母		
表 18	図 33-2 V様式系		
法量 (cm)	口縁部	胸部	底部
口径	16.5 形態	調整	
頸部内径	10.9 外反、端部丸い	外：	
口頸高さ	1.8	左下がり太いたタタキ	榎・コゲ
残存高	11.9 調整		外：下半
胸部最大径	20.7 復元 外：タタキ→曲げ→ヨコナデ	内：下半左上がりケズリ？→	内：下半
底部径	内：ヨコハケ→ヨコナデ	上半左上がりナデ	
色調	外：10YR4/1 褐灰 内：10YR6/2 灰黄褐 断：5Y5/1 灰		
胎土	大：1mm弱の角閃石・黒雲母・長石わずか 小：角閃石・石英・長石・黒雲母		
表 19	V様式系		
法量 (cm)	口縁部	胸部	底部
口径	14.9 復元 形態	調整	
頸部内径	10.2 復元 少し外反、狭い端面 (内傾)	外：	
口頸高さ	1.9	太いたタタキ、肩部やや左下がり	榎・コゲ
残存高	8.1 調整	胸部水平	外：部分
胸部最大径	16.4 復元 外：タタキ→曲げ→ヨコナデ	内：頸部下左下がりハケ→	内：なし
底部径	内：ヨコナデ	胸部タテハケ	
色調	外：10YR6/1 褐灰 内：2.5Y6/1 黄灰 断：10YR7/1 灰白		
胎土	大：1mm前後の長石・角閃石わずか 小：角閃石 (少ない)・黒雲母・石英・長石		
表 20	図 33-6 (土器 5) V様式系		
法量 (cm)	口縁部	胸部	底部
口径	18.4 形態	調整	丸底
頸部内径	13.3 外反、内傾端面	外：上半水平太いたタタキ→下半	
口頸高さ	3.1	タテナデ	榎・コゲ
器高	21.7 調整		外：肩・底
胸部最大径	21.7 外：ヨコナデ	内：右上がりケズリ→	以外
底部径	内：ヨコナデ	頸部ヨコケズリ (右へ)	内：下 1/3
色調	外：2.5Y7/1 灰白 内：5Y6/1 灰 断：10YR6/1 褐灰		
胎土	大：3～1mm長石・1mm前後角閃石・石英・黒雲母あり 小：角閃石・長石・黒雲母・石英		

裏21	図3-7 V様式系		
法量 (cm)	口縁部	胴部	底部
口径	18.2 復元 形態	調整	
頸部内径	12.4 復元 やや外反、端面やや外傾	外:	
口頸高さ	2.2	上半水平太いタタキ→	煤・コゲ
残存高	14.8 調整	下半右下がリナデ	外:部分
胴部最大径	19.0 復元 外:ヨコナデ	内:右上がりハケ	内:部分
底部径	内:ヨコハケ→ヨコナデ	(一部左上がり)→ナデ?	
色調	外:2.5Y6/1 黄灰 内:2.5Y5/1 黄灰 断:2.5Y7/1 灰白		
胎土	大:2~1mm角閃石あり、4~1mm石英・1mm弱長石若干 小:角閃石・長石・石英・黒雲母		
裏22	粗製		
法量 (cm)	口縁部	胴部	底部
口径	14.3 復元 形態	調整	
頸部内径	10.2 復元 波打つ、外反、端面外方へ尖る	外:	
口頸高さ	1.9	棒状工具ヨコナデ?→	煤・コゲ
残存高	7.3 調整	ナデ	外:全面
胴部最大径	13.1 復元 外:タテハケ→ヨコナデ	内:	内:なし
底部径	内:ヨコハケ→ヨコナデ	ヨコ板ナデ	
色調	外:2.5Y5/2 暗灰黄 内:2.5Y6/2 灰黄 断:2.5Y6/1 黄灰		
胎土	大:2~1mm長石・石英若干、1mm弱角閃石わずか 小:角閃石・黒雲母・長石・石英		
裏23	図3-1 粗製(裏22と同一個体?)		
法量 (cm)	口縁部	胴部	底部
口径	15.8 復元 形態	調整	
頸部内径	12.4 復元 波打つ、外反、端面外方へ尖る	外:	
口頸高さ	2.2	粘土皺→ナデ	煤・コゲ
残存高	7.6 調整	内:	外:口縁
胴部最大径	15.6 外:タテハケ→ヨコナデ	ヨコ板ナデ	部分的
底部径	内:ヨコハケ→ヨコナデ?		内:頸部
色調	外:2.5Y5/2 ~ 5/1 暗灰黄~黄灰 内:2.5Y5/1 黄灰 断:2.5Y6/1 黄灰		
胎土	大:2~1mm長石・石英若干、1mm弱角閃石わずか 小:角閃石・黒雲母・長石・石英		
裏24	図3-4 庄内裏底部		
法量 (cm)	口縁部	胴部	底部
口径	形態	調整	小平底
頸部内径		外:	
口頸高さ		上半左下がりがタタキ→左傾ハケ	煤・コゲ
残存高	9.5 調整	→下半タテハケ	外:部分
胴部最大径	17.2 復元 外:	内:	内:底部
底部径	1.4 内:	左上がりケズリ	のみ
色調	外:5Y5/1 灰 内:同左 断:5Y6/1 灰		
胎土	大:2~1mmの石英・1mm弱の長石若干あり 小:角閃石・黒雲母・石英・長石		
裏25	図3-5 庄内裏底部		
法量 (cm)	口縁部	胴部	底部
口径	形態	調整	不明瞭な小平底
頸部内径		外:胴部中央水平タタキ→	
口頸高さ		胴部中央左傾ハケ→	煤・コゲ
残存高	10.9 調整	下半タテハケ	外:全面
胴部最大径	17.2 復元 外:	内:左上がりケズリ	内:底・胴
底部径	1.8 内:	(1単位のみ右上がり)	部分的
色調	外:10YR4/2 ~ 4/1 灰黄褐 内:10YR5/2 ~ 6/2 灰 断:10YR6/1 褐灰		
胎土	大:2~1mmの角閃石あり、1mm前後の石英若干 小:角閃石・石英・長石・黒雲母		



囊 26	図 33-3 庄内式底部			
法量 (cm)	口縁部	胸部	底部	
口径	形態	調整	平底	
頸部内径	9.6	外:	椀・コゲ 外: 胴部 内: 底部	
口頸高さ		上半? 左下がりタタキ→		
残存高		下半ナデ		
胴部最大径		内: 底部ユビオサエ→		
底部径		左上がりケズリ		
色調	外: 5Y7/1 ~ 6/1 灰白~灰 内: 10YR6/1 褐灰 断: 10YR7/1 灰白			
胎土	大: 1mm弱の角閃石若干、1mm弱の長石・石英わずか 小: 角閃石・長石・石英・黒雲母			
囊 27	図 33-9 V様式系底部			
法量 (cm)	口縁部	胸部	底部	
口径	形態	調整	平底	
頸部内径	3.6	外:	凹部あり 椀・コゲ 外: なし 内: なし	
口頸高さ		極太水平タタキ		
残存高		内:		
胴部最大径				左上がり板ナデ
底部径				
色調	外: 10YR5/2 ~ 5YR5/3 灰黄褐~にぶい赤褐 内: 10YR6/2 灰黄褐 断: 10YR6/1 褐灰			
胎土	大: 2 ~ 1mmの石英多し、1mm弱の長石・角閃石若干 小: 角閃石・長石・石英・黒雲母			
囊 28	図 33-8 V様式系底部			
法量 (cm)	口縁部	胸部	底部	
口径	形態	調整	平底	
頸部内径	3.7	外:	凹部あり 椀・コゲ 外: なし 内: なし	
口頸高さ		左下がり太いタタキ		
残存高		底部側面ユビオサエ		
胴部最大径		内:		
底部径		左上がり板ハケ		4.4
色調	外: 7.5YR6/2 ~ 2.5YR5/4 灰褐~にぶい赤褐 内: 10YR6/2 灰黄褐 断: 10YR6/1 褐灰			
胎土	大: 2 ~ 1mmの石英・1mm弱の長石わずか 小: 石英・黒雲母・角閃石・長石			

約78cmで、底部中央が周囲より6cmほど深い。埋土は土器の隙間にあるものはよく分らないが、上面で土器群の上を一部覆っていたのは「B内10~5cmのCのブロックわずか」である。深くはないが、現代でも完掘後、若干湧水が見られた。

大量の土器が出土した。破片のまま、コンテナ数で10箱分である。図31で記録した上面の出土状況はまだ密度が低い方で、それより下は土器片同士がかみ合い、多少割らないと取り上げできないほどであり、途中で面を揃えて出土状況を実測するのは不可能であった。

土器片は遺構壁に沿って立った状態のものが多く、微細な土器片も多く見られ、密度が疎になる部分は一切なく遺構底部まで詰まっていた。

その状況から、同時期一括投棄である事は確実である。庄内式期の良好な一括資料になろう。

143井戸出土遺物 今回の調査で他の遺構・包含層の遺物は実測可能な遺物のうちわずかしか掲載できなかったが、この遺物群のみは良好な一括資料でもあり、個体として把握可能で、実測可能な庄内式期の遺物は全て掲載した。

囊(表1・図32・33) 出土土器の中で圧倒的な量があるのは囊で、その囊の中でも生駒西麓産胎土庄内式囊が90%以上を占める。量が多すぎて、特に庄内式囊は十分な接合が行えたとは思えない。口縁部の破片から見て、少なく見積もっても30個体分程度はあろう。

その中で、口縁部から頸部の周りが50%以上復元でき、その部分の法量が計測できるものを抽出し、

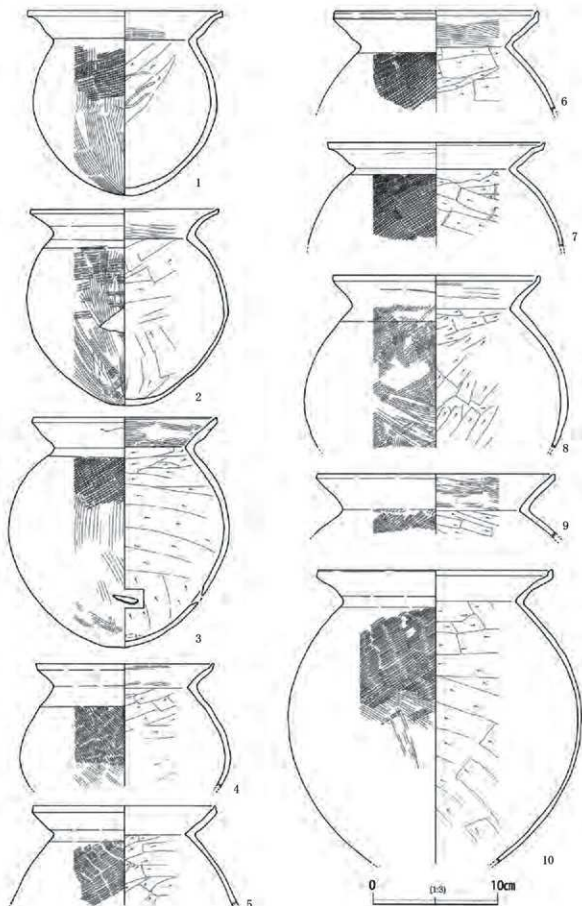


图32 田井中第6面 143 井戸出土遺物 (その1)

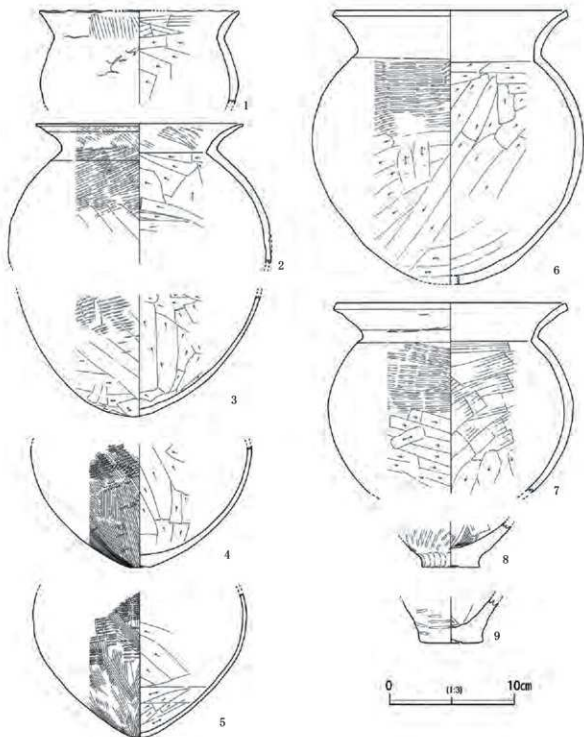


図33 田井中第6面 143井戸出土遺物（その2）

さらに庄内式期に併存するV様式系裏と、粗製裏の実測可能なものを抽出、それに実測可能な庄内式裏底部・V様式裏底部を加え、表1を作成し、独自に裏の番号をふった。さらにその中からある程度胴部の調整まで分かるものを実測・掲載した。基本的な内容は表1を参考にされたい。

図32-1は土器4、裏3である。出土状況では口縁を上にしてその場で割れた状態であった。粗粒の角閃石は見られないが、生駒西麓産胎土である。内面のケズリの上に、棒状工具によるナデがわずかに散在する。庄内式裏のうち一番小さい部類である。

図32-2は土器2、甕2である。出土状況では、横置状態でその場で割れて上部の破片が内側に落ち込んだような状況であった。粗粒の角閃石はわずかだが生駒西麓産胎土である。大きさでは図32-1と同じ部類である。

図32-3は土器6、甕1である。完形のまま出土した。胴部下半に外面からの打撃による穿孔が1カ所ある。外面下半はやや磨滅する。生駒西麓産胎土である。図32-3～5は庄内式甕で2番目に小さい部類である。

図32-4は甕4である。これのみがタタキが右下がりであるが、胎土は生駒西麓産である。内面下部のケズリが不明確なのはナデが入ったためである。

図32-5は土器1、甕16である。出土状況ではやや破片が散乱していた。胎土の色が特徴的だが生駒西麓産である。わずかにしか接合しない胴部下半片があり、表1の調整はそれも含め記載している。

図32-6は甕13である。口縁端部のつまみ上げが長い。これより図32-8までは庄内式甕で2番目に大きい部類である。生駒西麓産胎土である。

図32-7は甕5である。生駒西麓産胎土である。

図32-8は甕10である。口縁が外反しない。粗粒の角閃石もある生駒西麓産胎土である。

図32-9は甕12である。口縁端部のつまみ上げは弱い。図32-10と共に庄内式甕で一番大きい部類である。生駒西麓産胎土である。

図32-10は甕7である。粗粒の角閃石もある生駒西麓産胎土である。

図33-1は甕23である。甕22と共に庄内式甕に併行する小型の粗製甕と思われる。外面は粘土量多く、方向不明のナデが入る。生駒西麓産胎土である。

図33-2は甕18である。口縁外面にはヨコナデ前のタタキの痕跡残る。下部ではナデがタタキを消す。タタキは太くV様式的だが、口縁部形態は庄内式甕併行のタテハケ長胴甕のものに似る。胎土は生駒西麓産である。

図33-3は甕26である。庄内式甕底部だが、外面タタキを消すのはナデ、生駒西麓産胎土である。

図33-4は甕24、庄内式甕底部で、小平底はやや凹面を成す。内面には炭化米も付着する。生駒西麓産胎土である。

図33-5は甕25、庄内式甕底部である。不明瞭な小平底にはハケも入る。内面ケズリ方向が変る部分にヨコナデが入る。粗粒の角閃石も含む生駒西麓産胎土である。

図33-6は土器5、甕20である。出土状況では横置状態で輪郭を留めながら一部の破片は散乱していた。内面下半は右上がりのナデのようで、上のケズリとの境にはヨコナデが入っていたようである。タタキは太く、口縁は外反し端面を持つが、内面はケズリで、底部は破片を欠くが不明瞭な小平底のようである。一応V様式系としたが、むしろ庄内式との折衷形と言うべきだろう。生駒西麓産胎土である。

図33-7は甕21である。球胴化したV様式系甕である。胎土は粗粒の角閃石も含む生駒西麓産胎土である。

図33-8は甕28で、V様式系甕底部である。V様式の甕の調整だが、体部の立ち上がりが緩く、球胴化している可能性が高い。胎土には細粒でも角閃石が少なく、河内低地産である。

図33-9は甕27で、V様式系甕底部である。タタキはV様式の通常のものより太く、タタキ痕の凹部の断面は方形になる。生駒西麓産胎土である。

甕(図34) 破片で壺底部は5個体、直口壺は8個体が確認できた。細頸壺・二重口縁壺は1片のみ

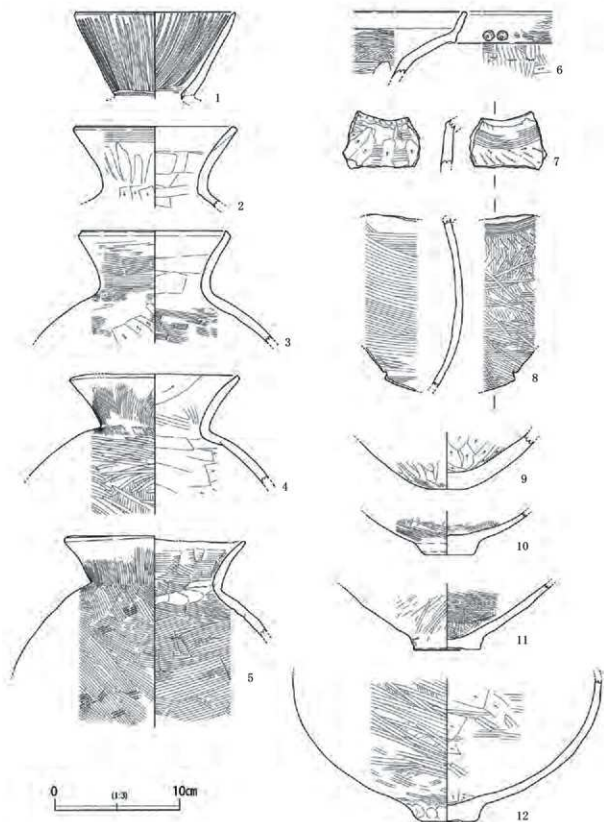


図34 田井中第6面 143井戸出土遺物(その3)(4:土器10,12:土器9)

である。肩部に列点文のあるものをはじめ、第6・7層から入った弥生土器も存在するようだが、明らかに弥生時代中期以前と思われるもののみ排除し、実測可能なものを抽出した。当遺跡では弥生土器の壺は生駒西麓産胎土のものは少ないので、ここに上げたものの生駒西麓産胎土の比率の高さは、庄内式

期の特徴と思われる。

図34-1は細頸壺片である。外面はヨコナデ後ヨコミガキ、最後にタテミガキ、頸部にタテミガキを切るヨコミガキが3条入り、最下段のミガキは断続的に止まる。内面の調整も同様である。頸部の粘土継ぎ目に沿った剥離から、口縁部は肩部の上にのせるように接合しているのが分かる。胎土はにぶい黄橙10YR7/3を呈し、砂粒のほとんどない「精良な胎土」である。

図34-2は直口壺片である。口縁部ヨコハケの下は、ヨコナデ後強いタテナデである。内面はヨコナデのみである。胎土は生駒西麓産である。

図34-3も直口壺片である。外面は口縁部がタテハケ後ヨコハケ、胴部はヨコハケ後部分的にナナメナデで、最後に全体に緩くヨコナデである。口縁内面はヨコナデである。胎土は粗粒にも角閃石多い生駒西麓産胎土である。

図34-4も直口壺片である。外面は、口縁部タテハケ後上半ヨコナデ、胴部はタテハケ・ヨコナデ・ミガキの順に入る。内面は、口縁はハケが残るがヨコナデ、最後に右上にナデ上げる。胴部はケズリ後ナデ。胎土は生駒西麓産胎土である。

図34-5も直口壺片である。外面は胴部にハケ前のタタキわずかに残り、口縁上半はヨコナデがハケを消す。内面は部分的にハケ前に棒状工具による強い調整が入る。ハケ後、頸部と口縁上部にヨコナデ。胎土は生駒西麓産である。

図34-6は二重口縁壺片である。口縁外面は波状文に2個1セットの円形附文あり。その下はハケ後一部ナデ、内面はハケ後ミガキである。胎土は褐灰10YR6/1と明色だが、生駒西麓産である。

図34-7は壺肩部片で、内面はタテユビナデ後ヨコハケ、外面は頸部の粘土継ぎ目が剥離、ナデ後櫛描で直線文の下に列点文である。生駒西麓産胎土である。

図34-8も前者と同じ、ただし、外面はハケ後まばらにミガキで、胎土は灰黄2.5Y7/2を呈し、チャートがわずかに入り角閃石が少ない、河内低地産胎土である。

図34-9は壺底部片である。外面のミガキは太いが、底部は不明確な小平底である。胎土は角閃石の少ない、河内低地産である。

図34-10は壺底部片である。胴部は球胴か。外面のミガキは細い。生駒西麓産胎土である。遡っても弥生時代後期か。

図34-11も壺底部片である。外面はハケ後ナデだが、ナデ後粗い目のハケが強く入る。内面はハケ前に底部に棒状工具によるツブシが入る。生駒西麓産胎土である。

図34-12は壺底部から胴部片である。内面はハケ後ナデに短い単位のミガキが散在する。生駒西麓産胎土である。

高坏(図35) 高坏は多様な種類のものが見られた。図化可能なものは掲載したが、その他に中実と半中実の脚柱部片が各1片あり、接合しない坏部片では、精良な胎土で坏部上半が直線的に開く有稜高坏が多いようである。

図35-1は小型高坏で、脚柱部のみを欠く。外面は口縁に櫛描3条の沈線、坏部のミガキはナナム方向がヨコ方向を切る。坏部下部から脚部はタテナデ、脚部にミガキ散在する。坏部内面はヨコナデ後放射状暗文、脚部内面はヨコハケである。胎土はほとんど砂粒の入らない「精良な胎土」である。

図35-2は椀形高坏で、口縁部と脚柱部を欠く。土器7である。出土状況でも高い位置にあり、他に破片はなかった。外面坏部下半に左上がりのナデ残る。坏部と脚部の境に上下に抜けるハケのあたり

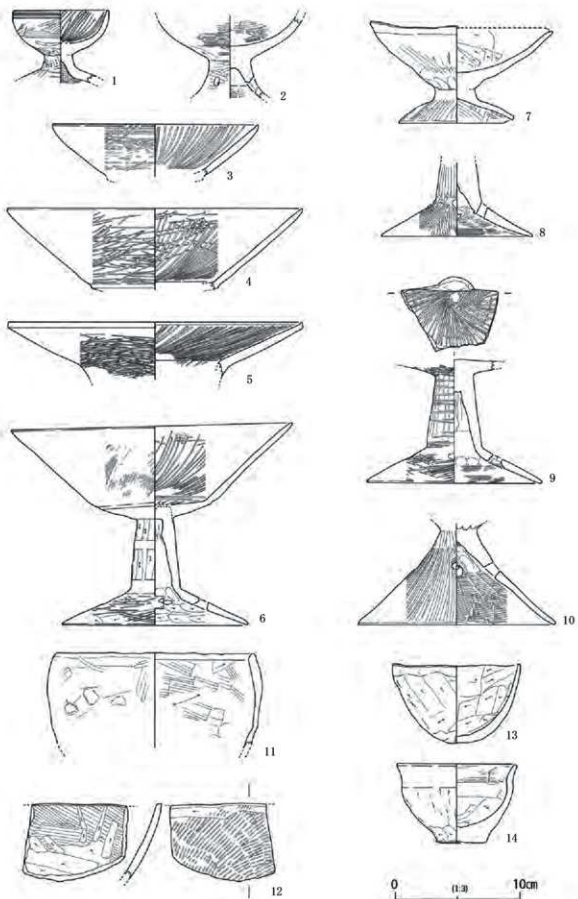


図35 田井中第6面 143井戸出土遺物(その4)(2:土器7、6:土器3、13:土器8)

が混在する。脚部内面の上部はナデである。胎土にはふい褐7.5YR5/3を呈し、石英・長石あり、チャートわずかにあり。

図35-3は有稜高環部片である。内面は放射状暗文の前に、ヨコナデ後ヨコミガキである。精良な胎土である。有稜高環では小型である。

図35-4も有稜高環部片で、精良な胎土である。外面はタテハケ・ヨコナデ・ミガキの順、内面はヨコナデ・ヨコミガキ・放射状暗文の順である。

図35-5は143井戸内で唯一確認できた有段高環部片で、精良な胎土である。外面は右上がりハケ・ヨコナデ・ミガキの順、内面はヨコナデ・ヨコミガキ・放射状暗文の順である。

図35-6は土器3で、口縁部の一部を欠くのみ有稜高環である。出土状況では横置状態で部が土器4に当たって割れたような状況であった。外面は、部上半ハケ後ナデ、下半ケズリ後ナデ、脚柱部はタテナデ後2ヶ所にヨコナデ、脚部はナデ後ミガキである。部内面は左上がりハケ・ヨコナデ・ヨコミガキ・放射状暗文・屈曲部のヨコミガキの順に入る。脚柱部内面もヨコナデ入るが、上端のみシボリ痕残る。精良な胎土である。

図35-7は部部の一部を欠く粗製高環である。部部外面に縦方向の粘土皺が多い。口縁部・脚柱部・脚部端部にヨコナデあり。胎土は灰黄褐10YR6/2を呈し、生駒西麓産胎土である。

図35-8は高環脚部片で、精良な胎土である。脚柱部は半中実で、内面上部はナデである。

図35-9も高環脚部片で精良な胎土である。外面はミガキ前、脚柱部はタテナデ、部部はヨコナデである。脚内面はユビオサエの上はヨコナデである。

図35-10も高環脚部片である。外面部部にはミガキ前のタテハケが残る。胎土にはふい黄橙10YR7/3を呈し、わずかに角閃石を含む河内低地産である。

鉢(図35) 確認できたのは掲載したもののみである。粗製がほとんどであると言える。

図35-11は粗製鉢片である。外面はヨコナデだが、棒状工具の痕が散在する。小さな粘土塊を塗りこんだ痕もある。内面はユビオサエ・ハケ・ヨコナデの順である。胎土は生駒西麓産である。

図35-12も粗製鉢片である。胎土は図35-11とまったく同じだが、調整は、外面タタキ後ナデ、内面ハケ後ケズリである。

図35-13は土器8、完形の小型丸底粗製鉢である。出土状況は高い位置で倒置状態であった。内外面ナデ、生駒西麓産胎土である。

図35-14は平底の小型鉢で、V様式系と言える。口縁内面のヨコハケ後全面ナデで、外面には縦方向の粘土皺が目立つ。生駒西麓産胎土である。

甌(図36) 確認できたのはこのV様式系の2点のみである。

図36-1は生駒西麓産胎土で、内面と外面口縁はヨコナデである。

図36-2も生駒西麓産胎土で、外面は口縁のみタタキを消してヨコナデ、底部はケズリ後ナデか。内面はハケ後横方向の工具痕散在、最後にケズリである。

小型器台(図36) 個体として確認できるのはこれらの4個のみで後は少数の破片のみである。

図36-3は精良な胎土である。受け部外面下半はヨコナデの前にケズリか。内面は暗文の前はヨコナデである。

図36-4も精良な胎土であるが、細粒に角閃石あり。脚部との粘土継ぎ目の剝離痕を残す。外面はミガキ前ヨコナデ、内面はヨコナデ・ヨコミガキ・暗文の順である。



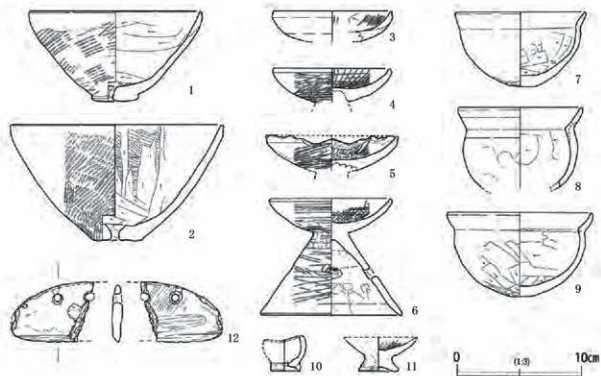


図36 田井中第6面 143 井戸出土遺物（その5）

図36-5も精良な胎土で、外面ヨコナデ・ミガキの順、内面ヨコナデ・ヨコミガキ・暗文の順である。受け部内面底部に1～2mm大のハゼ多数あり、中心に砂粒が残るものもあるので被熱によるものと思われるが、二次的被災かは不明である。図点線より上に煤付着する。

図36-6も精良な胎土である。受け部は外面下半に削りある以外は図36-5と同じ、内面底部のハゼも同じ状況である。口縁一部に煤付着する。ケズリは脚部上部にまで及ぶ、脚端部にはヨコナデ、脚部内面はナデである。

小型丸底鉢（図35） 法量の違う破片で見ると6個体分はありそうだが、個体把握できたのはこの3点のみである。

図35-7は精良な胎土で、口縁の一部を欠くのみである。外面は底部にケズリ後全体にヨコナデ、内面はナデである。

図35-8は残存率20%ほどで、やや歪み、図上は丸底壺に近く見えるが鉢である。精良な胎土で、外面下半にケズリ後全体にナデ、内面はナデである。

図35-9は口縁の1/4を欠くのみ、精良な胎土で、外面下半のケズリは良く残る。内面はナデである。ミニチュア土器（図35）以下の2点が確認された。

図35-10は鉢を模したものか。残存率50%ほどで、台部はユビオサエで貼り付け、他はユビナデ、胎土は灰白10YR7/1を呈し、石英若干ありである。

図35-11は高環を模したものか。口縁部を欠く。坏部内面は普通の高環と同じようにヨコミガキ後放射状暗文、胎土は精良である。

石應丁（図35-12）他にも1片ある。これは土器群上面に混ざってあったものである。緑泥片岩製で、孔は両面穿孔、片面にのみ擦痕が残り、一部幅1cmほどで軽く凹部を成す部分がある。

弥生土器 弥生土器も、遺構壁に露出していたものも含め、コンテナ1箱弱ほどの出土量がある。そ

の中には、明らかに庄内式の影響を受け、庄内式期併行のV様式系と思われる上述の土器以外、弥生時代後期の土器片はない。この弥生土器群は143井戸が掘り込まれた第6・7層に包含されていたものと見て良いだろう。

底部片だけでも37片あり、圧倒的に壺が多い。甕片が次ぎ、他には鉢が見られる程度である。文様は沈線文は3条から多条まで、櫛描文は直線文・簾状文・扇状文・波状文が揃う。弥生時代前期後葉から中期中葉頃の遺物群と言える。

143井戸出土遺物まとめ 本遺構の庄内式期の土器群は、出土状況から同時期の一括投棄と考えられ、量的にも、器種が揃う点でも良好な一括資料と言える。

甕は庄内式以外も図33-8以外は生駒西麓産胎土であり、壺も図34-1が「精良」、図34-8が河内低地産以外は生駒西麓産、高坏はほとんどが精良な胎土だが、粗製の図34-1が生駒西麓産である。弥生土器は、この調査では生駒西麓産胎土の割合が低く、3割程度なのと比べ対照的である。

型式的にも庄内式が甕のみならず、壺・高坏類でも圧倒的で、小型精製三種の内、器台と鉢が揃う。

この状況は、当遺跡の北側に近い、中田遺跡群と久宝寺遺跡を中心とした河内型庄内式土器様式の中核地域でしかありえないものであり、その点でこの一括資料により田井中遺跡はその中核地域に属し、縁辺部を形成していると捉える事ができる。

庄内式期の中ではどの時期の遺物群かという問題は、庄内式土器の編年に諸説ある中では難しいが、筆者は庄内式期は長くても80年間、短ければ50年間ほどと見ている。その中で編年を概的に甕で考えてみると、中核地域でもまだ少数派である初頭段階、主流となるが、型式的に多様な前葉段階、定型化が進み、若干器形の崩れも見え出す中葉段階、調整にも省略が目立ちだす後葉段階、と4段階程度にしか分かれな思っている。

それでこの一括遺物を見ると、まだ小平底は残るが、胴部下半のハケは基本的に共通し、肩部はややなで肩のものもあるが、調整の省略は見られないので、中葉段階と見て良いと思われる。小型器台が定型化したもので、小型丸底鉢は精製品が成立しており、高坏は、有稜に坏部上部が外反するものはなく、直線的に開くもののみであり、有段高坏も見られる状況は、中葉段階の中でもやや新しい要素と言えるかもしれない。杉本編年の23期前後か（杉本2006年）。

実年代としては、布留式期の始まりを3世紀末葉と考えているので、3世紀中葉頃と思う。

73土坑 調査区北東側で115溝底部から検出された遺構である。他同様、本来は溝埋土を切っていた可能性もあるが、出土遺物が遺構と同時期的なものであるならば、この面でも古い遺構となり、溝に切られていた可能性もある。攪乱に半分ほどを切られるが、短径1.08mほどの楕円形か。深さは溝の底から20cmほど、埋土は「A内1cmほどのCのブロックわずか」である。

遺物は弥生土器51片（甕43（ハケ1、ミガキ42）、壺8（口縁2、底2））板状凝灰岩礫1点、サヌカイト剥片1点である。

そのうち弥生土器ミガキ甕の42片が接合した。図30-8である。残存率は50%ほど。外面はミガキ前に上半ナデ、下半ケズリが入る。底面も不定方向だがナデ後ミガキである。内面はユビオサエ散在・ヨコナデ・ミガキの順に入る。底部には両面からの焼成後穿孔があり、甕に転用か。埋土は橙5YR6/6を呈し、粗粒の長石・石英多し、黒雲母わずかにあり、細粒には上記の他角閃石わずかにありで、河内低地産である。

内外面省略のないミガキで、口縁端部の面は拡張が見られないので河内Ⅱ様式、下つても河内Ⅲ-1

様式までのものである。裏底部に焼成後穿孔した弥生土器は他にもしばしば見られた。

この裏は、土坑内で破片が集中する部分を確認できないまま出土し、それでも接合して個体の半分ほどは残存していた。包含層から入った遺物とは考えにくく、遺構と同時期的である可能性が高い。

92ピット 一部調査区南西壁に切られるが、長径80cm以上、短径58cmほどの長楕円形で、深さ10cmほどである。埋土はAのみである。

遺物は弥生土器62片(裏7(底3、口縁4)、鉢1、壺10(底4、沈線文2、綾杉文1、櫛描直線文1)、サヌカイトチップ1)である。接合するものはなかった。

特徴的な土器片をあげる。図30-3は、綾杉文の入った弥生土器広口壺頸部片である。外面、ハケ・ナデ・ミガキの順、内面、ハケ後ナデである。胎土は灰黄褐10YR5/2を呈し、長石多し、角閃石・石英あり、中粒砂以下には黒雲母もありの生駒西麓産胎土である。文様は横位の沈線を入れた後、斜行する線が後、斜行線は上下同じ位置で方向を変える。

こういった文様は、数は少ないが、河内Ⅱ様式前後に見られるようである。

出土遺物はそれほど大きな破片もなく、包含層から入った可能性もある。

93土坑 調査区南西側、短辺70cm、長辺80cm程度の隅丸方形の土坑で、深さは約14cm、埋土は「A内3～1cmのCのブロック若干」である。

遺物は弥生土器45片(裏20(口縁10、底10)、壺23(底8、広口2、刻み目突帯2、沈線文8)、鉢1、甕底1)、凝灰岩礫1点、サヌカイト剥片1点である。あまり接合しない。沈線文は2条から13条以上の多条沈線文もある。

図30-1は弥生広口壺片で、口縁部周が1/4ほど残存する。内面はユビオサエ後ナデで、口縁部はヨコナデ、頸部上半は右上がり、下半は左上がりが多い。その後ミガキである。胎土はにぶい橙5YR6/4を呈し、石英多し、長石あり、黒雲母・角閃石・チャートわずかの河内低地産である。

口縁端部が丸く取まり、頸部が上下均等に外反し、頸部以上が無文の広口壺は河内Ⅰ-2～Ⅱ-1様式にありえるものである。

図30-7は焼成後穿孔の弥生土器裏底部片である。外面はハケ、底部は不定方向ナデで、内面はナデである。底部穿孔は両面から削るようにして開けられる。図30-8と同じような穿孔である。胎土は褐灰10YR6/1を呈し、石英・長石多し、中粒砂以下にわずかに角閃石・チャートありの河内低地産である。

時期は限定しがたいが、弥生時代中期の裏であろう。

2点の遺物から見れば河内Ⅱ-1様式頃となるが、大型の破片でも第6・7層から入った可能性はあると言え、遺構の時期と即断はできない。

95土坑(図37・図版11-2) 調査区南西隅で122落込埋土を切っている。径77～82cmの不整形円形で、深さは19cmほど、埋土はAのみである。

出土遺物は弥生土器67片(裏8(底5、口縁2)、壺12(底2、広口2、沈線文1条1、櫛描直線文6)、高坏1)、土師器5片(裏4(布留口縁1、長胴丸底1)、小型丸底壺1)、凝灰岩礫1、サヌカイト剥片1、用途不明木器1)である。土師器を含み、布留式以降の時期と言え、143井戸より新しい。

土坑の中心付近で、羽子板状の用途不明木器と土師器丸底長胴裏片が、底部よりやや浮き、肩部よりやや上に突出して検出された。それぞれ木器1、土器1とした。

土器1は丸底長胴の裏底部から胴部が残る、胴部最大径15.6cmで残高17cmほど。器壁は荒れるが、

外面タテナデ、内面左上がりケズリ後ナデである。内面底部のみにコゲ付着する。河内低地産胎土である。あまり類例のないものだが、布留式併行のものと見れば問題はない。

図38-2は木器1である。羽子板状だが、厚さはある。柾目取りである。細い傷状の工具痕が散在するが、表面が剥がれた部分が多く、加工の様相は明らかでない。

131土坑 調査区南西側にあり、長軸93cm、短軸75cmほどの楕円形の土坑で、深さは10cmほど、埋土は「A内3~1cmのCのブロックと炭化物わずか」である。

出土遺物は弥生土器55片〔襖13(底1、口縁3、ミガキ9)、壺4(長頸1、沈線6条1)、蓋1〕、サヌカイト二次加工のある剥片1点である。

図版26-4は二次加工のある剥片である。ボジ面の左上辺から左辺にかけてツブシが入り、下辺は刃部形成される。右辺は新しい折れである。搔器としてよい。最大厚10.3mmである。

120落込(図31・図版12-5) 調査区南西壁の東半分以上にかかる不定形な落込である。中に143井戸が位置する。深さ10cm強ほどで、底部は平坦だが、やや東が深い傾向があり、西側がT.P.+8.73mほどに対し、東側はT.P.+8.68ほどである。埋土は「A内2~1cmのCのブロックわずか」である。

北西角付近で、土器片が集中的に出土し、土器群1としたが、結果的にはほとんどが同一個体の弥生襖片であった。落込底部よりは浮き、埋土上端にわずかにかからないほどの所に高さを揃えて集中する。細かくは2群に分かれ、北東側では口縁を南東に向け、内面を上にした破片が平たく広がる。南西側ではやや不揃いだが、口縁を北東に向けた破片がいくつかあり、外面を上にして平たく広がる。

北東側の群の位置で横置状態で割れ、その上半の破片群がなんらかの理由で南西にずれたような形である。ただし、接合時点で両者をつなぐ部分と底部付近の破片がない事が分かった。

図38-1がその弥生襖である。外面はナデとハケが残存し、ミガキが散在する。内面は口縁ヨコナデ以外はハケで、胎土は槽2.5Y6/8を呈し、石英・長石多し、角閃石・黒雲母若干、中粒砂以下では角閃石が多く、生駒西麓産胎土である。

大型の襖で胴部が張らないのも珍しいが、口縁端面が拡張せず、ミガキは外面に散在するのみと言う点からは、河内Ⅱ-2~Ⅲ-1様式のものか。

120落込からの他の出土遺物は、弥生土器64片〔襖6(底4、口縁2)、壺10(底3、広口2)、沈線

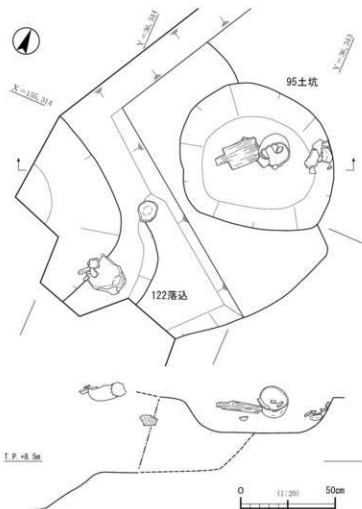


図37 田井中第6面 95土坑・122落込遺物出土状況図

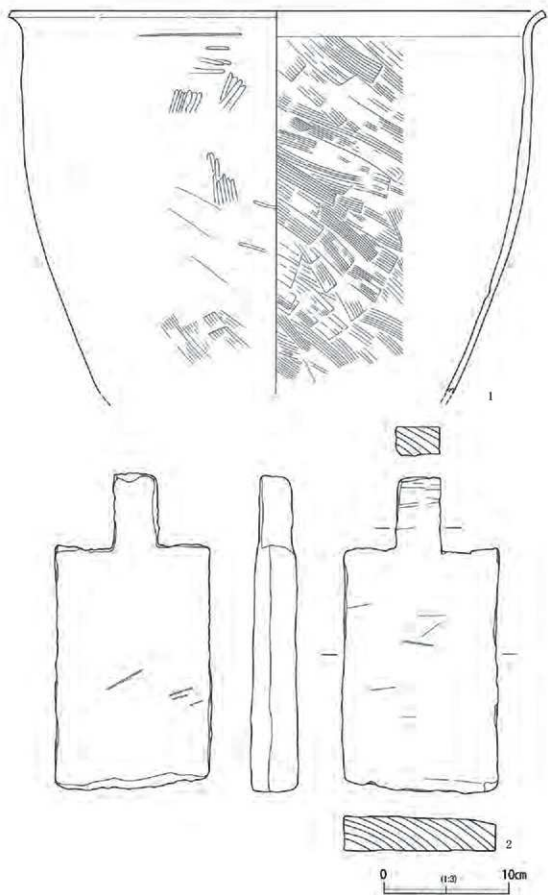


図38 田井中第6面 遺構出土遺物(その2) (1: 120 落込土器群1, 2: 95 土坑木器1)

文3、櫛描直線文2)、鉢1)、サヌカイト8点(チップ3、剥片2、石核3)である。

図38-1の甕の存在は動かしがたく、他の遺物もその時期に甕産をきたすものはない。この事からも143井戸は本来この落込の埋土を切っていたと言える。

ならば、この面は弥生時代中期前葉から、95土坑の古墳時代前期の遺構までがある事になり、非常に長い期間の遺構が併存している事になる。

122落込(図37) 調査区南西角にかかり、全体形は分からない。ただ、南西に向かってさらに一段落ち、深さは72cmに達する。落込としたが、その深さや、確認できる範囲の形からは井戸の可能性が高い。埋土はAのみである。埋土上面近くから大きめの破片が2片出土している。

図37で南側の破片は外面にタテケズリの入る大型の甕底部で、産地不明の胎土である。赤いチャートがあり、摂津産かもしれない。北のものは外面タテハケ、南河内産胎土の甕底部片である。

他の出土遺物は、弥生土器69片(甕7(底2、ミガキ2、口縁3)、壺11(底2、広口2、沈線文2、櫛描直線文4)、鉢1)である。遺物から見れば弥生時代中期の遺構か。

123落込 調査区南西部で118溝・124落込とつながる。深さは10cm前後で、埋土は「A内3~1cmのCのブロック若干」である。

出土遺物は弥生土器129片(甕20(底6)、壺23(底2、広口5、沈線文10、櫛描直線文5、波状文1)、器台1、鉢1)、サヌカイト剥片5点、土師器庄内式甕4片である。落込南西側の形状から、溝が重複している可能性があり、庄内式甕片などはそちらに入っていた可能性もある。

図30-5は弥生土器甕底部片である。底部周は完形で、外面ハケ、底面はケズリ、内面ナデである。胎土は、にぶい黄橙10YR7/2を呈し、長石・石英あり、チャートわずかにありで、他地域産か。外面のハケで割れた面に糊圧痕残る。弥生時代中期のものであろう。

落込自体の存続時期は不明確としか言えない。

136落込 調査区北西隅にある。深さは5cm程度で、埋土はAのみである。出土遺物は弥生土器が51点ほどあるが、構成は他と大差ない。

注目できる遺物は図30-10である。炭化しているが木庖丁と思われる。柁目取りで、図左上の辺は丸く仕上げ、下辺は片刃状に仕上げ上げる。

119溝(図版11-4) 調査区南東壁から118溝の南で平行して伸び、その溝に合流する。深さは10cmほど、埋土はAのみである。

写真図版のとおり、底部から弥生土器壺片が出土し、それは広口壺で、拡張しない口縁端部に刻み目、頸部に櫛描の直線文と波状文がある。他に下に拡張した口縁端部に波状文の入るもの、垂下口縁に簾状文の入るものもある。そして溝肩部から緑泥片岩製石庖丁が出土した。この面で、河内Ⅲ~Ⅳ様式の遺物を含む遺構としては重要である。

126溝 124落込から南西に伸び、北東へ屈曲する溝である。

図版29-3の石鎌が出土した。ネガ面は剥片時の剝離面を残し、横長の剥片を使用した事が分かる。その右辺は折れである。上辺はツブシ、下辺はステップ状剝離を起したものもあるが刃部形成されている。最大厚は13.4mmである。

147土器群(図版11-6) 134井戸の北東側で遺構のない部分に土器片が集中していた。弥生土器30片(甕11、壺6(刻み目突帯1、沈線文2条3、広口多条沈線文2))である。甕は接合しなかったが生駒西麓産のミガキ甕で同一個体のようなだ。しかし個体半分もない。河内Ⅱ様式頃のものか。

148土器群(図版11-7) 104土坑と105ピットの間の平場にある。弥生土器12片(甕9、壺3)で、甕は同一個体のようで、刻み目口縁に沈線文5条の生駒西麓産胎土のミガキ甕である。個体の1/5ほどか。これも河内Ⅱ様式頃と言える。

第6層包含遺物 コンテナで5箱分の遺物が出土した。弥生土器は計量していない。甕はほとんどがミガキ甕で、タタキ甕はない。底部片は甕29、壺5、鉢3で上層と構成が変わり集落的とも言える。文様は沈線文の4～5条が多いが、9条のものもあり、刻み目突帯も見られる。櫛描文はない。

石棒あり、石庖丁2、発泡した粘土塊1、礫9などがあり、サヌカイトは39点(チップ3、剥片32、石核、石錐1、搔器2)である。

図版27-2は石錐である。刃部先端を欠失する。最大厚は4.8mmである。

図版27-5は石核か。ネガ面左辺・上辺は原礫面、ポジ面は様々な方向から剝離が入るが、下辺を粗く刃部形成しているようにも見える。最大厚13.3mmである。

図版28-1は搔器である。ネガ面上辺・左辺は原礫面、下辺は刃部形成されている。右辺は折れである。最大厚12.6mmである。

土器は河内Ⅱ様式頃のものとしてまとまる。サヌカイトも同時期の様相と見て良いだろう。

小結 第6面は、第6層遺物が河内Ⅱ様式でまとまり、72土坑と120落込土器群1のミガキ甕で見れば、始まりが河内Ⅱ様式期にある事は間違いないだろう。そして、最新の土器を含む遺構は95土坑で、古墳時代前期に位置づけられ、弥生時代中期前葉から長い期間の遺構が重複している事になる。

しかし、遺構埋土は黒色系で大差なく、遺構同士の切り合いも不明確な所から、個々の遺構の新旧関係は掴みがたい。

時期をまとめると、先の2遺構の河内Ⅱ様式からⅢ-1様式の時期がまずあり、117井戸・134井戸・119溝の河内Ⅲ様式からⅣ様式の時期がある。それらと143井戸の古墳時代初頭から95土坑の古墳時代前期の3時期に大別できる。ただし、河内Ⅳ様式的な土器はほとんどなく、Ⅲ-Ⅳ様式の時期は河内Ⅲ-3-Ⅳ-1様式ほどに限定できるかもしれない。

そう考えると、3時期に分かれ、各々の期間も考えれば、さほど遺構が密集しているとも言いがたい。しかし、井戸があり、何よりも遺物量が多い事から、集落域の様相とは見て良いだろう。

一つ疑問なのは上層の第5-3層に含まれていた、河内Ⅲ-Ⅳ様式が豊富で、壺が甕よりも多い土器群の様相がこの面では見られない事である。おそらく、ここからは遠くない位置にそのような土器構成を持つ遺構群があり、第5-3層はそれを削平してここに盛土されたものであろう。

143井戸は、庄内式期の良好な一括資料であるだけでなく、田井中遺跡が、河内型庄内式土器の中核地域に含まれるという事で明らかにした。その意味でも大きな価値を持つ遺構と言える。しかし、その大量廃棄がどのような行為の結果なのかを知る手がかりはほとんどないとも言える。

その場で割れたような状況の土器も見られるが、多くの個体が幾らかの破片を欠く状態であるし、破片同士の詰まり具合を見ても、別の場所で割られて投棄されたものが多いと考えざるをえない。小型器台・小型丸底鉢・ミニチュア土器など、点数は少ないが祭祀的要素のある土器をどう評価するかで、解釈も異なると思われる。

#### 第9項 第7面(図39・図版13-1)

人為的盛土の上面と考えられ、井戸・土坑・ピット・落込・溝・段差が検出された。第6面で見落と

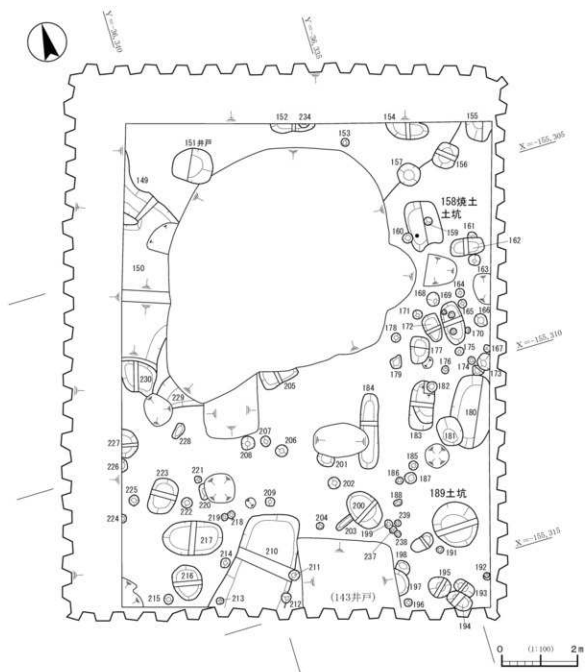


図39 田井中第7面 全体図

した遺構もあるかと思われるが、第6層に河内Ⅲ様式以降の遺物の混じりがないことから、そう多くはないであろう。

ピットが比較的多く、深さ20cmほどのものが多いが、柱痕は確認されず、建物もないようである。しかし、遺構密度から集落的な様相を想定しても良いと思われる。

面の高さはTP.+8.85~8.72mで、北東隅がやや低い程度でほとんど高低差はない。ただ、北西側の150落込が、第7層下面の北西に開く谷状地形の名残りで凹地を成していたようである。

151井戸 調査区北西側にあり、長径107cm、短径85cmほどの不整形円で、深さは70cmほど。埋土は他の遺構と同じく、第6層に似た黒色土である。

出土遺物は弥生土器62片（甕25（底部2、ハケ3、ミガキ11）、壺37（底5、櫛描文3））、サヌカ



イト2点(剥片1、チップ2)である。時期を特定できる要素はないが、完掘すると湧水が見られた。

158焼土土坑(図版13-2) 調査区北東側にある、長軸115cm、短軸90cmほどの隅丸長方形の土坑で、埋土を159ピットが切る。深さは10cmほどで底は平坦である。特徴的なのは埋土が焼土のブロックである事で、それでも遺構壁・底には被火の形跡はない。土坑内南西側で、弥生土器壺が口縁部を若干欠くのみで、南に傾いた状態で出土した。

図40がその壺である。外面はミガキで頸部と肩部には4条の沈線の上に段が一段ある文様帯が巡る。内面は口縁から頸部ミガキ、肩部から胴部下半はユビナデで、最大径部分はユビオサエ、底部はミガキである。胎土は灰白10YR7/3を呈し、石英・長石あり、チャート・角閃石・黒雲母わずかにありの、河内低地産胎土である。

文様と、やや扁球形の胴部から、河内Ⅰ-3~4様式のものと思われる。

土器の在り方と埋土から祭祀的な感じを受けるが、遺構の性格はよく分からない。

172土坑 調査区東側で、長軸72cm、短軸45cmほどの不整な隅丸長方形の土坑で、深さは10cm強である。弥生土器小型鉢の破片とサヌカイトのチップと石鎌片が出土している。

図版29-2は石鎌片で、ネガ面右辺は折れである。上辺は原礫面で、ポジ面で風化しているのはヒビの痕か。下辺は刃部形成される。最大厚20.7mmである。

189土坑(図41・図版13-3) 調査区南東側で径98~125cmほどの不整形の平面形で、深さ約68cm、途中段がある土坑である。井戸と言っても良いような深さだが、土器の出土状況から土坑とした。埋土は黒色粘質土でブロック土はない。

図42の大型壺が、図41のような状況で出土した。土器Ⅰとした。検出時は、底部があり、胴部片が全て内面を上に向けているので、その場で割れ、後に遺構壁の段のところまで掘り直しがあり、胴部の外面を上に向けた破片と頸部以上が除去されたと考えた。

しかし接合すると、胴部は全周し、胴部と底部間は全周破片がない。考えれば、頸部の破片が一つだけ、外面を上に向けてあったのも変である。細かい破片も全くなかった。結論としては、割れた土器から破片を選択し、土坑内に入れたと考えられる。

土器Ⅱはハケ裏底片である。他の遺物は主に埋土上部から出土し、土器Ⅰ周辺ではあまり出土していない。弥生土器70片(壺64(沈線文5、櫛描文6))石庖丁1点、礫2点、サヌカイト5点(剥片4・石鎌1)である。

図42は土器Ⅰである。頸部・胴部・底部は接合しないが、胎土・焼成がまったく同じで同一個体である。外面はナデ後ミガキ、内面はハケ後ミガキ、頸部の文様は、文様帯の間に1本のミガキが後で入れられ、そのミガキはタテがヨコを切る。胎土は褐7.5YR4/4を呈し、粗粒の石英・長石多し、黒雲母・角閃石わずかにあり、中粒砂以下は角閃石も多いが、粘土自体が粒子細かく緻密なので、生駒西麓に近い河内低地産か。

胴部も長い長頸広口壺と思われる。胴部最大径が中位にきて、肩が張らなくなるのは河内Ⅱ-2様式

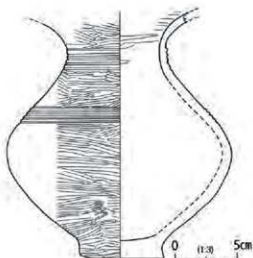


図40 田井中第7面 158 焼土土坑 土器Ⅰ

以降で、胴の張りが弱く、細身のものがあるのは河内Ⅲ-2様式までである。文様も、扇状文が多用されるのは河内Ⅳ様式に多いものの、籠状文がない事など时期的に矛盾はない。

図版28-2は図41でサヌカイトとしたものである。ネガ面の剥離は原礫面除去のもので、この剥片が打撃面から原礫の下端まで達したはじめのものである。最大厚17.0mmである。

図版29-1は石鉄で、ネガ面で基部右側を欠失する。微細な押圧剥離は少ない。最大厚5.6mmである。

土器1や他の土器片から見れば、この遺構は第6層と第6面の最古の時期の遺構群と同期的である。おそらく、弥生時代中期前葉内のある時期に新たな堆積があり、第6面が形成されたのであろう。つまり、この遺構は第7面でも最後の時期にあたる遺構と思われる。

第7層包含遺物 包含層で最も遺物が多く、コンテナ10箱分である。破片自体も大きいものが多い。弥生土器は、甕は底部12片が見られ、壺よりかなり少ない。生駒西麓産胎土は一つのみである。刻み目口縁が口縁部片の4割ほどか。3~4条の沈線文が3割ほど見られる。

第6層などで見られた底部焼成後穿孔は図43-7の1例しか認められない。普通の甕もない。

壺は、底部片が31片ある。生駒西麓産胎土は2片のみである。口縁部片は長頸広口もあるが、短頸広口の方が多い。文様は多条沈線文が圧倒的で、わずかに2条のものがあり、肩部段はない。櫛描文もない。他に壺蓋の存在が目立ち、小型鉢や高坏も若干見られる。

サヌカイトは少なく、石核4点、剥片1点である。石砲丁3点、鹿角や鹿の下顎骨片も見られる。スサ入り、成形面ありの焼土塊もある。

以下に主なものについて述べる。土器は弥生土器、石器はサヌカイトである。

図43-1は大型の甕片で、口縁部周でも残存率20%に満たない。復元径にはやや不安がある。外面タテハケ後ミガキ、内面ヨコナデ後ミガキである。胎土はにぶい橙7.5YR7/3を呈し、長石・石英多し、チャート・黒雲母わずかで、産地は限定できない。2条の沈線文は河内Ⅰ-1~2様式頃か。

図43-2も甕片、残存率20%ほどである。外面は、口縁にユビオサエ残り、タタキ後ハケ、内面はヨコナデで、下部で上下の切り合いが変る。胎土は灰黄褐10YR6/2を呈し、石英・長石多し、黒雲母・角閃石わずかで、中粒砂以下で角閃石の多い、生駒西麓産である。

胴部の張らないタテハケ甕は河内Ⅰ-3~Ⅱ-2様式頃に一定数見られる。

図43-3も甕で残存率80%ほど、外面はやや荒れるが、口縁ヨコナデ、胴部タテナデ後ミガキか。内面はナデで口縁以外方向不明である。胴部外面に煤付着するが、そこに接合した破片で赤変し、煤もとんだものがあり、割れた後に被火か。胎土はにぶい赤褐5YR5/4を呈し、石英・長石多し、黒雲母・角閃石わずかで、河内低地産である。

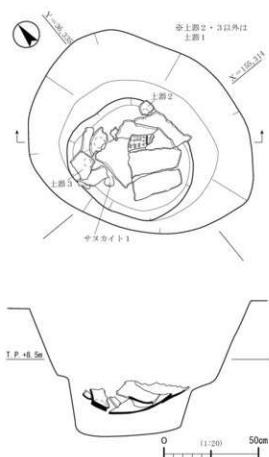


図41 田井中第7面189土坑遺物出土状況図

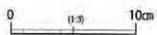
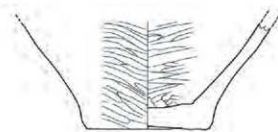
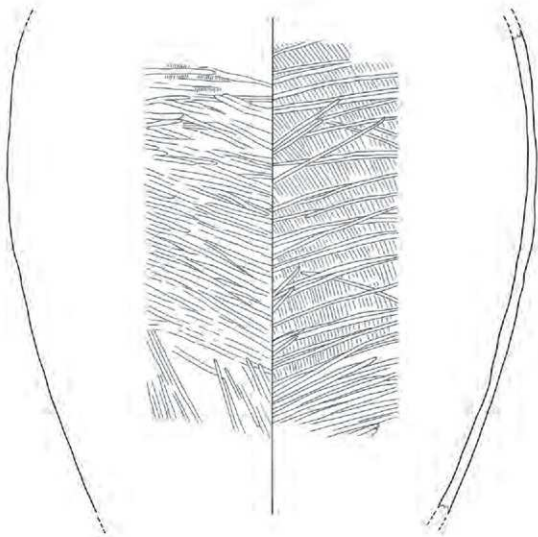
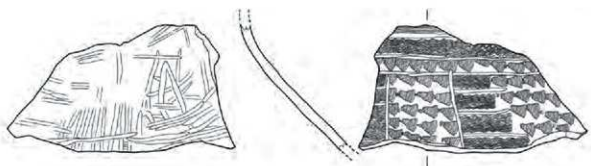


图42 田井中第7面 189土坑 土器1

あまり時期は限定できないが、河内Ⅰ～Ⅱ-2様式頃か。

図43-4も襖で残存率50%である。外面は口縁部ヨコナデ、胴部タテナデ、底部もナデ、内面はヨコナデである。胎土は灰黄褐10YR6/2を呈し、石英・長石多し、黒雲母・角閃石・チャートわずかの河内低地産である。

胴が張らず、刻み目口縁に沈線文4条は、河内Ⅰ-3～Ⅱ-1様式頃か。

図43-5も襖片である。内外面ナデで、刻み目口縁、3条の沈線文施文後、3条1単位の斜行する沈線を入れる。胎土はにぶい褐7.5YR7/3を呈し、長石・石英あり、黒雲母・チャートわずかで、産地不明である。弥生時代前期頃のものか。

図43-6は大型の襖底部で、底部周は全て残る。外面はハケで、底部はナデ、内面はヨコナデで、底部周辺のみミガキ入る。胎土はにぶい褐7.5YR6/4を呈し、石英・長石多し、角閃石若干、チャートわずかの河内低地産胎土である。時期は限定できない。

図43-7も襖底部片で、底部周の70%残存である。外面はタテナデ、底部もナデ、内面もナデで、底部の穿孔は外面からの打撃による。胎土は灰褐7.5YRを呈し、石英・長石・チャートあり、他地域産か。時期は限定できない。

図43-8は小型の鉢で、口縁をわずかに欠くのみである。外面は、ハケ後口縁ヨコナデ、底部もナデ、内面もヨコナデで、口縁のナデは左上に、胴部のナデは垂直にナデ上げる。胎土はにぶい黄褐10YR6/3を呈し、粗粒の角閃石・石英・長石・黒雲母ありの生駒西麓産胎土である。襖を縮小したような鉢は時期を限定しがたい。

図43-9も鉢片で、残存率20%である。外面は口縁にミガキ前のヨコナデ残る。内面もナデ後ミガキである。胎土はにぶい褐7.5YR5/4を呈し、長石・石英あり、中粒砂以下に黒雲母もあり、角閃石もわずかにある河内低地産胎土である。

時期は限定しがたいが、ミガキ襖が盛行している時であろう。

図44-1は蓋つまみ片である。襖の蓋か。内外面ともナデである。胎土はにぶい黄褐2.5Y5/4を呈し、長石・石英あり、角閃石・チャートわずかで、中粒砂以下でも角閃石は少ない河内低地産胎土である。時期は限定しがたい。

図44-2は壺蓋片で、残存率40%である。外面はミガキ、内面はユビオサエ・ナデ・ミガキの順である。胎土は灰白2.5Y7/1を呈し、長石・石英あり、角閃石若干で、中粒砂以下には黒雲母もある河内低地産胎土である。弥生時代前期頃か。

図44-3も壺蓋で、残存率80%である。内外面ミガキで頂部に穿孔あり。胎土はにぶい褐7.5YR5/4を呈し、長石・石英あり、黒雲母若干、中粒砂以下にわずかに角閃石ありの河内低地産胎土である。弥生時代前期頃か。

図44-4も壺蓋である。外面はミガキの下にユビオサエ、つまみは内側をユビオサエし、外側をヨコユビナデし、中央に穿孔する。内面はユビオサエ後ヨコナデである。胎土はにぶい赤褐5YR5/3を呈し、長石・石英あり、角閃石・黒雲母・チャートわずかの河内低地産胎土である。弥生時代前期頃か。

図44-5も壺蓋である。内外面ともユビオサエ・ナデ・ミガキの順で、つまみは両面ユビナデ後、中央に穿孔する。胎土は褐灰10YR4/1を呈し、角閃石あり、長石・石英若干、黒雲母わずかの生駒西麓産胎土である。弥生時代前期頃か。

図44-6は広口壺片で、口縁部周は40%ほど残存する。内外面ハケ後ミガキで、口縁端部に1条、

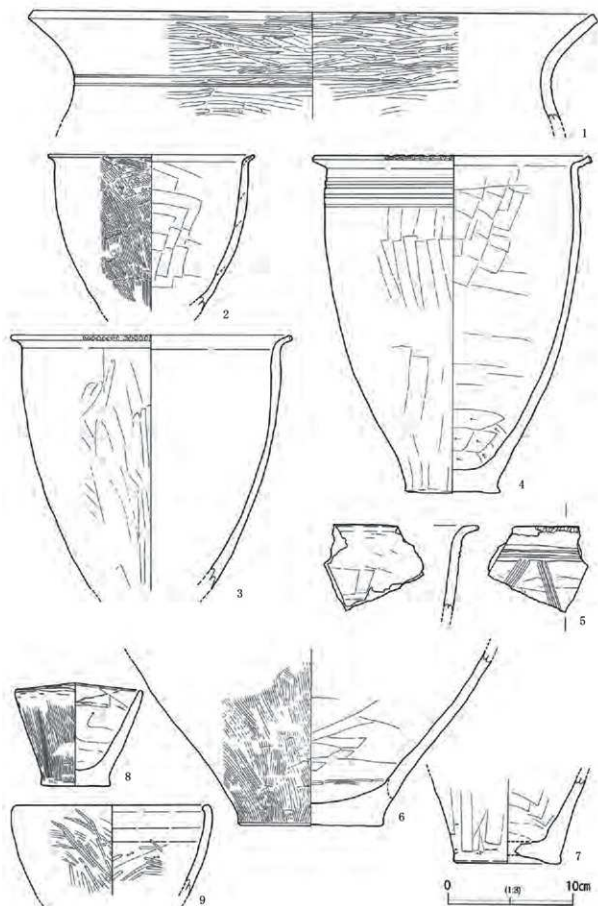


図43 田井中第7層 包含遺物（その1）

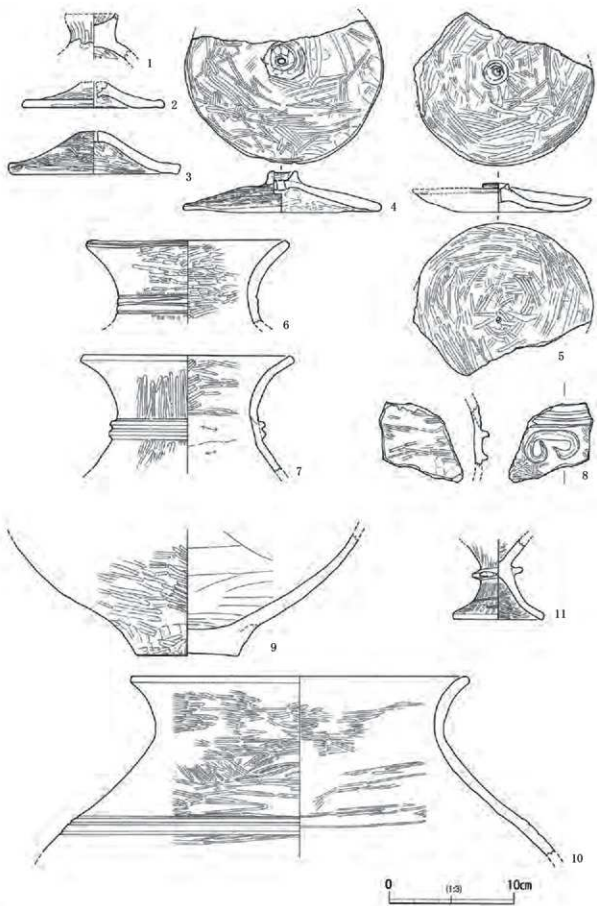


図44 田井中第7層 包含遺物（その2）

頸部に3条の沈線文を巡らす3条の沈線文帯は削り出し突帯状を成す。胎土は橙5YR6/6を呈し、石英・長石多し、黒雲母・チャートわずかで、河内低地産か。

文様と口縁端部形態から見れば、河内Ⅰ-2～3様式である。

図44-7も広口壺形で、口縁部周は30%ほど残存する。外面はヨコナデ後ミガキで、2条の貼り付け突帯がある。内面もヨコナデ後ミガキで、ミガキは頸部までである。胎土はにぶい橙7.5YR7/4を呈し、石英・長石あり、チャート・角閃石わずかの河内低地産胎土である。

図44-8は壺胴部片である。外面に貼り付け突帯による文様があり、ミガキも残る。内面はユビオサエ・ナデ・ミガキの順である。胎土は7.5YR5/4を呈し、石英・長石あり、角閃石・黒雲母若干の河内低地産である。

図44-9は壺底部片で、底部周は完周する。外面は底部側面にタテケズリ後ヨコナデの痕跡残り、全体にミガキ、内面はヨコナデである。胎土は橙5YR6/6を呈し、石英・長石多し、黒雲母・角閃石わずかの河内低地産胎土である。時期は限定しがたい。

図44-10は大型の短頸広口壺形で、口縁部周は40%ほど残存する。内外面ナデ後ミガキで、外面肩部3条の沈線文帯は削り出し突帯状を成す。胎土はにぶい橙7.5YR6/4を呈し、石英・長石多し、黒雲母・チャートわずかで、河内低地産か。

口縁端部形態と文様から見れば河内Ⅰ-2様式前後のものか。

図44-11は高環か。上部を欠く。内外面ともナデ後ミガキで、棘状突起は貼り付け突帯を削ったものである。胎土はにぶい橙7.5YR6/4を呈し、長石・石英あり、角閃石わずかの河内低地産である。時期を特定しがたいが棘状突起は弥生時代前期のものか。

図45は長頸広口壺である。口縁部周は75%ほど、胴部最大径部周は40%ほど、底部周は100%残存する。同一個体だが、口縁部・胴部・底部が接合しない。外面はハケ・ナデ・ミガキの順で、ミガキは胴部下部には及ばない。内面はナデで、口縁部から頸部にミガキである。頸部に2帯、肩部に1帯の多条沈線文帯があるが、頸部上の文様帯は27条、肩部は13条である。胎土は橙5YR6/6を呈し、石英・長石あり、黒雲母・角閃石わずかの河内低地産である。

多条沈線文があり、頸部がやや長頸化するが、口縁端部はほとんど拡張していない事を見れば、河内Ⅰ-4～Ⅱ-1様式頃のものか。

図版28-3は石核である。上辺の剝離面を打撃面とする。最大厚は30.9mmである。

第7層下面の状況 第8面である。第8層が無遺物層であり、第8面は無遺構であったので、測量はしなかった。ただ、地形としては189土坑付近に端を發し、広がりながら北西に抜ける谷状の地形が観察できた。調査区北西壁の北端を谷状地形の北東側肩部が通り、南西肩部はそこから南西へ9mほどで調査区を抜ける。最大幅8mほどか。一番深い所は深さ50cm以上ある。

おそらくは微高地上に形成された浸蝕痕であろう。それを埋めて居住域を拡大するために第7層が盛土されたものと考えられる。

小結 第7層包含遺物の時期が河内Ⅰ様式を網羅し、確實なところでは河内Ⅰ-4様式、可能性としては河内Ⅱ-2様式が下限と考えられる。そして、第6面の最古期の遺構群と第6層の遺物に時期的に近い189土坑から考えれば、第7層の盛土がなされた、この面の上限が河内Ⅱ-1様式頃、下限は最大限下って河内Ⅱ-3様式頃と考えられる。期間的には第6面の最古期の遺構群と連続性があると言え、土壌化で見えなくなった層の堆積があっても集落が存続したと言える。合わせて河内Ⅱ様式の全期間存続

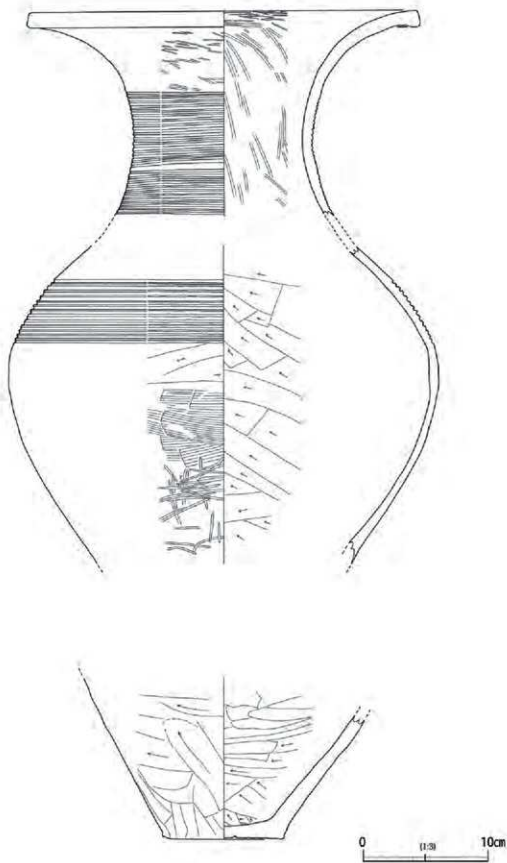


図45 田井中第7層 包含遺物（その3）



したのであろう。

第7層が、谷状の浸蝕痕を埋め、平坦地を造成するために盛土されたものと考えられるので、その中の弥生時代前期の遺物は調査区から遠くない地点にあった遺構群を削平した土砂と共に運ばれてきたものと考えられる。同一微高地上に弥生時代前期の遺構集中域が存在した可能性が高い。

しかし、その器種構成は、壺が甕より多く、集落的ではない感じである。また、生駒西麓産胎土が非常に少ないのも特徴的であろう。

#### 第10項 田井中12-1のまとめ

今回の調査では、第1面から第7面まで、計8面の遺構面を調査し、弥生時代前期から中世頃までの時期についての成果を得られた。

**条里制地割** 第1面から第4面が条里制地割施行後の耕作地と考えられ、正方位の耕地区画の存在が確認されたが、第1面の浸蝕痕の存在、第2面で恒常的な畑地となっていた可能性が高い事、第4面での非正方位の耕地区画の混在など、木の本12-1とは異なる様相が見て取れる。それらはいずれも耕地化した微高地に発生する現象と言えよう。

ただし、第3面で坪境でない位置で畦畔を伴う水路が検出されたのは木の本12-1の成果と似る。この付近の条里制地割の、中世頃の特徴であるのかもしれない。ただ、水回しが北からの可能性が強く、2調査区付近の配水方向が異なる可能性がある。今後条里制地割の調査が進めば、ある程度広域の水利体系が明らかになってくるであろう。

**古墳時代中期から奈良時代** 結果的には、飛鳥時代から奈良時代は、遺物も皆無に近くほとんど人の手が入っていない時期のようである。第5面は古墳時代中期から後期の面と考えるのが妥当であろう。そこで地形に合わせた小区画水田が検出できたのは貴重な成果である。また、第5-3面で量は少ないが良好な遺物資料が得られ、古墳時代中期前半頃の時期が特定できたのも大きな成果である。

**弥生時代中期から古墳時代前期** 第6面の時期にあたる。長い期間であるが、3時期に分けられるのは先述した。ただし、その中でも弥生時代中期後葉から後期の期間に遺物が極端に少なく、ほぼ空白期と言えるのが注目される。弥生時代遺物はその時期以外は面が変わっても時期的断絶は見られないので、ここに大きな画期を見る事ができる。

その次の古墳時代初頭、庄内式期に、143井戸の遺物群があるのが象徴的とも言える。この良好な一括遺物が今回の調査の最大の成果であろう。これにより田井中遺跡の庄内式期の性格が明確になったと共に、河内庄内式土器の編年にも大きく寄与できるであろう。一括性の高さと量的な裏づけの双方を備えているので、どのような型式差が同時期存在し、どのような形式段階が設定できるかの目安になるものであろう。

**弥生時代中期前葉** 第7面から第6面の最古の遺構群までの時期に当たる。この時期が調査地点で明確な弥生時代集落域と言えるものである。田井中遺跡では集落域の東への拡大・移動と捉えられるが、実態としては新たな微高地の集落域としての開発なのであろう。第7層の盛土は、そのためのものと思われる。ただ、建物類が検出できなかったので、集落の実態はいまだ不明確である。

**弥生時代前期** 第7層の包含遺物である。弥生時代前期前葉の遺物も含み、調査地点より西側で検出されている集落域と何らかの関係があると思われる。しかし、先述したとおり、壺類が多い非集落的な器種構成は、どのような遺構群の反映であるかが問題となろう。

今後の課題 条里制地割の実態、特に広範囲での水利体系の把握が待たれる。また、条里制地割施行時期などの画期の時間的特定も重要な課題である。

今回の調査では、付近に飛鳥時代・奈良時代の集落の存在はなさそうである。しかし、古墳時代中期には遺構は少ないが井戸があり、これを集落の証拠としていいのかが微妙であり、遺跡全体でも不明確な事が多いこの時期の解明も必要であろう。

古墳時代初頭から前期は良い資料が得られたが、遺構論は未だ踏み込めない感じがある。それは膨大な量の土器資料が蓄積されている弥生時代にも言える事であろう。

弥生時代前期では、近くに遺構面が存在するのはほぼ確実と見られ、器種構成で壺が最多となる遺物群が、いかなる遺構に伴うものか興味のあるところである。

## 第4章 まとめ

今回の調査では、木の本遺跡と田井中遺跡に一つずつ調査区があり、両者を比較する機会に恵まれたと言える。既往の調査のイメージで言えば、微高地に弥生時代の集落が広がる田井中遺跡と、その生産域でもある低地が広がる木の本遺跡となる。

しかし、調査の結果としては、幾分田井中12-1のほうに、浸蝕痕・畑の存在など微高地的な特徴が濃く見えたが、弥生時代に関してはそれほど違う状況は見えなかった。最古の条里制関連の遺構が見られる面も、田井中12-1の第4面と木の本12-1の第4面の高さの平均値を比較しても、田井中のほうが高いと言っても10cmにも満たない差である。

近年の調査で明らかになってきたように、両遺跡の中では、弥生時代以前に網状の流路間に小規模な微高地が形成されたのが微地形の基礎となっており、大規模な微高地の存在は知られていない。遺跡範囲にこだわらず、微高地ごとの状況の把握が必要なようであり、おそらく今回の調査地は、同一の微高地に立地していた可能性が高い。

また、木の本12-1では第5層から第6-2層が、田井中12-1では第5-1層から第6層が黒色系で暗色帯を成し、弥生時代から古墳時代の遺物を含んでいた。この暗色帯は、既往の調査でも認識されているが、そのまま鍵層として各調査区で同時期的と見ると時期の認識を誤る事になる。

今回の調査でも、この暗色帯の中の層には耕作土層・自然土壌・盛土など形成要因の異なる層があり、場所によってその組み合わせも異なる事が認識できた。

木の本12-1の第5層のような耕作土層は、耕作が継続している間は遺物が新たに包含されていくし、上面だけでなく、下面にも床面遺構として遺構が形成される。

田井中12-1の6層のように自然土壌である場合、基本的には、堆積層としては下層と同一層だが、土壌化の範囲で堆積層が加わり、それが土壌化の進行によって認識できなくなった場合、包含遺物が異なる事がある。また、遺構が検出できる面と、本来切り込んでいた面も異なる事になる。

盛土は、弥生時代には広範囲になされる事は少ないだろうし、主に微高地に切り込んだ浸蝕痕の埋め立てや、緩斜面の平坦而造成、水路を通すための微高地の連結などで、狭い範囲に為されると考えられる。だから、質が似て、どちらも盛土と考えられると言っても、木の本12-1の第7層は弥生時代中期のもので、田井中12-1の第7層は弥生時代前期の遺物のみである。今回の調査ではその点に留意する事ができた。しかし、検出面と切り込み面が異なるため、報告の記述はやや複雑となる。留意願いたい。

調査成果で、貴重な事例やある程度の量の遺物の報告はできたと思うが、結果としては十分な遺物の報告ができたとは言えず、多数の良好な資料が残っている。本報告書を手がかりの一つとして、それらを活用願えれば幸いである。

### 参考文献

- 寺沢薫・森岡秀人 1990年『弥生土器の様式と編年 近畿編1』木耳社  
杉本厚典 2006年『河内地域』『古式土師器の年代学』(財)大阪府文化財センター  
本間元樹 他 1997年『田井中遺跡(1~3次)・志紀遺跡(防1次)』(財)大阪府文化財調査研究センター  
岩崎二郎 他 2004年『木の本遺跡』大阪府教育委員会

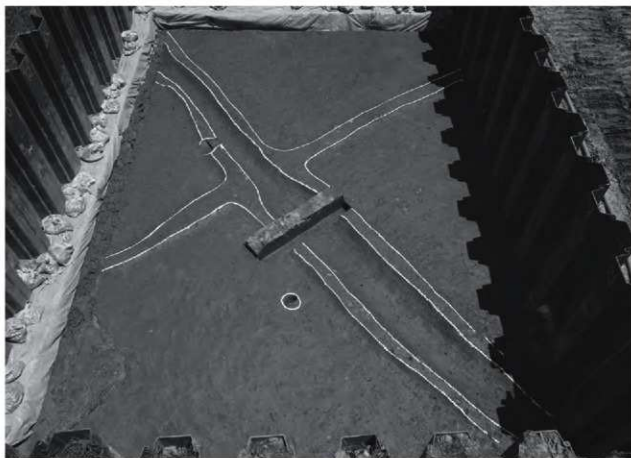


# 写 真 図 版

(遺物はサヌカイト製石器類のみ)



1. 木の本 第1面 全景 南西から



2. 木の本 第2面 全景 南西から



1. 木の本 第3面 全景 南西から



2. 木の本 第4面 全景 南西から



1. 木の本 第5面 全景 南西から



2. 木の本 第6面 全景 南西から





1. 木の本 第6-2面 全景 南西から



2. 木の本 第2面 6・8畦畔・7層断面 南から



3. 木の本 第3面 地層変形と乾痕 南西から



4. 木の本 セクション断面 (1-4層) 南から



5. 木の本 第6面 44落込 南西から



1. 木の本 第6-2面 457溝・54～56ピット 南から



2. 木の本 第6-2面 46落込木材1～3 南東から



3. 木の本 第6-2面 48溝南東端 北西から



4. 木の本 第6-2面 49落込 南東から



5. 木の本 第7面 全景 南西から



1. 木の本 第7面 54土坑 北から



2. 木の本 第7面 65溝土器群1 南東から



3. 木の本 第7面 75落込土器群1 南から



4. 木の本 第7面 89土坑 南から



5. 木の本 第7面 95土器群 南西から



6. 木の本 第7面 北西壁断面(5~8層) 南東から



7. 田井中 北西壁断面(1~4層) 南東から



8. 田井中 攪乱壁面 第5-2層 土師器坏出土状況 北東から



1. 田井中 第1面 全景 北東から



2. 田井中 第2面 全景 北東から



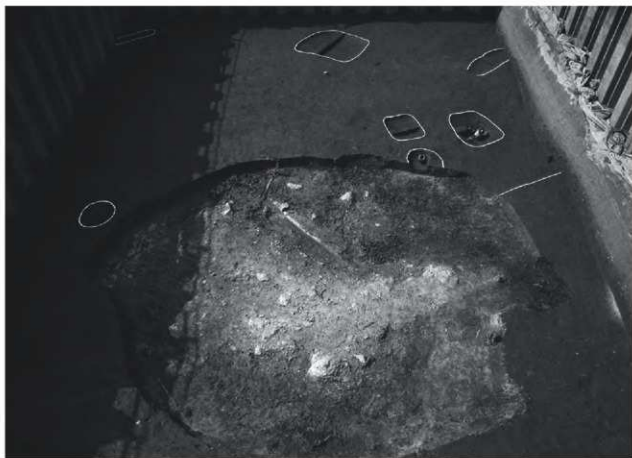
1. 田井中 第3面 全景 北東から



2. 田井中 第4面 全景 北東から



1. 田井中 第5面 全景 北東から



2. 田井中 第5-3面 全景 北東から





1. 田井中 第5-3面 63ピット 南西から



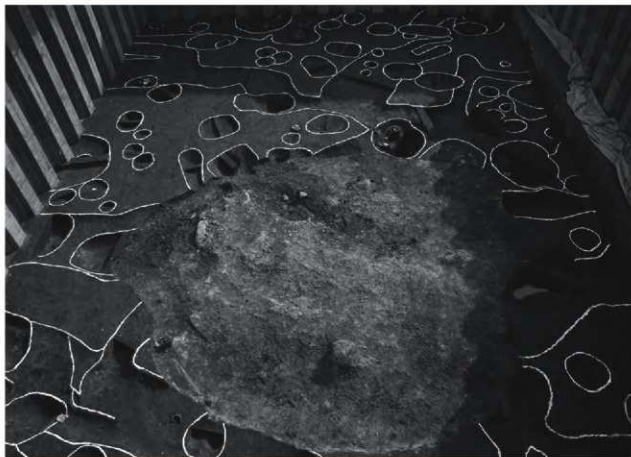
2. 田井中 第5-3面 65井戸 西から



3. 田井中 第5-3面 65井戸断面 東から



4. 田井中 第5-3面 65井戸底部 南東から



5. 田井中 第6面 全景 北東から



1. 田井中 第6面 南西壁附近 北西から



2. 田井中 第6面 95土坑 北西から



3. 田井中 第6面 117井戸 南西から



4. 田井中 第6面 119溝 北西から



5. 田井中 第6面 134井戸 西から



6. 田井中 第6面 147土器群 南西から



7. 田井中 第6面 148土器群 南西から





1. 田井中 第6面 143井戸 北東から



2. 田井中 第6面 143井戸 南東から



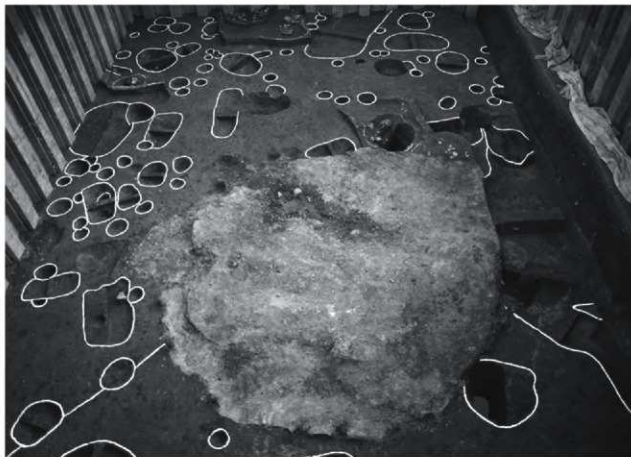
3. 田井中 第6面 143井戸 北西から



4. 田井中 第6面 143井戸完掘状況 北西から



5. 田井中 第6面 120落込土器群1 東から



1. 田井中 第7面 全景 北東から



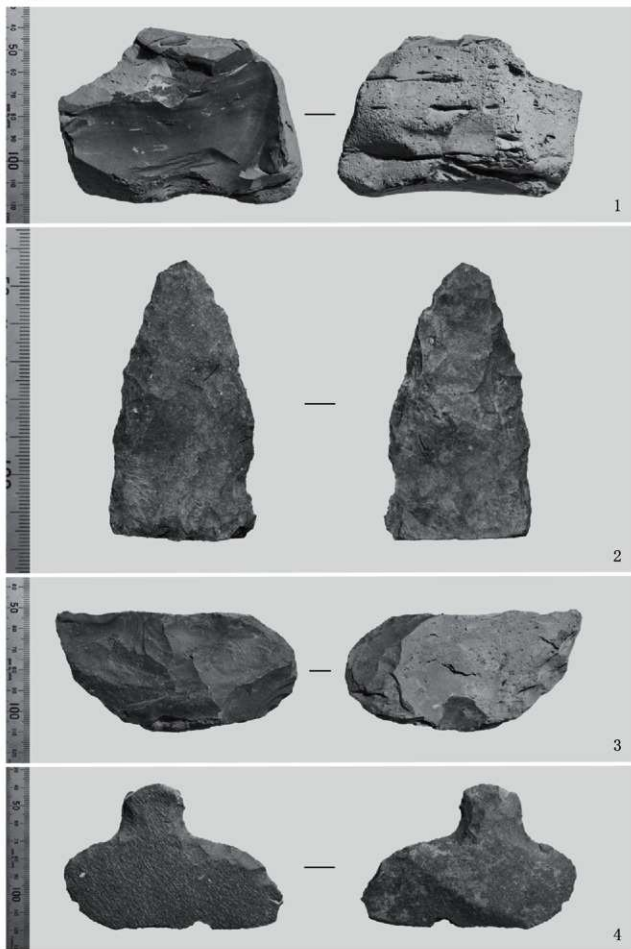
2. 田井中 第7面 158 焼土土坑 北西から



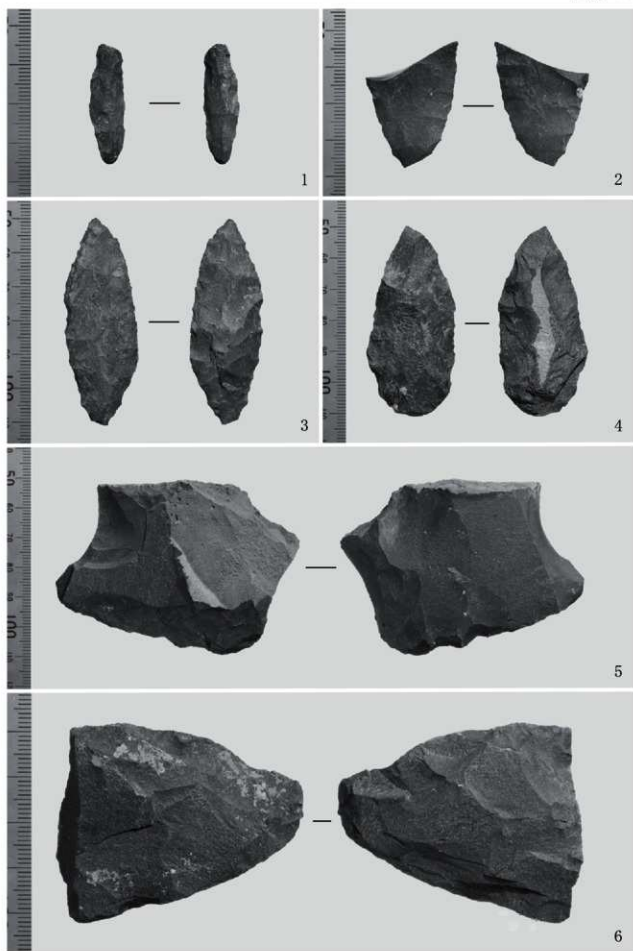
3. 田井中 第7面 189 土坑 南東から



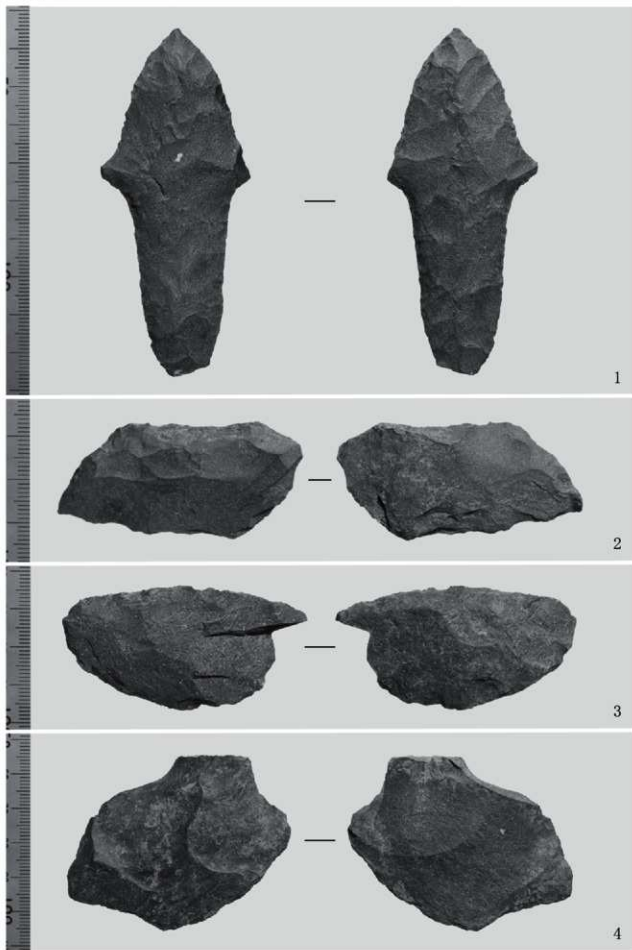
4. 田井中 北西壁断面 (5~8層) 南東から



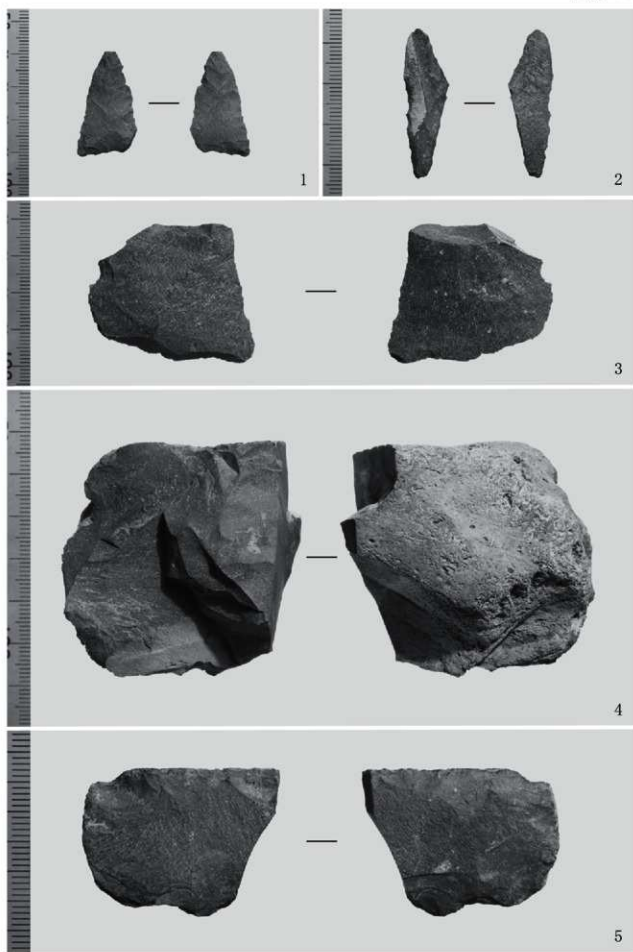
木の本 (1: 第4層、2・3: 第5層、4: 第6-1層)



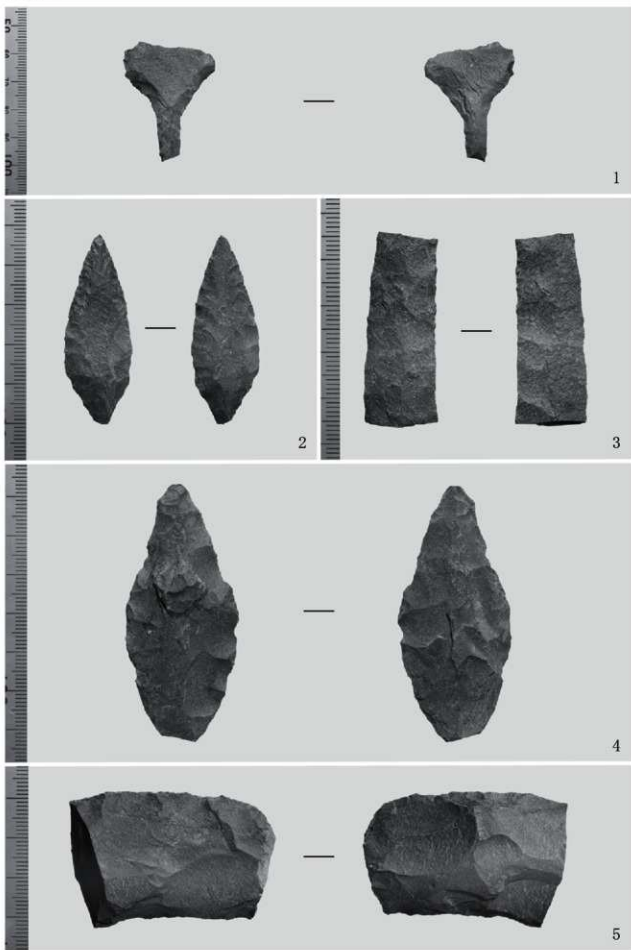
木の本 第6-1層

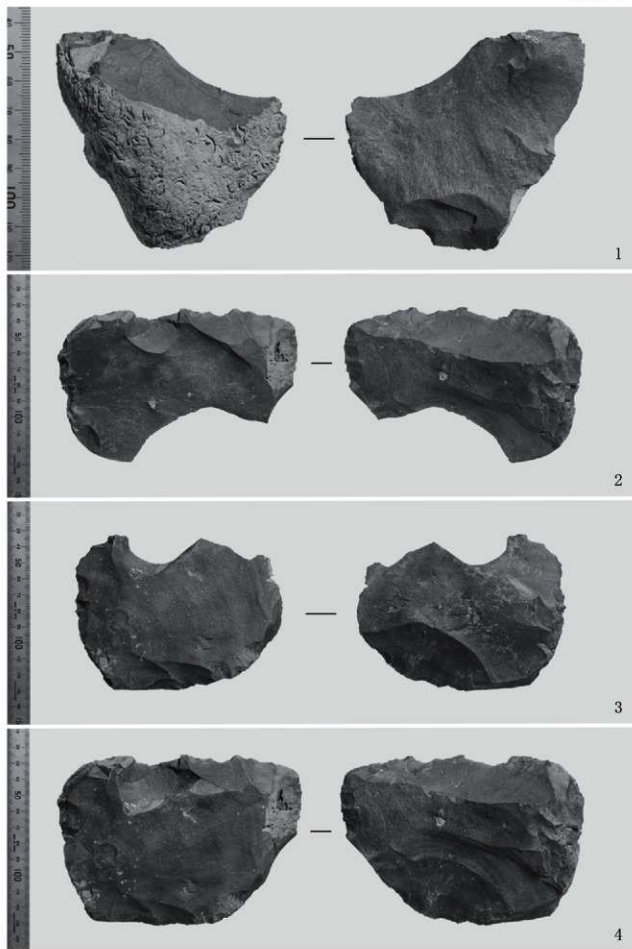


木の本 第6-1層



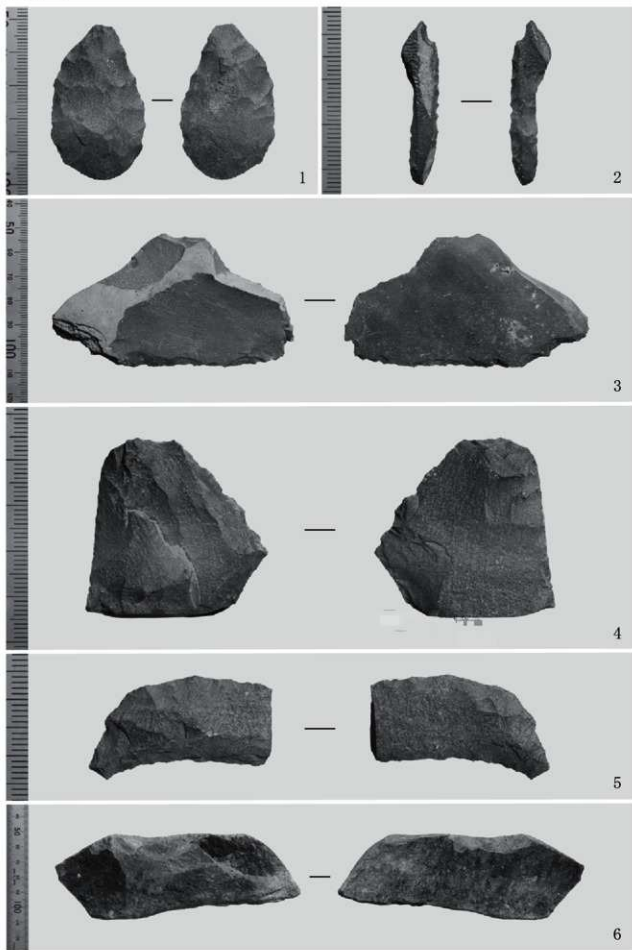
木の本 1: 第5層、3: 第6-1層、2・4・5: 第6-2面 (2・4:44 落込、5:48 溝)



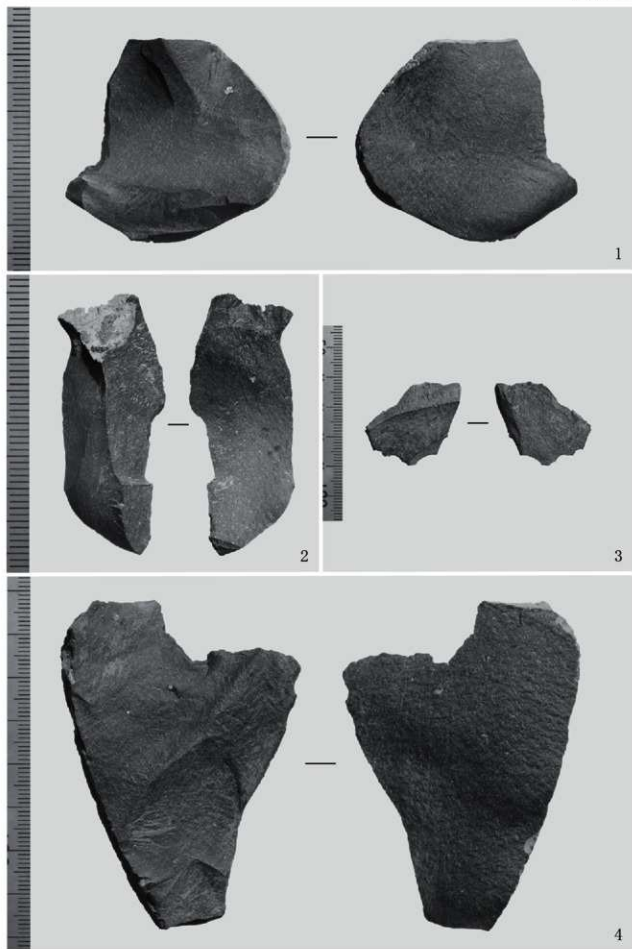


木の本 1: 第6-2面49落込、2~4: 第6-2層

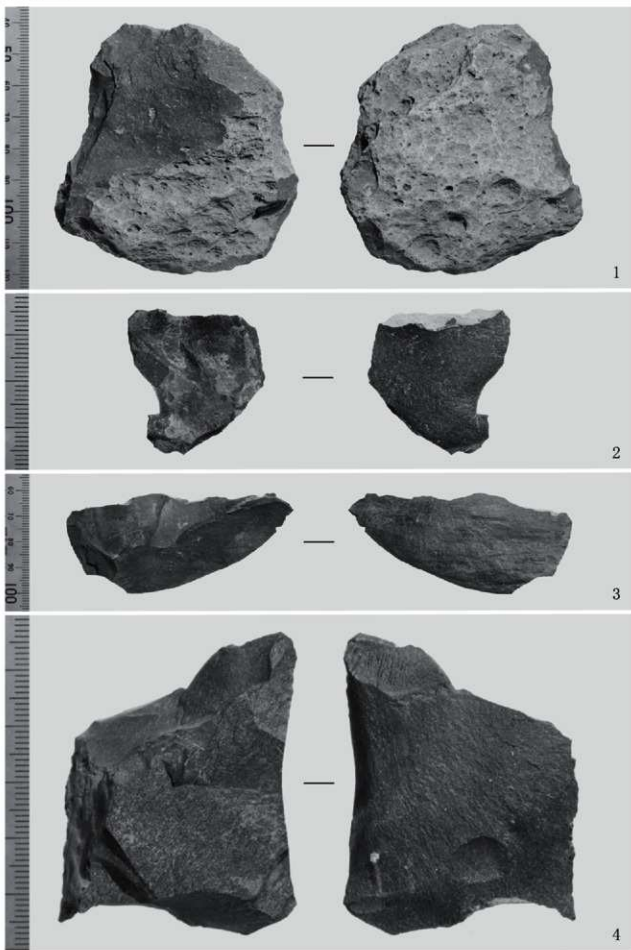


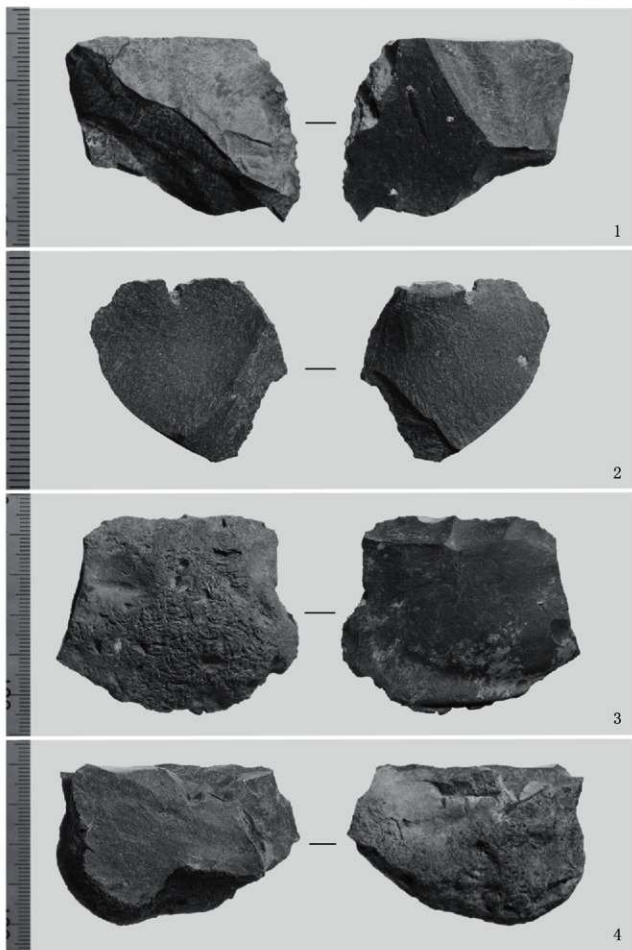


木の本 1: 第6-2面48溝、2・5・6: 第7面65溝、3: 第6-2層、4: 第7面58落込

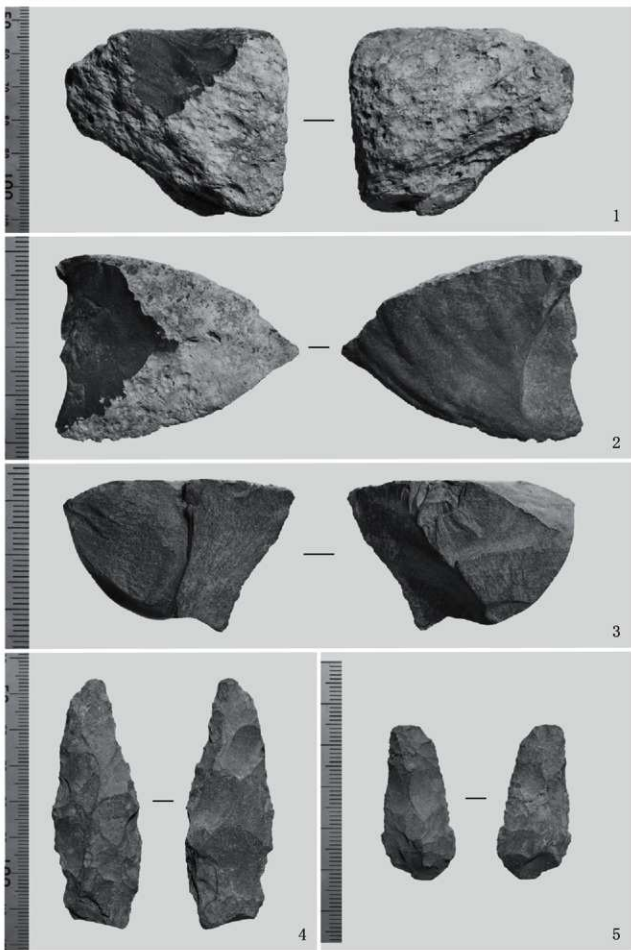


木の本 1: 第7面65溝、2~4: 第7層

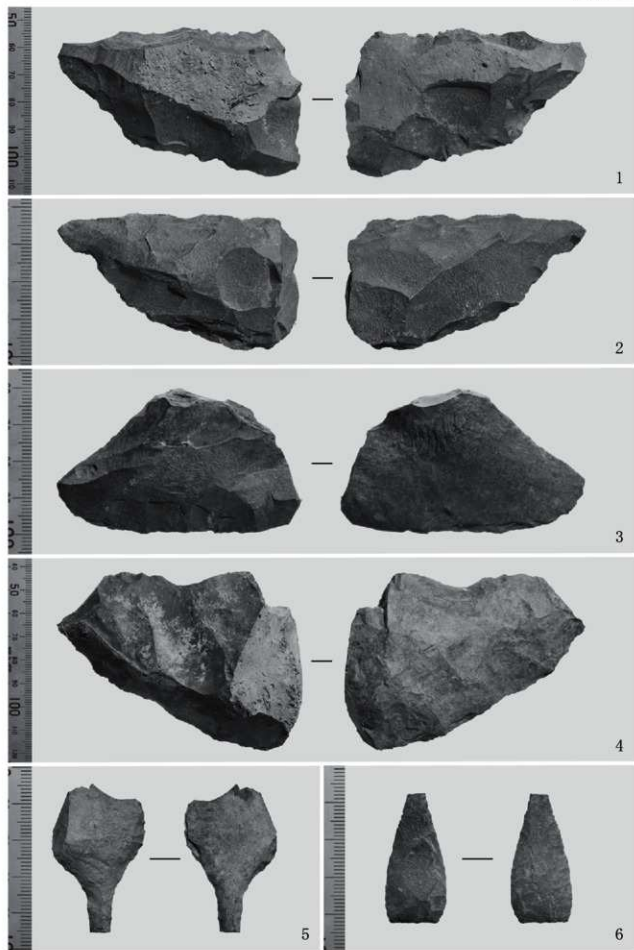




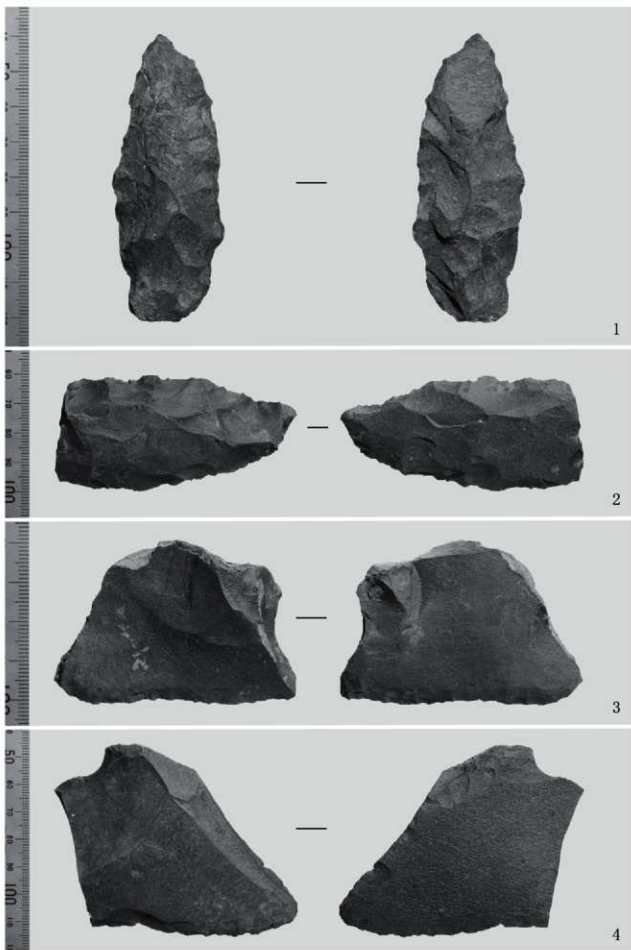
木の本 第7層



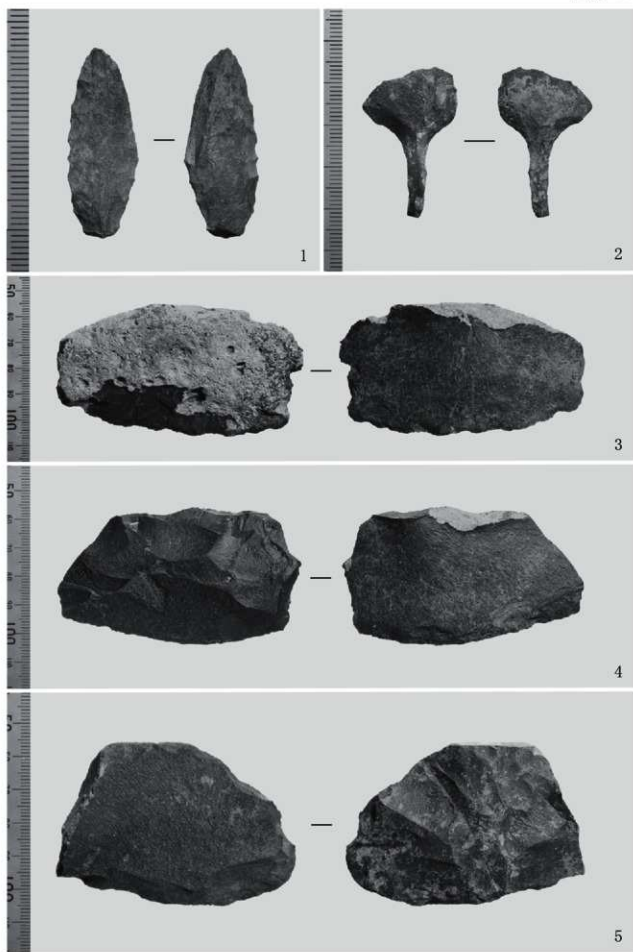
木の本 第7層 (1~3) 田井中 第4層 (4・5)



田井中 1・2: 第4層、3-5: 第5-1・2層、6: 第5-3層

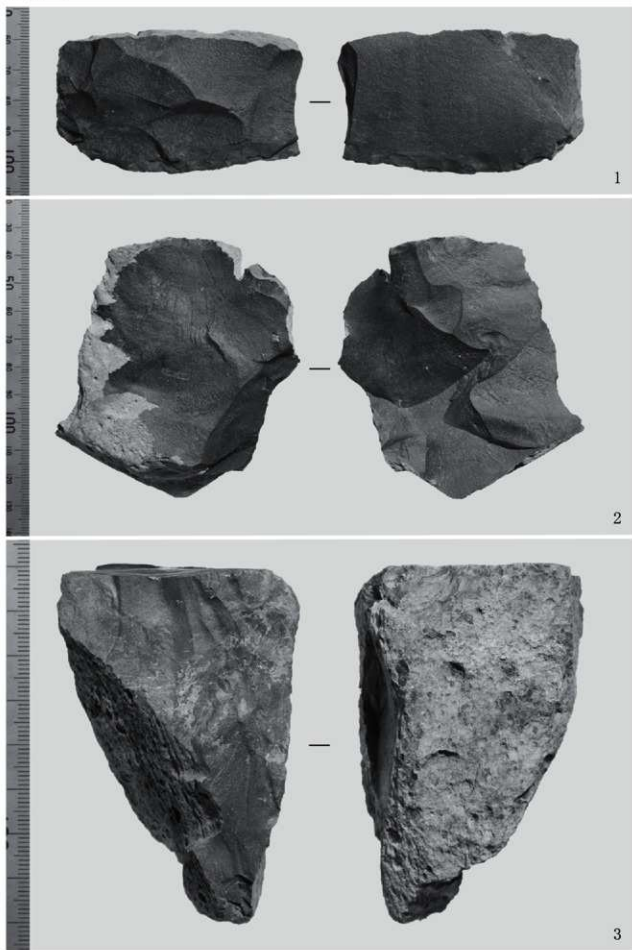


田井中 1-3: 第5-3層、4: 第6面 131土坑

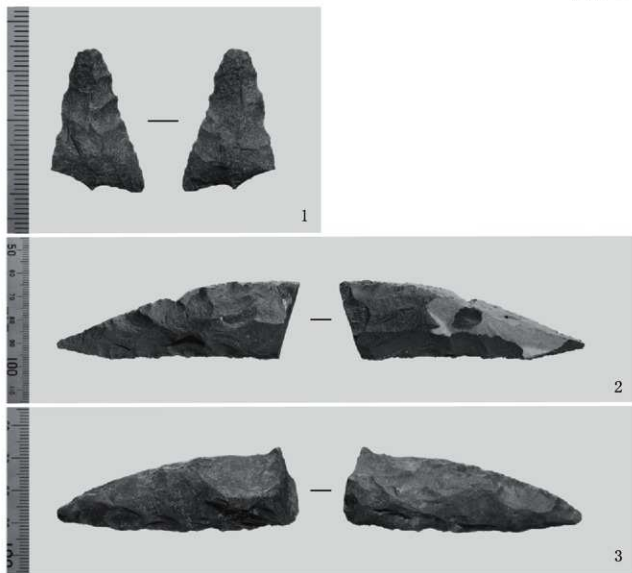


田井中 1: 第5-3層、2・5: 第6層、3・4: 第6面 134井戸





田井中 1: 第6層、2: 第7面 189井戸、3: 第7層



田井中 1: 第7面 189 井戸、2: 第7面 172 土坑、3: 第6面 126 溝

# 報告書抄録

ふりがな	たいなかいせき2・きのもといせき							
書名	田井中遺跡2・木の本遺跡							
副書名	陸上自衛隊八尾駐屯地内電源施設新設に伴う埋蔵文化財調査							
巻次								
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第235集							
編著者名	三宮 昌弘							
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL 072-299-8791 FAX 072-299-8905							
発行年月日	西暦 2013年2月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たいなかいせき 田井中遺跡 きもといせき 木の本遺跡	おおさかふ 大阪府 やまし 八尾市 くうこう 空港1-81	27212	69・35	34° 36' 02"	135° 36' 01"	平成24年 7月2日～ 平成24年 9月29日	228㎡	八尾(23 震災関連) 電源施設 新設等
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
田井中遺跡 木の本遺跡	田畠	古代～ 中世	水田・畑・畦畔・溝・水路・ 水口・土坑・ピット・落込・ 段差		瓦質土器・瓦器・青磁・黒色 土器・土師器・須恵器		条里制地割内の耕地区画・ 水路の変遷、最古の条里制 地割	
	集落・ 水田	古墳	井戸・土坑・ピット・落込・溝		土師器・木器		古墳時代初頭、庄内式期の 良好かつ大量の一括資料	
	集落	弥生	井戸・土坑・ピット・溝・落込		弥生土器・石器		大量の弥生土器、中河内最 古級の弥生土器資料	
要約	<p>今回の調査では、古代から中世に至る、正方位の耕地区画が検出され、条里制地割の変遷が追えた。</p> <p>古墳時代では古墳時代中期の遺構・遺物も見られたが、井戸より出土した古墳時代初頭、庄内式期の大量の一括資料は、土器編年上の良好な基礎資料となるものである。</p> <p>弥生時代では多数の遺構や整地の盛土が見られ、出土した土器量も膨大である。弥生時代前期にまとまる土器群もあり、中河内の弥生時代の始まりを示す貴重な資料となった。</p>							

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第235集

## 田井中遺跡 2・木の本遺跡

陸上自衛隊八尾駐屯地内電源施設新設等に伴う埋蔵文化財調査

発行年月日 / 2013年 2月27日

編集・発行 / 公益財団法人 大阪府文化財センター  
大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本 / 株式会社 明新社  
奈良県奈良市南京終町3丁目464番地